月に虹が掛かる刻

蒼衣翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月に虹が掛かる刻

【Ｎコード】
Ｎ２２９１Ｌ

【作者名】
蒼衣翼

【あらすじ】
虹也には幼い頃の記憶がない。夜の山の中で今の両親に拾われたのだ。そして、高齢でその両親に先立たれた彼を、運命の変転が襲う。
訪れたそこは、現代日本に似て異なる世界。
現代異世界迷い込みファンタジーです。

始まりの夜（前書き）

普通の異世界召喚ものを書こうと思って考えたらこうなりました。よくある古代や中世みたいな世界が舞台のお話ではありません。おかしい、そういうのが書きたかったのに。……何かが間違った！でも、ちょっと趣の違うケモノ耳とかの異種族は出る…よ？

始まりの夜

世界がゆっくりと冷えてゆく。
まるで全く別の何かに変わって行くかのように、無機質で冷たい感触に変化しゆく母の手を握りしめ、虹也(こうや)はそんな風に感じていた。

虹也はため息を吐くと、縁側へと続く廊下からガラスの引き戸を開けて、暗い夜空を照らす月を見上げた。
白く輝く満月は、いっそ非現実的なほどに美しい。
「父さん、母さん、早すぎるよ。後もうちょっとぐらい待てなかったのかよ」
囁くような文句は、ほの白い月の光に溶け出すように消えた。

『あら、コウくんたらぶつぶつ独り言？ふ、変な所がお父さんに似ちゃったわね』
『なにを言う、独り言の多いのはお前だろうが』

脳裏にふわりと浮かんだ声に、虹也は、我知らず微笑んだ。
父はともかく母は突然逝った訳でもないのに、葬儀も納骨も済んでも、未だにそこに二人がいるように思ってしまう。
台所でオリジナルの工夫（思いつきとも言う）をした菓子を試作して甘い香りを漂わせている母。
部屋で自慢の将棋盤に駒を置いて、分かりもしない自分に意見を聞こうとする父。
訳あって年の離れた親子だったが、そんな事を気にしようも無い程に自然に皆がそこにいた。
虹也は止めどもない想いを振り切るように、軽く自分の頭を殴る。

「皆にもすっかり心配掛けたし、早めに連絡入れておかないとな」
ふと思い立って、友人達に電話かメールをと考えたが、携帯は部屋に置いて来ていたし、家の電話は玄関だ。
今は無理だと分かって落ち着いて考えてみれば、連絡は明日に延ばした方が良いだろうと気付く。
こんな時間に突然思い付いたからといって、久方ぶりに連絡するのはいくらなんでも唐突すぎると思われた。
皆ずっと気を使ってくれていたのだ、ゆっくりと話せる時の方が良いに決まっている。
「満月か」
虹也はこの月が見たくて縁側を降りたのだ。
母がよく自分の事をかぐや姫に例えていた事を思い出す。

『俺は男だもん』
『そうねぇ、だからきっと月へ帰ったりしないわよね』

母はきっと不安だったのだろう。
息子が実子ではない事が。

そう、虹也は両親と血は繋がっていなかった。
尤も、大概の人間は、何も知らなくとも彼等親子になんらかの事情がある事にすぐ気付いただろう。
両親と彼の間の年齢の差はそれぐらい大きかった。
なにしろ虹也が物心ついた頃には、両親は既に７０歳を越えていたのだから。
そういう制度があるらしく、戸籍を調べたとしても彼は養子ではなく実子となってはいたが、両親は彼にその事を最初から隠さなかった。

『満月でね、二人で裏の竹林でお月見をしてたの。そしたら月の周

りに虹が掛かってて、綺麗ねぇって』
『……』
『これだから年寄りは、話しが脱線してるぞ』
『まぁ、年寄りはあなたの方でしょうに、お口の悪い事ときたら』
『男は年を経る毎に渋味を増していくんだよ。だけどな、女は年を取ると……っく！待て！酒を人質にするとは卑怯だぞ！』
『ほほほ、何をおっしゃいますやら』
『えっとね、父さんも母さんもいちゃつくのか俺の拾われた状況を説明するのか、はっきりとね。いちゃつくなら俺は寝るから』
『あらあらコウちゃんが拗ねちゃった』

虹也は溜め息を吐いた。
思い出はあまりにも当たり前にそこにあって、意識しなくても顔を出す。
それはまだ、浸るにはあまりにも近く、そして、求めるにはあまりにも遠かった。
要するに両親によれば、虹也は月に虹が掛かる夜に竹林で発見された子供だったらしい。
彼等の語る話は、無駄にロマンチックな出来事にされていた。
だが、両親の語らなかった事実もある。
全身に火傷があり、服もぼろぼろで、しかも見掛けから5、6才と思われるにも関わらず、一切の記憶が無かった子供。
いや、記憶だけではない、一切の知識、言葉すら持っていなかったのである。
警察の見解で、虐待の末の殺人未遂、その果ての遺棄ではないか？とまで大事になり、当時の新聞やＴＶでもかなり騒がれたらしいが、結局身元が判明せず立件されなかったらしい。
らしいばかりで嫌になるが、その頃の記憶はあまりにも混沌としていて、彼自身が一番もどかしいのだ。
両親は警察騒ぎになった事は全く告げなかったのだが、気になっ

て自分で当時の新聞を調べたのである。
この時はさすがに酷い精神状態になって、両親に心配を掛けてしまった。
「焼き殺すつもりだったのかなぁ」
考えると腹が立つが、一方でそれで両親に出会えたのだから人生は結構上手い事出来てるのかもしれないとも思うのだ。
そんないかにも訳ありな子供を自分の実子として引き取るとは、本当に物好きな両親だなと思う。
……心から、思う。
「まぁ、本当の親に会いたいとは思わんのだからどうでも良いか」
漆黒のはずなのに満月がほの碧く周囲を染め、星の潜んだ、ただ月だけが照らす遠い天上。
その深く遠い夜空には不思議と心が満たされる。
彼は子供時代からよく体調を崩したのだが、こうやって月を見上げると、いつも不思議と体が軽くなった。
拾われた時の事を思えばトラウマになっていてもおかしくないようなものだが、彼は満月が好きである。
古来から月には不思議な力があると言われているが、きっとそうなのだろうと彼にも思えた。
「よし、元気充填完了っと」
もはや、自分が彼等の子供として恥ずかしくない生き方をする事でしか恩返しが出来ないなら、嫌でも前向きに進むしかないのだ。
元気が出るのは良い事なのだろう。
めそめそするのは自分のキャラじゃないし、第一両親からどやされそうだ。
「月の虹か」
残念ながら彼は未だそれを見た事がない。
自身の名前の由来でもあるのだから一度は見てみたいなと、そんな事をのんびりと考えながら屋内へ戻る前の一瞥を、真円のその姿へと向ける。と、

「あ……」

丸い月の周りを囲むように、モノトーンの世界を鮮やかに塗り替えて、そこに虹が在った。

『行くのよ、そして、どうか僅かな時であっても安らぎを、つくよみのひめのご加護のあらん事を』

始まりの夜（後書き）

自サイトの方で週1の連載をやっているので、こっちは少し進行が遅いかもしれません。ぼちぼち楽しんでいただけたら幸いです。

暗夜の道程

『熱い！苦しいよ！ねえさま、ねえさま、どこ？』
ぢりぢりと全身を炙る熱気。熱い、息が苦しい、痛い、痛い、イタイ！
明かりは無いのに明るい、いや、赤い。
訳の分からない恐怖が体を支配する。
『ねえさま？』
かすれたような声しか出ない。
なぜ？
そうだ、姉を見つけなければ。
姉様がきっと何とかしてくれる。
それは絶対の信頼。もはやそれ以外何も浮かばない程の。
燃える世界が押し寄せてくるその只中で、それのみが支えの道標。
『シロ、シロくん！無事なの？』
姉様だ。
良かった、もう何も心配いらない。
恐ろしかった赤い光が、姉を照らすだけで美しいものに変わる。
姉様、寝間着だし髪の毛が酷い寝癖だ。普段は凄く身だしなみを気にするのに。
きっと気付いたら大騒ぎだな。
笑みさえが零れた。

「あ……」
その放心は、ほんの僅かな物だった。
少なくとも主観ではそうだ。
まるで今ここで起った事のように鮮明ではあったが、あれは記憶であり、回想であり、夢ではない。

いくらなんでもその区別はつく、……はずだ。
なのに、その一瞬から覚めてみればどこか知らない場所だったとか、そんな事が有り得るのだろうか？
「うちの庭……じゃないよな？」
いやいや誰に聞いてんの？と、心の中で一人突っ込みをやりながら、虹也は真剣に困惑した。
彼はほんの今まで自宅の庭にいた。
その証拠に部屋着に庭用のサンダルだ。
寝間着ではないにしても決して外出の格好ではない。
なにより、彼には自分の意識が途絶えたという実感が全く無かった。
惚けていたのと意識が無いのは違う、全く違うはずだ。
「なら、ここはどこだ？」
夜なのは同じ、足元もやっぱり土だ。
だが、周りに見覚えはない。母が丹精込めていた庭の花々の跡形もなかった。
月明かりのみではっきりとは断言出来ないが、僅かに生えているのは雑草だろう。空気は少し湿っぽい。雨の後の空気に似ているが、今日は確か晴れていたはずだ。
見回すと周囲に木が見える。が、山の中という程密集していないようだ。広い公園の一部に見えない事もないか？
少し右手に進んだ先に開けた場所がある。
人の気配、というか、生活の気配があった。
道路……？があるのかな？
？なにか変だ、頭がやたらスッキリしている。
いや、今はその事は放っておこう。
とにかく状況を把握するのが先だ。

『何かとんでもない事にぶち当たった時こそ冷静さが必要だ。情報の収集、切り分け、判断の即時性、全てはクリアな視界の内にある』

父は昔民族学の教授だったらしいが、それ以上に冒険者であり、探索者であった。
結果の一つとして著作があり、研究があっただけだと言っていた。
その薫陶を受けて育ったおかげで、彼の感覚は常に疑問を探す。
「と言っても今は疑問だらけなんだけどな」
月一つが照らす地面を踏んで、一歩、一歩を進む。
陽の光とは違う晒したような白い光は、黒々とした地面に儚い陰影を刻んでいる。
「満月で良かったな、暗闇でこんなとこ歩けないぜ」
やっと数歩先に街灯らしき明かりが見え、なんとなくほっとして一際黒々とした何かの木の影に足を踏み入れた時。
ぞくりと、背がざわめいた。
なぜか急激に不安が押し寄せる。
(怖い怖い怖い)
全身が凍るような恐怖。
足が酷く重い。
(このままここに座り込んでしまいたい)
(いや、違う)
これは異質な感情だ。彼の中心に馴染まない。はみ出している。
気付くと共にケラケラとわらう”モノ”があった。
足元に何かが絡んでいる。
黒々と黒々と、嗚呼ソレは見えていたよ……。

「おい！君！」
声に、我に返る。
「あ、あれ？」
「君！大丈夫か？」
正面から強い光を受け、虹也は思わず片手で顔をかばった。
声にはどこか命令の響きがあったが、高圧的な物というより気遣

いに近く感じる。危険な感じはなかった。
「大丈夫です、ありがとうございます」
「早くこっちへ！暗鬼に捕まるぞ！」
（あんき？）
虹也は首をかしげながらもそれに大人しく従い道路へと出る。
振り向いて見ると、自分の出て来た場所は暗く闇に沈んだ洞のように見えたが、昼間に見れば単なる雑木林に過ぎないのだろう。
それにしても、先程の感覚は何だったのか？
「君、灯明は？御符は持ってるのか？」
「は？とうみょう？ごふ？」
人工的な明かりの下でよくよく見ると、相手の服装は制服のような物だった。
端的に言えばガードマンの物か、彼の知ってる物とは違うが、警官のような印象だ。
（もしかして警官？ここ半年ぐらい世間から離れてたからその間に制服変わったのかも？）
「なんだ、そのいかにも飛び出して来ましたみたいな格好は？深夜に何の防備も無しで灯りのない場所をフラフラするとか、自殺でもするつもりなのか？」
「ええっと……」
何をどう説明して良いか分からずに彼が戸惑っていると、相手は痺れを切らしたか、
「ともかく事情を聞かせてもらうから一緒に来なさい」
と、手を取った。
（あ、やっぱり警察の人か）
ストンと納得して、頷いた。
その時なぜ納得したのか、彼自身にもまだ分かりようもなかったが、ともあれ時は進む。
戸惑いは歩みを止める理由にはならなかった。

夢と現実

街灯の穏やかな光の下を辿り、言葉少ないながら（警官らしき相手は常に周囲を警戒していた為、あまり詳しい話しはしなかった）確認した所によると、この相手が夜間巡回中であった事と、今から彼を詰め所（交番？）へと連れて行くらしい事は判明した。

それ以外にも虹也には気付いた事がある。

この警官？が拳銃も警棒も携帯していない事だ。

（なんか規定が変わったのかな？そういえば警官が拳銃奪われたり、拳銃自殺した事件があったっけ？）

つらつら考えるも、今の段階で正解が分かるはずもない。

とりあえず相手の観察は一時保留して他の事実の検証に入った。

今、彼が置かれている状況のほとんどにはあまりにも外的な要因が絡んでいて、彼単独の手持ちのカードではまともな判断は望めない。

だが、一つだけ自分の内部要因のみで解決しそうなものがあった。

そう、月に掛かった虹を見た時に急に思い浮かんだ記憶だ。

急激な周囲の変化にしばし保留にしていたが、取り敢えずそっちは後回しに出来る状況になったのだからきちんと検証しておくべきだろう。

彼に分かった事は、あれは間違いなく自身の記憶だという事だ。

今までおよそ１２年程、全く思い出さなかった拾われる以前の記憶だ。

炎というよりは赤い熱の壁に囲まれていたような凄まじさだったが、場面としては火事の記憶に違いない。

古い記憶にしては余りにも鮮明過ぎたが、恐らくフラッシュバックというものだろう。

トラウマになるぐらいの強すぎる感情を伴った記憶が、ふいに圧倒的な存在感を伴って思い出される症状だと、どこかで読んだ覚え

があった。
発見された当時の自身の状態を考えれば、恐らく記憶を無くす直前の出来事に違いない。
「って事は少なくとも虐待の挙げ句捨てられた訳じゃなかったんだな」
小さく呟いて、思った以上にほっとしている自分に苦笑する。
吹っ切っていたつもりだったが案外そうでもなかったらしい。
別段嬉しい訳ではないのだが、胸に転がっていた黒い固まりが融けていくような、そんな変な心地だった。
（姉様）
あまりにも鮮やかな恐怖の記憶の中、只一人の助け手として自分がすがっていた相手。
ただ、思い出した記憶に、居たはずの他の家族への想いは薄い。
「着いたぞ」
声に、物思いから覚めると、街灯に照らされて浮かび上がるように、半球の、ドーム型の建物があった。
民家からは少し離れていて、舗装された道路脇にぽつんと建っている。
月の光の下では本来の色はよく分からないが、なんとなく明るい色調の建物のようだ。
交番にしては変わった形だなとは思ったが、以前テレビでもっと怪しい交番を見た事があったので、そのこと自体は別段おかしく思わなかった。
しかし、それが自宅の近くの交番ではないのは間違いない。
今の居所の手掛かりにはなりそうになかった。
（う～ん、トワイライトゾーンだな）
あまりの不可解さに、父が好きで集めていたホラー系映画のコレクションの一つを思い出した。が、途端に眉根を寄せる。
それは架空の怪奇現象のオムニバス物なのだが、どの話も、あまりメデタシメデタシで終わってなかった記憶があるのだ。

なんとなく嫌な符合ではあった。
「ドンマイ俺、気にすんな」
ちょっとだけ弱気になり掛けた自分を励ましてみる。
「定期巡回より帰還しました。途中男性一名を保護」
横スライドで開いたドアから入ると、中にはもう一人同じ制服の警官らしい男がいた。
虹也を連れて来た方の男は、報告をしながらなにやら壁をいじって操作をしていて、その手元のパネルらしき物に幾つかの光が瞬く。
（おお、ハイテク）
最新式の交番なのかもしれない。
そう思えば外観の奇異さも納得出来た。
「民間人の保護だって？その格好は、まさか……誘い出し案件じゃないだろうな？吸血族ならここの結界では対処不能だぞ」
迎えた警官の深刻そうな応答は、虹也の理解の外だった。
（きゅうけつぞく？けっかい？ええっと、本格的にホラー系？）
相手は真剣ではあるが、何かの言葉遊びなのかもしれない。
（深夜の交番なんて退屈だろうし、そんな遊びがあったって不真面目だとは……）
そこまで考えて、虹也は自分をごまかすのを諦めた。
（ああもう！いいよ！認めるんだ！おかしいだろ？絶対。さっきだって護符って言ったんだろうし、この人達はどう見ても真剣だ。交番の赤ランプもなかったし）
現実から目を背け続ければ、対処を誤り、いつか必ずしっぺ返しを食らう。
取り返しの付かない過ちを防ぐには正確な情報が必要なのだ。
虹也が、己の意識的逃亡をしようとする気持ちをねじ伏せている間にも、警官のような男達の話は進んでいる。
「いや、調べたが意識誘導の痕跡は無かった」
「しかし、そんな軽装で深夜に徘徊するなど」
言い掛けた相方に、ここまで虹也に同行して来た警官が耳打ちす

る。
（う～ん、確かに俺ってどう考えても不審人物な気がする。職質レベル？）
色んな謎要素をさっ引いたとしても、任意同行を求められて当然だと理解出来る。
むしろ、そういう不審さからすれば、扱いは丁寧で親切だった。
（でもさ、ああやってこっちをチラ見してヒソヒソやられると、さすがに何か辛い物があるぞ）
ちょっと傷付いたかもしれない。
「それじゃ、すまないが話を聞かせて貰えるかな？」
相手は日本人のようだし、言葉もそんなに違わない。
何か独特のイントネーションがあって、ちょっと戸惑う部分もあるが、意思がちゃんと通じる。
それでも、ここはきっと違う。
自分がかつていた場所とは何かが違うのだ。
それを彼は認めた。
認めざるを得なかった。
だが、それを認めた途端、胸中に溢れたのはシンとした恐怖だった。
それは、見知らぬ町で迷子になった子供の気持ちに一番近いのかも知れない。
「君？」
警官のような相手が彼を訝しげに呼ぶ。
「あ、はい」
何を言えば良いのだろう？
「とにかく目の前の現実を一つ一つ」
何かの呪文のようにそう呟いて、虹也は相手の待ち受ける机の前に座った。

月の証明

「それで君の名前は？」
問い掛ける口調は穏やかだが、尋問には違いない。
虹也は緊張しながらも、それに答えた。とりあえずここでごねる理由は無い。
「美郷虹也（みさとこうや）です」
対応する相手は、頷いて書面にペン先を当てた。
「文字は美しい里かな？」
「あ、いえ、郷（ごう）の方です」
「ごう？」
「くにとかきょうとか」
「ああ、きょうね。ごうなんて読んだかな？」
「ええ」
ここで彼は違和感を覚えた。
文字を説明する上で相手の書き文字を目で追っていたが、その文字が微妙に変なのだ。
美の上辺の両端が不自然に上がっているし、郷の左の偏は全体を抱え込むようにして簡略化されていた。
それは個々人の癖である可能性もあるが、今まで感じた違和感を裏打ちする一つの鍵にも感じる。
ここが今まで居た場所と似て異なる”どこか”であるという証左の一片だ。
「ご家族に連絡を取りたいので連絡先を教えて貰えるだろうか？」
「家族は先頃亡くしたんでもういません」
その返答に返るのは、既に慣れても来ていた、相手の気の毒そうな顔。
しかし、今はそれだけではなかった。
何かを納得したようなまなざし。

虹也はそれを悟ってムッっとした。
「だからって自殺なんかしませんよ」
「しかし、満月の夜半に身に守りも帯びずに守護の光の無い場所を彷徨っていたりすれば、ほぼ間違いなく骨も残らず食らわれる事ぐらい、子供だって知っている事だ。失礼ながら普通の行動とは思えませんが？」
「おっしゃってる事は理解出来ない部分もありますが、とにかく、あそこにいた事に関しては、俺にもよく分からないんです」
言いたい事は色々あるが、とりあえずは何もかもが分からない。
この人達は警官って事でいいのかどうかすら分からないのだ。
本当にここで何もかもぶちまけてしまって良いのだろうか？何か間違いを犯しているんじゃないか？何度も何度も不安が押し寄せる。
行動や話した感じはそれっぽいのだが、語られる常識が全く違う。しかもここがもし自分の勘違いで、違う”どこか”なんかではなく、単にちょっと家から出てきてしまった近所のどこかなら、かなり危険な方向におかしいのだ。
「自分の行動なんだから分からないというのはおかしいのではないかな？」
だが、疑って掛かってさえ、彼の声の調子にも、目付きにも、それと分かるようなおかしな兆候は見えない。
「でも、俺、さっきまで自宅の庭にいました。それなのにいつの間にかあの雑木林にいて」
真実のカードを一枚めくる。
手持ちは危険な札ばかり、どちらにしろどれかを開かねばならないならこれしかないだろうと思ったのだ。
父にはお前は勝負師にはなれんなと散々笑われた彼だが、フェイクが無理なら、真実で勝負するしかない。
「なんだって？それは夢遊病とかの持病があるという事かな？」
なにやらその、警官らしき二人の様子が変わる。
緊張？いや、緊迫感？

「いえ、寝ている間の事ではありません、俺は起きていました」
はっきりと彼等の顔色が変わった。
二人は何事か話し合うと、一定の結論に達したらしく、先程より真剣な面持ちで虹也と相対した。
「詳しく確認を取りたいんだか、良いかな？」
「あ、はい」
いいえとか言える雰囲気じゃないし、拒否する意味も無い。
虹也は素直に頷いた。
「君は自宅の庭にいた。それは何時頃の話だね？」
「正確には分かりませんが、大体夜１０時ぐらいだったと思います」
「なるほど２２時前後だな。それで、日にちは？」
「ええっと、４月の２８日です」
彼の言葉に相手の眉が潜められた。
「あの、何か？」
「君はここに来るまでの間、月は見たかね？」
「はい、見ましたけど、それが？」
直前に月を見上げてそこに円状の虹を見た彼は、当然のように異変後にもう一度それを確認しようとした。
しかし、そこに満月はあったが、既に虹は失せていた。
「満月ではなかったかね？」
「はい、そうでした。さっきも話題に出てましたよね」
「おかしいとは思わなかったのかな？月が満ちていれば１５日、せめて１６日だろうに」
虹也は首を傾げた。
月と日にちに何の関係が？
そこまで考えた時にはたと思い付く。
（太陰暦？）
太陰暦は月の満ち欠けを一ヵ月とした暦で、新月から次の新月迄で、大体３０日、つまり満月はその中間の１５日になる。
日本も昔は太陰暦だったので十五夜などの風習にそれが残ってい

るのだ。
「あの、それは太陰暦ですか？」
「たいいん？病歴の話か？」
「あ、いや、えっと、月を元にした暦ですよね？」
「そりゃそうだ」
「あの、太陽暦は使ってないんですか？」
机の反対側で男は肩を竦めると、頭の奥から何かを引っ張り出す者特有の遠い目をした。
「ありゃあ大陸の方の一部で使われている暦だな。潮の満ち引きと噛み合ってないし使い辛そうな暦だが、あれを使っている国があるという事はなにか意味があるんだろうな。だがまぁ、我が国では普通は使わんよ」
「そういや学生時代、意地の悪い試験問題で月と太陽のそれぞれの暦を使っている国を書けという問題が出ましたよ。うっかり月輪圏と太陽圏を混同して書いちゃいましたね」
「被ってないからなぁ、おっと、すまない。話がおかしくなってしまったな。それで暦がどうしたんだね？」
虹也は絶句した。
今の会話に彼の理解が及ぶ部分が無い。
敢えて言えば太陽暦も存在するらしい事だけだ。
覚悟はしていたものの、その何気ない日常に根ざす会話は、とうとう彼に決定的なものを突き付けたのだ。
「あの……俺、何がなんだか」
肩を落とした彼に、警官のような男達は一様に気遣わし気な顔を向けた。
「君も不安だろうからこちらの一応の見解を伝えておくが、君は恐らく意識改竄を受けているのではないかと疑われる」
「意識改竄？」
「ああ、その、ショックを受けるかもしれないが安心してほしい。本部には優秀な術師がいるし、後遺症に対する対策は昔より遥かに

進んでいる。大丈夫だ」
　虹也は一つ瞬きをすると、言われた言葉を飲み込んだ。
「ちょっと待ってください！俺の意識ははっきりしています。記憶の断絶もない。いきなり知らない場所に居ただけなんです」
「落ち着いて、大丈夫だ。別に決め付ける訳じゃないし、君に責任があるとも、騙しているとも思ってない。ただ意識を操作する術や術式を使用するのは大罪なんだ。そのつもりで慎重に捜査が行われると、いう事で安心してもらいたかっただけなんだよ」
「それは返って不安になるだけでは？」
　記憶を否定されるような事は我慢ならない。
　それは全てを否定される事だ。
　虹也はその思いをあからさまに視線に乗せる。
「心配しなくてもちゃんと調べる。大罪が疑われるなら本部が出るからね。彼等は専門家なんだ。そう、君がそうやって怒りを感じるぐらい、それが行われたとしたら許せない行為なんだ。だから絶対にどうにかする。それを分かって、安心してもらいたいと思ったんだ」
　彼の言う安心が自分のそれと同じでは在り得ない。
　が、向けられたものは疑いや敵意では無かった。そこにあったのは人間の人間たる情だった。
　それは安心には遠いながらも、虹也の心に余裕をくれる。
「分かりました。俺も分からない事ばかりで判断の手掛かりが正直欲しいです。信用させてもらう事にします」
「うむ、すまないな。一端でしかないといえども人々の平安を預かる身でありながら、君の不安を拭い去れないのは不徳の致す所だ」
　その言葉に、やはり警官と同等の役割の人達なのだと虹也は納得して、同時にストンと力を抜いた。
「あの、改めて、さっきはありがとうございました。さっきは危険の度合いが良く分かってなかったんですけど、命を助けて貰ったんですよね？」

そう言って、彼は今、調書を取っていた相手とは別の、自分をここに連れて来た方の男に改めて礼をする。
まだ半信半疑の部分が無いと言えば嘘になるが、どうやらここでは闇にはなんらかの、命にすら関わる危険があるらしかった。
彼が気付いてくれなかったら、自分はどうなっていたのだろう？何も分からないまま命すら失くしていたのかもしれない。
そう改めて思うと、ぞっとしたし、やはりなによりも有り難かった。
「いや、あの辺は因縁のある場所だからね、夜回りの際は注意する事にしてるんだ。ともあれ、良かったよ。いや、まだ良かったというのは早いかもしれないが」
その労わるような笑顔に、ここがどこであるにしろ、やはり人間は人間なんだと安心する。
だから、彼はこの時、相手の言葉に注意を払うのを忘れた。
おかげで回答へと辿り着くのに随分と遠回りをする羽目になるのだが、それが良かったのか悪かったのかは、その後の判断に任せるしかない。
ともあれ、回り道は思わぬ出会いへと彼を導く事になった。

待機

そこには両側にドアの並ぶ通路があり、全体的に清潔そうで明るかった。
最初の事情聴取が行われた場所が入口からそのまま続きの小フロアタイプ、所謂交番そのままの造りだったので、虹也には奥のこの広さと造りは意外に思える。
と言っても、別に彼は交番の奥へ入った事がある訳ではなかったので、あそこはあそこでまたそれなりに広い可能性もあるが。
「取り敢えず休んでおくと良いだろう。本部の判断にもよるので朝まで寝せてあげられるかどうかは分からないが、夜も遅いし、色々あって疲れているだろうしな」
「留置所じゃないんですね」
なんとなく意外な気持ちで虹也は口にした。
「ははっ、御希望なら泊めてあげたいところだが、事件の容疑者でもない者を監禁したとなると、バレたら顛末記述書提出の上罰金だ。勘弁してくれ」
堅苦しいばかりの一辺倒かと思っていたが、どうやらユーモアを解してくれる人のようだ。
顛末記述書とは始末書みたいなものかな？と考えて、虹也は笑みを浮かべた。
「そこまでしてもらう訳にはいきませんね。休憩室で我慢します」
案内してくれた相手も軽く笑い、
「休憩室というより宿泊施設に近いよ。なかなか一般の人は利用する機会が無いだろうが、警邏隊の番署は避難シェルの役分も持っているからね。当然その為のスペースがある訳だ」
先のやり取りで気持ちがほぐれたのか、相手はやや饒舌気味だった。
（警邏隊って言うのか、って事はやっぱり縮めて警官で良いのかな

？それとも警邏隊員で警邏員？）
彼がとりとめの無い事を考えている内にも、説明は続く。
「奥のこの部屋は水周りで手水と洗い場、外鍵は掛かって無い。で、君の使う部屋だが、要望があれば変更出来るが、こっちでどうかな？」
カシャンという音を立てて、引き出された丸い取っ手を回し開けて、案内されたのは入口と奥の水場との中間に位置する部屋だった。
入ってみると簡易机とベッドが設置してあり、なんとなくビジネスホテルめいた造りである。
「中からもこうやって鍵が出来るから不安は無いだろう？」
内鍵があるという事は、どうやら本当に留置ではなく保護なんだな、と、納得する。
相手もそれを分からせる意図でで説明したのだろう。
内鍵は簡単な落とし込みタイプだが、だからこそむしろ信用度は高い。
これがもし電子錠とかだったら、逆に不安を覚えたに違いない。
いや、そんなものがここに存在するかどうかは彼の預かり知らない処だが。
虹也は相手の説明を聞きながら、互いの理解の及ぶ範囲を少しずつ擦り合わせていた。
「質問はあるかな？」
そう締めた警（邏？）官に、なので彼は思い切って聞いてみる。
「先程の話では本部から迎えか調査の方が来られるかもしれないんでしょう？鍵を掛けて寝ていたら呼ばれた時に気付かなくて困ったりしませんか？」
「その時は呼び出しを鳴らすから、寝ていても構わないよ」
「呼び出しですか？」
「ああ、浸透タイプの呼び出しだから大丈夫だ」
「そうですか、分かりました」
実はあまり分かってもいないのだが、呼び出しブザーのようなも

のがあるのだと勝手に納得する事にして彼が頷くと、その、彼を発見して連れて来た警（邏？）官は少し微笑んでみせた。
「記憶が混乱しているのは不安だろうが今はあまり考え過ぎない事だ。なに、君は素養の無い私が見てもすぐに分かる程血が濃い見目だ。程なく身元も分かるし、すぐに家に帰れるだろう」
言い置いて、軽く会釈して立ち去った相手を目で追いつつ、虹也は相手の残したその言葉を考えた。
彼は今迄殊更自分の容姿について考えた事は無かった。
普通に日本人らしい顔立ちだし、残念だが両親に似て無いのは当たり前だ。
どうひっくり返しても、大して目立つ特長はない。
敢えて言えば、再三母にその癖の無い黒髪を羨まれた程度だ。
（血が濃い……か）
それが何か特別な血統に当たるという事なら、言われてみれば僅かに甦った記憶の中の自分は、大きな屋敷らしい場所にいたし（燃えていたが）、「姉様」などと、気恥ずかしい呼び方で姉を呼んでいた。
自分自身に対するその姉からの呼び名は微妙に犬か何かの名前のような響きだったが。
ふと唐突な笑いが沸き起こる。
どこか客観的に自分を分析しようとする己の思考がおかしかったのだ。
同時に、思い出したばかりのその記憶に迂闊に触れるのを恐れる自分も自覚する。
突然甦った記憶は、ついさっきまで忘れていたにも関わらず、余りにも鮮明だった。
そして何よりそれは痛みでもあった。
その先にある物に触れてはいけない。
あの恐ろしい劫火以上に、その事実は自分を焼くだろう。
そんな予感がする。

「姉様」
その言葉は、今の自分にはそぐわない。
だがそれは、忘れていたはずの長い時に磨耗する事無く、大切な思慕を象っていたのだ。

「報告を上げるぞ」
青年を案内した同僚が戻るのを待って、中年の域に差し掛かった警邏官は表示モニターを起動した。
同時にキー入力円盤(ボード)も立ち上がり、彼の指示を待つように淡く輝いている。
「はい、しかし、意識改竄などリスクの高い技を使うなんて、無茶をする相手ですね」
「お前の報告から判断すれば、あの坊やは発見される前に鬼共の餌になる予定だったんだろう。本人が混乱さえしてくれれば良かったんじゃないか？まぁこういう事は下手な推測はご法度だけどな」
「やっぱりお家騒動でしょうか？」
「まぁ、そんなとこだろうな。あの坊や血が凝ってそうだし」
「氏族顔ですもんね」
ご法度と言いながら、彼等はついついその推測を広げてしまう。
元々大きな事件など滅多にない僻地の担当官だ。普段が暇なだけに思いもよらぬ大事の予感に、その反動は大きい。
話しながらも指先を動かし接続キーを打ち込んでいた彼だが、程なく画面が対面確認へと進んだ。
「接続確認、重要２度」
「コードパス願います」
「犬の尾を踏め」
「接続します」
無機質な疑似オペが消え、画面に女性の姿が投影される。
人員が潤沢な本部の夜勤は夜行種が殆どを受け持っており、スク

リーンアップされた彼女は森林の民だった。
森の民（エルフ）独特の大きな目と小さな口元が愛らしいが、子供ではなく立派な成人である。
「こちら南海平野西の里、緑野区の警邏番署です。意識改竄を疑われる案件が発生しました」
「了解しました。概要をどうぞ」
「芳輝１３年３月１５日２３時近時、南海平野西の里緑野区、月夜見本家別邸跡にて巡回任務中の木下警邏官にて発見、保護された、１０代後半と推測される青年。事情聴取時に応答に混乱、誤認がみられ、意識改竄の可能性を推測し重要案件として報告に至りました」
発見場所の報告の際、表情を動かさない訓練を受けているはずのオペレーターが顔を顰めた。
それを報告者は認めたが、理解があるが故に見咎める事はない。
「了解しました。本部に報告後そちらに指示があるはずです。回線を待機させて指示を待ってください。それと、保護された仮定被害者には慎重に当たってください。意識障害は心因性のショックを誘発する可能性があります。精神の安定を第一にお願いします」
「了解しました。指示を待ち、仮定被害者に注意を払います」
画面が暗転し、待機状態を示す閉じた門印が表示される。
「場所が場所だけに挑戦されたような気分になりますね」
オペレーターの動揺の意味を理解している同僚が、溜息と共に共通の意識を吐き出した。
「まぁあそこは大きな忌み処だからな。こういう事には利用し易いんだろう。だが、だからといってやられたら腹が立つ。そういう事だ」
彼等の声には案件自体と共に、それが発生した場所に対する憤りがある。
その場所は、１０年以上前に、この国に大きな衝撃を与えた事件の起こった場所だった。
それ以降、良からぬ噂と共に、忌み処とされ、一応の手順を持っ

て結ばれたものの、結局は放置されたまま雑木林と化していた。
「しかし、事前に防げてなによりだ。お手柄だったんじゃないか？」
「俺は知っての通り、何の能力もないですけど、あの時は影がこう、透けてる感じで違和感を感じて、思わず光を向けていたんです。忌み処といっても月夜見の加護があるのかもしれませんね」
「加護か、そうだな」
会話を遮って、待機の画面が接続の印に開門する。
「本部の指示が来たか」
「来るにしろ行くにしろ、こんな僻地じゃ転移門も遠いし、一苦労ですね」
回線が繋がると、二人は私語を止めて指示を確認する為に画面に向き合った。

暗転

一人になった所でなんとなく傍らの簡易ベッドにどさりと腰を下ろし、虹也は大きく息を吐き出した。
「ああっ、もう！」
分からない事が多すぎて、いっそ全て投げ出してひと眠りしたい誘惑に駆られる。
だが、苛立って投げやりになったところで得るものは何も無い。
分かっていながらもやもやとした苛立ちは収まりそうもなかった。
「水周りって、洗面所もあるんかな」
冷たい水で顔でも洗えば気分も変わるかもしれない。
そう思って彼は思い切って部屋を出た。
先ほどは隣の相手とのやり取りで一杯一杯だったのか気付かなかったが、ここの明かりは埋め込み型のパネル照明のようなものらしく、天井からの光は淡く拡散していて、剥き出しの蛍光灯のように無機質なものではなく柔らかで温かい。
それは虹也をなんとなくホッとさせた。
端の部屋の扉はレバーで開くスライド式で、彼が足を踏み入れると、スイッチも押さないのに明かりが点いた。
「おお？」
同時に、入ってすぐの場所にあった、円筒型で彼の背丈よりやや低い高さの機械らしき物も起動する。
透明の天頂部分で何かが動いていた。
「あ、これってもしかして立体映像？」
それはお茶やコーヒーが淹れられて注がれる一連の動作を繰り返していて、対応するように、その動きの段階毎に下のボディ部分のパネルが灯っていく。
「もしかして給茶機？茶が出てくんの？スゲェ」
お金が必要なのかな？などと興味深く思いながらも、ともかくそ

れは後回しにして部屋を一通り見てみる事にした。
奥にはまた扉があり、同じくレバーを倒して開けるようになっている。
「トイレね、っとこっちは風呂……じゃなくてシャワーか」
何かそれぞれに、シャワーヘッドらしき物にホースが無かったり、便器の蓋に見慣れない取っ手のような物があったりと、追求したい部分があったが、今は使うつもりは無いので記憶の引き出しに質問リストの材料として突っ込んでおく事にする。
そのシャワー、トイレへ続く扉の手前、向かって右にあるのが手洗い兼洗面所だろう。
やはり蛇口の上にあるのはレバーで、それを軽く押すと水が出た。
全体の造りが、主要な行動に細かい手先の作業を必要としないようになっている。
「バリアフリー構造ってやつかな？」
虹也の自宅は純日本家屋で、介護に明け暮れた時期はかなり苦労していた為、この構造に少し感心する。
伝統ばかりが良い訳じゃないよな、とついぼやいてしまう程だ。
蛇口から迸る水は冷たく清涼で、ばしゃりと被った顔に馴染みの爽快さを与えてくれて、変わらない一つの真理のように日常のカケラをくれた。
「あ、タオル無かった」
事前に気付かない自分の間抜けさに突っ込みを入れたが、取り敢えず着ているシャツで顔を拭う。
「母さんに見られたらしこたま怒られたとこだな」
そのまま振り向いて、いよいよ最初から気になっていた給茶機らしき物に向かい合った。
それはまだ、天頂でリアルな３Ｄムービーを展開しながらパネルを光らせている。
「茶の手順はこの順番か？」
３Ｄムービーというよりはホログラムムービーかな？と自分の思

考を修正しながら、その手順に合わせて光るパネルに順に触れる。
チチチ……と微かで硬質な音と共に、パネルの埋まったボディ部分の下側になにやらリング状の光の線が走り、上部の映像が確認の文字列に切り替わった。
「緑茶が選択されました。か、やっぱ文字が変だよな」
読めるけど、と呟いて出て来た〇っぽい記号を押す。
学校で冒険クラブなどというクラブを創立し、好奇心が旺盛で行動派の彼は、こういう時に呆れる程躊躇いがない。
カタンという音がして取り出し口らしき箇所が開いてトレーが前にせり出して来た。
「はやっ！」
上にはカップが乗っている。
一見して紙コップのようだが、取っ手があるし触ると少し硬い。
内側の緑茶の熱は触れた手にごく微かに伝わり、それに比して口にしたお茶は熱かった。
「なんだ？陶器とも違うようだけど」
お茶は彼が普段飲んでいるものより少し青さが強い気がする。
この、一連の具体的な作業で、なんとか理不尽な今迄のあれこれを手元の茶のようにゆっくり飲み込む余裕を取り戻すと、今度は持ち前の好奇心が働いて、虹也は目前の機械の仕様が気になり出した。
造りは単純な円筒型で、つや消しの銀に藍色の縁取りという単調な配色であり、彼の知る自販機のような華々しさはない。
「まぁ公共機関に置いてある給茶機だからな」
凹凸も殆ど無く、パネル自体に文字も絵もないので、画像による案内が無かったら操作手順など到底分からなかっただろう。
虹也はそのいかにもそっけない表面にそっと触れてみた。
ひやりとした、金属というより石のような質感。
確かに稼動しているはずなのに、そこにはモーターの唸りを感じ無かった。
最近の家電は静音が人気だし、とか考えて今一度お茶を口に含む。

上の透明な部分で展開するホログラムムービーは、どの角度から見ても立体に見える。
確か既に３６０度から見れる立体映像投影の装置はあるはずなので、それを使っているのかも？と、そこまで考えて、ふいに彼は自分が既存の技術を元にこの装置を理解しようと考えているのがおかしくなった。
（ここは何処か違う場所なんだよなぁ、きっと）
それでもやはり、いや、それなら尚の事、知りたいと思ってしまう。
なぜなら、違ってはいても、ここに在るのは見知らぬ文化ではないと思えるからだ。
奇妙に歪んで近似ではないが、どこかに確かな縁を感じさせる。
近くて遠く、にわかには計りようもない距離感を持つ、それでも互いに全くの無関係とは思えない場所だ。
彼の思いに応えるように、触れた指先が示すものが形を変えて浮かび上がる。
光の線が弧を描き、途切れた円を形作る。
飛び交う光が切れた線を繋ぐ。
視界の全てがクリアになる。
遮るものは何もない世界。
遠くも近くも存在しない。
そこにはただひたすらに沢山な今、そして選択が在った。

異常を知らせるブザーが鳴る。
ツィーッ！とでも表現するべきだろうその音は、意識下へ乱暴に叩き込まれる警告だった。
「なんだ！」
「救急警報だぞ！ゲストに異常が起きたんだ」
二人は慌てて奥の保護シェル区画へ飛び込んだ。

「部屋の確認をたのむ、俺は奥を確認してくる」
「アイサ！」
余分な会話は省き、彼等は迅速に行動した。
一人が部屋を確認し、あと一人が奥の水場へと向かう。
水周り部屋へと飛び込んだ年かさの方の警邏官は、そこに倒れた人影を確認した。
「おい！しっかり！」
返事が返らない。
彼は首から頭までを片手で固定すると、倒れた体をゆっくりと正面に向けて横たえた。
倒れた青年の目は見開いたまま、体はぴくりともしない。
「おい、聞こえるか？」
反応はやはりない。
見ると、傍らにカップが転がっている。飲み物を持っていたのだろう。
口元に手を当てると、呼吸は確認出来た。
開いたままの目の中で、その独特の色合いの瞳孔は確かに光に反応しているが、その反応はやや鈍い。
彼は緊張した表情のまま、一動作で一般的に警邏紋と言われる術紋を起動する。
そのサポートを受けて倒れた青年の体を再び視認した彼は、思わず息を呑んだ。
「いかん、木下！」
その声に、無人の部屋を確認し終えてそこに向かっていた若い警邏官が足を速めた。
「どうした？」
「まずい、意識体が剥離し掛けている。急いで封印符を持ってきてくれ」
「封印符だって？でもあれは鬼や悪霊を封じるものだろう？」
「本来はそうだが、機能自体を見ればあれは意識体を物体に封じる

ものだ。こういう場合の緊急措置にも有効なはずだ」
「なるほど」
木下と呼ばれたやや若い方の警邏官は、自分のベルトに装着しているポーチを探った。
実は緊急事態の対処の慌しさの中で巡回用の装備をまだ戻していなかったのである。
彼は薄い、プラチナの光沢を持つ一枚のカードを取り出した。
「これを！」
受け取った年長の警邏官は、そのカードの表面を素早く剥がす。
接着部位を剥がされた事でカードの術紋が起動し、淡くその文様を輝かせた。
彼は、躊躇いなくそれを倒れた青年の額に貼り付ける。
「よし、戻ったな」
見守っていたもう一人もその言葉に安堵の表情を浮かべた。
「だが、これだと意識が覚醒出来ない状態を保持する事になる。急いで施術院に連絡して救急ゲートを繋げてもらうから、お前は本部に繋いで担当官に連絡をしてもらってくれ」
「アイサ」
彼等の見守る中、倒れ、意識を失ったままの青年の目がゆっくりと閉じられていく。
「何が引き金になったのか分かれば良いのだがな」
夜間担当病院を検索しながら、壮年の警邏官は気遣わしげに青年を見たのだった。

邂逅

最初に頭に浮かんだのは疑問だった。
記憶が途切れている。どういう事だろう。まさか、お茶飲みながら寝ちまった？そんな感じの物だ。
凄く恥ずかしい思いと、言いようのない不安が、ジワジワと心に広がるのを感じながら、虹也は瞬きをした。
開いた視界から受け取る映像はオフホワイトの天井とやはり全体を淡く光らせる照明。
体に、固い場所で寝た時独特の凝った痛みは無い。
ゆっくりと身動ぎして、自分がベッドに寝ているのに遅まきながら気付いた。
（おおスゲェ、覚えて無いけどちゃんと部屋に戻って寝た？）
「お、気が付いたか？」
自分以外の声に、虹也はギョッとした。
（内鍵あったよな、って部屋入った記憶も無いのに鍵とかしたか覚えてる訳が無いか）
「あー大丈夫か？」
何かボケッとしていたのだろう。先程声を掛けて来た相手が重ねて問い掛けた。
「あ！はい、すいません。なんか現状把握がちょっと」
「まぁそうだろうな。さて、ここはどこでしょう？」
振り向いて改めて見た顔は、全く見知らぬ顔だった。
癖のある跳ねた髪、どこか眠たげな顔。
相手に対する最初の印象と言えば『寝ている所を起こされた野良犬』というものだった。
後に、「なに？その失礼な評価」とか言われたが、後々から考えたとしても妥当な評価だろう。なんせ本当にこの時は仮眠してたのを叩き起こされて派遣されたらしいし。

その時の事を思い出したのか、ぶつくさ言っていた男に、公務員は人民のために働いてナンボだろう。と、これも後に語って、「公務員ってナンだよ？」と突っ込まれる事になる彼である。
それはともかく、虹也は相変わらず掴めない状況に戸惑っていた。
この夜に限って言えば、もうどうにでもしてくれという心境だ。
「誰？」
なので彼が礼儀を忘れ果てたとて誰に責められよう。
彼の亡き両親なら「自分から武器を捨てるとは何事！？」と叱ったかもしれないが。
そう、初対面の相手とは礼儀を武器として戦え。というのが美郷家の家訓である。
「うん、まぁ不安なのは分かる。そういう警戒は大事な事だしな」
その男はそう言うと、左手の甲をひと撫でした。
虹也が首を傾げる間も無く、そこにぼおっとした光の文様が浮かび上がる。
思わずビクリと身を引いた彼に、その男は言い募った。
「や、捕縛とかじゃないから。ほら、行政捜査官の証明」
「レンズマン？」
思わず古いＳＦ小説を思い出して呟いたが、今度は逆に相手が首を捻った。
（ちなみに彼の趣味的嗜好の源泉は父の書斎にある。多少同年代とは趣きが違うのは致し方あるまい）
「こういうのも分からなくなってんのか、厳しいな、こりゃ」
男はぼやくと虹也を安心させる為か一歩を引いた。
「これはだな、行政府供与の特殊術紋で、ここに複合螺旋による政府印が入ってるだろ？この特殊紋は政府機関のみで使われるから身分証明になるんだよ」
手の印しを示して、の説明だったが、当然ながら虹也にはさっぱりな内容だ。だが、それでも分かる事がある。
「まぁ、分からんけど、あんたが悪い人じゃなさそうなのはなんと

なく分かる」
そう、なんとなく分かってしまうのだ。
それはしかし、彼の中で起きた一つの異変でもあった。
あのおかしな出来事以降、彼の意識は常に物事をはっきりと捉えている。はっきり過ぎる程に。
今までの虹也はあまり記憶力が良く無かった。それに加えて、いつも眠気に襲われていて、物を覚えるのに他人の倍以上の努力が必要だったのだ。
父が元教授という事もあって、常に家族としてふさわしく在ろうと必死だった彼は、少しでも良い成績を取る為に、寝る間も惜しんで勉強したものだ。
そうまでしてすら、彼の成績はやっと中の上であり、悔しい思いをしては、両親に気晴らしにと、何かはっちゃけたイベントを提供される羽目になっていた。
なのに、今の彼は余りにも意識がはっきりしていた。
意識が、というのはおかしいかもしれない。認識が、というべきか。
例えば今、目前のいかにも怪しい男をすんなり信用したように。それが正しい事が認識出来るのだ。
そして過去、彼を散々苦しめ、医者にすら原因が分からなかった彼の体の弱さ、昼間にすぐ息切れしていた体力の無さも、どこかへと消え失せてしまったかのように体が軽い。
（答えが得られないまま疑問ばっか増えてくってどうなんだ？）
「信じてくれるのは良いが、証拠をそれと分からないのにってのはヤバイぞ、家柄の良いお人好しってのはハメられるって相場が決まってる」
「んじゃおっさんは悪人って事なんだ」
「お兄さんは行政府の執行捜査官だって」
「俺、そんな変なマーク分かんないから、身分証明にならないんだろ？って事は俺にとっておっさんは不審者でいいんだよね？」

「さっきはお兄さんを信じるって言ったじゃないか」
「おっさんが今、信じるなって言ったんだろ」
「ぬぬぬ……お・れ・は・おっさんじゃねえ！」
「そっちかよ」
大丈夫か？この国の公務員。
思わずぼやいて、虹也は溜め息を吐くと肩を竦めて見せた。
「年は？」
一応義務的に聞いてみる。
「おおう、ピッチピチの３５だ」
「どこの３５歳がピチピチなんだよ？それは息も絶え絶えな魚的な意味で？俺の軽く倍は上だろ」
「失礼な、お前はいくつだよ！」
「１８」
「倍も行ってねぇ！」
「一年程度同じじゃないか」
「お前なぁ、覚書の印象と全然違うぞ」
「覚書って？」
「詰め所、っと、番署での調書と一緒に提出された、観察者の主観記録だ。育ちの良い氏族の若者だろうって書いてあったぞ」
「そっか、なるほど。じゃ、それでいいんじゃないか？」
「あ？」
「身分証明代わりだよ。調書を見て、俺が警邏官の人に話した名前とか知ってるんだよね？それでおっさんが正規の捜査官だって信用するよ」
ニコニコと、罪の無い笑顔を振舞う。当然ながら、男は心癒されなかったようだった。
「さては俺をからかっただけだろ？」
「流石は捜査官、よく分かるね」
「どこが育ちが良さそうなんだよ」
「相手に合わせた礼儀を大事にする教育を受けたから、きっとそん

な風に見えたんだね」
「まぁったく」
ガリガリと耳の後ろを掻いて、男は顔を顰めた。
「それで、信用した所で、ちょっと聞きたいんだけど」
虹也はケロリとした顔で話を続ける。
「あん？」
「ここはどこで、俺はどうしたのかな？あの避難所だか休憩所だかとここは違うみたいだし、俺、顔を洗いに洗い場に行ってたはずなんだけど」
男はマジマジと虹也を見ると、呆れたように首を振った。
「お前さ、それって最初に聞くべき事じゃないのか？」
「おっさんがまぜっかえすから」
「まぜっかえしたのはお前だろうに！まぁいい、話が進まん。んじゃ、ちゃんと説明してやるから真面目に聞いておけよ。ここは病院だ、お前はその洗い場で倒れてたんで、救急ゲートを開いてここに運ばれて治療を受けた所だ」
虹也はまたも溜め息を吐き出す。
とりあえず自分がなぜだか倒れた事は分かった。しかし、救急ゲートってなんだ？救急車と同じ感覚で良いのか？全く分からない。
いつになったら自分に理解出来る内容になるんだろう？もしかしなくても無理にでも理解しなければならないんだろうか？そう考えると果てしなく気が重くなる。
「俺、倒れたの？」
とりあえず、彼は分かる所から始める事にした。
「ああ、結構ヤバかったんだぞ？精神剥離とかって魂が行方不明になっちまう状態になりかけてたんだ。もしそうなっちまったらもう生きた屍状態なんだぜ？お前、あそこの警邏の連中に感謝しろよ。応急の処置が良かったって先生も言ってたし、中々やれないような処置をしてくれてたらしいぞ」
「そう、……だったんだ」

虹也はもう分からないなりに受け止める事にした。
思い返してみると、確かに自分はあの給茶機のところで、急に何か違う物を見ていたような気がする。
遠い、或いは近い何か……
「っ！」
彼の、手首に巻かれた組み紐のような物が急に発光した。
同時に何かまた視界が切り替わろうとしていた状態から我に返る。
「おいおい、やっぱ安定してないんだな。ったく、誰だか知らないが、他人の意識を弄るだなんて、ひでぇ事しやがる」
口調は軽いが、彼の物言いの中に含まれる確かな怒りを感じて、それが何に根ざすのか理解した虹也は、顔を上げて、マジマジと相手の顔を見た。
憎まれ口を叩く初対面の相手の為に純粋に憤る人間など、ドラマや映画の中にしか存在しないものだと思っていたのだ。
「なんだ？」
「いや、これは何？」
といっても、そんな事を本人に言ってやる程彼も素直ではない。ごまかすように、今しがた反応を見せた手首に巻かれた組紐状の物を指してそう聞いた。
「ああ、ここの先生が、処置してくれた術式布だ。本当は直接照射して刻印するのが一番らしいんだが、ほら、お前の事情が事情だろ？もし既に強力な術紋を刻まれてた場合、その上に別の紋を刻んだらどんな弊害が出るかもしれないから、応急処置みたいなもんなんだってよ。そのまま風呂にも入れるから、外すんじゃないぞ」
「あのさ」
この相手が信用出来る事は、もう彼には分かっていた。
ここは腹を決めて、何もかもを話して相談するべきだろうと心を定め、虹也は軽く息を吸い込む。
「なんだ？」
その時、カチャリという軽い音と共に、部屋の扉がスライドした。

「失礼します。患者さんが気が付かれたようですので、軽い検査をしたいのですが」
看護士なんだろう、ややぽっちゃりとした、しかし優しげな雰囲気の女性が入って来る。
服装は良く知る白いナース服とは少し違ってはいたが、基本的な作りは似た感じだった。ただ、色がグラデーションの掛かった青になっている。
しかし、彼が元いた場所で見掛けた最近のナース服にも青い物とかあったので、余り違和感はなかった。
「ああ。って事でしばらくその美人さんとよろしくやってろ、俺は本部に連絡取って来る」
「まぁ」
看護士の女性はちょっと照れたように笑い、彼はその場を去った。
「あ〜、まぁいいか、物事には丁度良い時ってのがあるらしいもんな」
込めていた気持ちを散らされた感じで、虹也は思いっきり脱力する。
「それではちょっと検査をするのでこの反応板を握ってね」
柔らかい手が丸い金属の板のような物を握らせて来る。何だろうな？とは思っても、色々タイミングがおかしくなった彼は、もう考えるのを放棄して成すがままに任せたのだった。

「でさ、何で追い出されてんの？」
「そりゃ、病院ってのは患者を治療する所で、治療が終わったら帰ってもらうのが当然だからじゃないか？病院はホテルじゃないし」
「なるほど、非のうちようもないぐらいの正論だな」
「とりあえずは派出所に行って、常設門を使わせてもらって、っと、お前には事後報告になるが、うちに泊まって貰うんだが良いか？この時間は宿も無いし、まさか容疑者でもない人間を留置施設に入れ

る訳にもいかんだろ？それに俺にはお前に対する保護責任があるから、いくら憎ったらしくても放り出す訳にはいかん」
病院から出て、というか放り出されて、のんびりと道路を歩きながらの会話だった。
どうやらこの場所はどこかの街中らしく、綺麗に整地された道路と前に見た物より明るい街灯とネオンらしき光の模様があちこちで閃いている。
「うん、まぁ他に当ても無いしさ、それは良いんだけど」
「だけど？ああ、そういえばさっきなんか言い掛けてたよな、何だ？」
「あんたの名前は？」
「あ」
「あんたさ、調書読んだんなら俺の名前知ってるよね？で、俺はまだあんたの名前聞いて無いんだけど、これって不公平じゃね？」
「あー！！そういえば、スマン。ええっと、俺は行政府の治安維持部隊、南州方面軍捜査官、山中墨時（やまなかすみじ）だ」
「んじゃ、改めて、俺は美郷虹也だ。ともかく今晩はやっかいになるんだろ？よろしく」
「まったく、調子が良いな。よろしく虹也」
互いの差し出した手が握り込まれる。
これもまた、理解が及ばない事ばかりの、このどこか違う場所にあって、かつての場所と変わらない意味合いを持っている行為の一つ。
それがこの違和感を否定してくれる訳ではないが、そういう僅かな合致が虹也の戸惑いを軽くしてくれるのは確かだった。
（例えどこにいようとも、自分が辿った全ての道は繋がっている。それが冒険の基本だ）
父から受け継ぎ、自らが育てて来た、冒険者であろうとする彼の気質が、今この場所に立って先へと進む自信を与えていた。
自分の記憶は偽りではないという確固たる思いも、確かな歳月を

経て血肉となった自らの精神が証となっている。
どれ程絡まって、解けようもなく縺れた糸玉も、必ずどこかに起点と終点を持つように、物事には真の意味での混沌はないのだ。
「あ、そうだ、こんな遅くにおじゃまして、家族の人に迷惑じゃないかな？」
「大丈夫だ、さっき本部に連絡するついでに家にも連絡を入れておいたから」
「そっか、家族がいるんだ、奥さん？」
「てめ、カマかけたな」
こんな手探りの場所で信頼を置ける人物と出会えたのは大きな幸運だ。ならばその幸運を無駄にせずに道を切り開くべきだろう。
そう、出会い自体に意味がある訳ではない。
出会った先に何を形作るかという事に意味があるのだから。

世界の在り方

派出所というのは彼の知っているそれと違って、どちらかと言うと警察本部のような建物だった。そもそもが自分が最初に保護された番署と呼ばれる場所が、彼の知る派出所に当たるのだから当然と言えば当然の流れではある。

公的な建物だけあって、夜の暗さで全体像が分かり難い中でもそれが大きな建築物だという事は見て取れた。と言っても彼自身実際に目にした事はないが、都心の高層ビル等と比べればごく普通の大きさで、おそらく5階建て程度だろう。

こっちの建物は一様に曲面を多用した物が多いようで、この建物もご多分に漏れず入口からして軽く湾曲しているのが目新しいが、だからといって全く違う思考過程で建てられたものでは無く、そこには共通する人類としての建築思想を感じた。

その扉は、この建物を使用する機関に属する捜査官であると自称する男、墨時の例の手の文様に反応しているようで、それと扉の表のこぶし大の丸い表示が互いに淡く発光するとドアが自動で開いた。

「あのさ、その印みたいなのって要するに認証パスみたいな感じの物なの？」

虹也は、気になった事はさっさと聞いてしまえとばかりに、隣りに立つ、拳骨二つ分ぐらい背が高い男に尋ねた。

会話をすると少し見下ろされる形になるのが、彼としては地味にムカついていたが、そんな細かい事で腹を立てていてもしょうがないので我慢をする。

「ほんとに基本的な事から分からんのだな。これは軍の専用術紋だ。普通の術紋は一つに付き一つの作用を持っているが、こいつはスパイラル機構によって一つで複数起動を実用化させてる。一般的に複数起動の術紋は人為的誤作動を起こしやすいから免許制のものが多いが、これはその最たるもので、軍人さんご用達ってやつだな」

滔々と語られた内容は、それなりに砕いた説明なのだろうが、基礎という一点が抜けている虹也には残念ながらあまり役に立たなかった。
「そもそもその術紋って何？」
「そっからか！」
墨時は自身の頭を片手でくしゃっと掴むと、参ったという風に息を吐き出した。
「う～んっと、術士が魔気を使って術を行使するってのは分かるか？」
虹也は無言で頭を横に振る。
「うぬぬ、こうやって魔気が発生するじゃないか？」
軽く手を振ってみせる彼に虹也は懐疑的な目を向けた。
彼がそうやって手を動かしても別段何も変化はない。
墨時はあーとかうーとか、俺は理論は追加学習組とかぼやいていたが、覚悟を決めたのか説明を始めた。
「異なる物同士が接触すると魔気が生まれる。今、俺たちがこうやって動いてる間にも魔気は発生してるし、要するに魔気は動く存在があればそこに必ず発生する訳だが、これは作用エネルギーと言ってそのままだと即、他のなんらかのエネルギーに変化する一過性の現象に過ぎないんだが、方向性を示されればそれに従って変化する特性を持っている。そして、全ての生体はこれを独自に変化還元する独立細胞を細胞核に持っている訳だ」
「ミトコンドリアみたいな？」
細胞核という部分から虹也が連想した名を挙げると、墨時は首を傾げてしばし考え、「ミト？」と返した。
「ミトコンドリア。確か生物の細胞核に在って酸素を利用してエネルギーを作り出してるもの？かな？」
彼もまたあまり自信は無かったが、自分の理解の範囲で虹也はそう説明した。
「へえ、確かそんな役目もあった気がするが、そんな名前は聞いた

事ないな」
「気がするって……」
「俺、こういう理論とかはどうも苦手で」
ハハハと笑い、ごまかすように咳をしつつ、墨時は続けた。
「ともかくだな、細胞核にはそのミトなんとかじゃなくって、アルケミーという共生体があって、これが生物の生命活動を支えているらしい。んで、これが魔気を使っているんだそうだ」
あまりにもざっくりとした説明に、虹也はふうと溜め息を吐いてみせる。
「凄く頼りない解説ありがとう」
「まあそう言うなって、んでだ、中にはこれが現象変換に特化した遺伝子資質を持つ個体がいて、そいつらを魔術士と呼ぶんだが、この現象を個人の資質に頼らずに記述誘導によって使えるようにしたのが術式。それを一歩進めて使い捨てじゃなくしたのが術紋って訳だ」
「現象って具体的にどういう事？」
今聞いた情報を頭の中で整理しながら、虹也は重ねて聞く。
「それは、っと。後にしようか？準備出来たんでさっさと潜ろう」
パネルを操作していた手を止めて、墨時はにやりと笑ってみせた。
派出所の、その術紋とやらで認証するらしい通用口のドアを開け、真直ぐ廊下を抜けた先の部屋にその装置はあった。
それがゲートだと言われた、床に描かれた掘り込みの図柄は、人が１０人は立てそうな大きな円を描いていて、所謂魔方陣なるものを彷彿とさせたが、しかし、それを形作る線は、マンガや怪しげな本等で見かけるそれよりもっと複雑で絵画的な物だった。
その大きな円の中は、びっしりと細かい線で埋まり、さながら彫り込んだ線のみで絵柄を浮かび上がらせるリトグリフのようですらある。とてもでは無いが、その一つ一つの線を目で辿る事は出来なかった。
それをどうやってか操作するらしいパネルが傍らにあって、墨時

がなにやら弄りながらの会話が、先刻のものだったのだ。
墨時が作業の完成を告げてすぐに、床の円内の線が複雑に繋がりを持って光の文様を描き出す。
準備が出来たというのはこの文様が必要な形に完成したという事だろうと虹也は見当を付けた。
そして、ぼんやりと眺めるその複雑で美しい文様は、そのものではないが、それと相似した物を、彼の無意識の領域から呼び起こす。

白く細い指が描く見事なまでの真円。
彼がどれ程頑張っても歪みの無いその線を真似る事は適わなかった。
尊敬と愛情。この小さな世界が、彼ら二人のみで構成され、完全な物だった時代の記憶。

そう、それは姉の記憶だ。
不意打ちのように思い浮かぶそれは、始めから失われてなどいなかったかのように当たり前に思い浮かんで来るが、それと同時に喪失の痛みを予感して、無意識が深くを探らせまいとする。
おかげで取り戻した記憶はジグソーパズルの断片のようにバラバラで無秩序で纏まりが無い。
「術紋か。魔術とか……俺、ファンタジーは門外漢だぜ」
現実逃避のような弱音がつい口をつく。彼が作ったクラブには、その名前から、その手の嗜好の人間が勘違いして転がり込んで来てはいたが、彼自身はメルヘンとファンタジーの違いも分からないぐらいそのジャンルには無知だった。
何しろ一時期評判になった指輪物語やらハリーポッター等も名前はさすがに知っているが、何の話なのかは全く分からないという程度なのだ。
ましてやそれを現実として目前にする事になろうとは、全く想像だにしないような事態である。

かといって好きなＳＦの世界なら放り込まれても平気という訳では無いのだが。
「こんな事になるなら伊東の言ってたＲＰＧなるものをやっておけば良かったかもな」
「おい、何一人でブツブツ言ってんだ？気味悪いよ」
「おっさん……」
「こんなナイスメンをつかまえておっさんとか、無いだろ」
「いや、ナイスとか、自分で言っちゃ駄目だと思うんだ、俺」
「うるさいな、お前だって到底氏族の若様の言葉遣いじゃないぞ。ほら行くぞ」
「だからそんなんじゃないから。で、どうすれば良いんだ？これ」
言い合いながら、墨時の側に近付いた虹也だったが、そこからどうすれば良いかが分からない。なんとなく足下の光の線を踏み消してしまったらいけないんじゃないか？と思ってしまい。自然とおっかなびっくりな足取りになってしまった。
笑いを堪えている年長者には一言言いたい気分だったが、勝手の分からない事柄はやはり聞くしかない。
「接続確認とセイフティに約１０秒、用意が出来たら腕でもひと振りすれば発動する」
「腕を振る？」
この場合、目視の合図は確認する相手がいないから意味が無いだろうと虹也は首を傾げるが、墨時はその意味を説明した。
「魔気を発生させるのさ」
なるほど、先ほどの説明からすれば、密閉空間では意図的に何かを動かさなければ魔気は発生しない。もちろん彼らが動いて喋っているのだから、ある程度の魔気は発生しているのだろうが、その程度では動かないのだろう。大きなアクションが必要分の魔気を発生させて、この術紋を稼動させるという仕組みだと思われた。
理屈が分かって、虹也は頷く。
「んじゃ、納得した所で行くぞ」

宣言通り腕を大きく、頭上から腰の下迄振り下ろすと、可聴ぎりぎりの細く高い笛のような音が響き、まるで風景が塗り替えられたかのように変わった。
（この感じ）
その唐突さには覚えがある。あの、庭先から違う景色に放り出された時と同じだ。先ほどのような音は耳にした覚えはないが、今のは機械の音なのかもしれない。
やはりあの移動はこの魔術とやらが関わっている可能性が大きい。虹也はそう思った。
「よし、後は車でも拾って帰るか」
着いたのは、虹也にはどこだか分からない建物の中だが、墨時には当然ながら馴染んだ場所らしく、のびのびと体を伸ばして軽くほぐしたりしている。
足下の光の線は名残のように淡く光って消え、後には前の場所と同じ、絵画的な線に埋め尽くされた、床に掘り込まれた円だけが残った。
「ちょっと聞きたいんだけど」
「なんだ？」
「俺を迎えに来たのって仕事だよね」
「そうだな」
「報告とかは良いの？」
彼のまっとうな問いに、墨時はくるりと体ごと振り向いた。
「良いか、俺はもうこれっぽっちも仕事の気分じゃないんだ。やることはやった。それで今日はお終い」
ニヤリと見せた獰猛な笑みに、虹也は肩を竦めた。
どうせ困るのは彼では無い。事情も分からないのだ。どうにでも好きにすれば良いと了解した。彼自身も疲れていて、休めるものならもう休みたい気分だった事もある。
流しの車、虹也の感覚ではタクシーのようなものは、文字が次々と浮かぶネオンのような飾りを車体に施していて、いかにも客商売

だと分かりやすかった。
車は彼の知るものと大きくは変わらないが、排気筒が無い所を見ると、ガソリン車では無さそうだ。
形は全体的に前が低く後部の車高が高い。
何かに似ていると考えて、思い至る。
馬車に似ているのだ。あとカタツムリ。
カタツムリはともかくとして、馬の居ない馬車という感覚は車の原点でもあるし、感覚的には理解出来るものがある。
彼の知っている車は空気抵抗とかを考慮してどんどん流線型に近く変化していったが、車の形にも流行りがあるし、ゲートがあるこの世界では車のスピードを競う理由が無い可能性もあった。
色々と比べてしまっているその彼の横で、彼の保護者というか連れは、怠惰な動作で「流し」の車に手を挙げてみせ、それを停めた。
(停め方もほとんど同じなんだな)
「よお、公民宿舎まで頼むよ」
「はいよ、お役人さんも遅くまで大変だね。弟さん?……な訳ないか」
「そうそう、詳しくは聞くなよ」
「承知してまさ、俺はこれでも代々運びの仕事でね」
「どおりで、深夜に同族とは今時珍しいもんな」
「そうよ、旦那。昨今は夜行の連中に夜は飛ばされまくってまさ」
「しょうがないさ。うちもめっきり夜間は夜行族が出ばってるし、適材適所ってね。他種族との関係は良好な方が軍として有り難い。外戦(そといくさ)とかやりたくないもんな。治安を預かってる方が民にもウケが良いし」
「平和主義の軍人さんですか?そりゃあ良いや」
世間話が世界の違いを主張している。
なるほど、警察組織は軍の中にあるんだなと虹也は知識を拾った。
だからと言って軍国主義風でもないようだし、平和な時代だった彼の元いた世界に近い空気をこの世界にも感じる。

「着きやしたよ、旦那」
「ありがとう」
墨時がそう言って差し出したのはどう見てもカードだった。
運転手はそれを受け取ると同じサイズのパネルに当てて直ぐに戻す。
（カード決済か、ファンタジー感溢れる世界なのに、ちょっとうちより進んでるんだな）
虹也は変な所に感心してしまった。
車が停められた場所は公民宿舎という話だったが、一見、高層マンションのような建物だ。流石にそれなりに時代は経てそうだが、元の場所で目にしたとしてもおかしくは思わないたたずまいに見える。
「さて、官舎は安全性の確保の為に本来は出入りが面倒なんだが、取り敢えず今夜は同伴だし、説明は後にするけど俺から離れるなよ」
離れると不審者として攻撃でもされるのだろうか？
少し興味があったが、虹也は大人しく従った。なにしろ保護されている立場なのである。いくらぞんざいに振る舞ったとしても、あまりにも厄介を掛けるのは本意では無かった。
エレベーターは殆ど彼の知識にある物と変わらなかった。
やはり他の全てと同じく曲面で出来ているが、展望エレベーターにはそういう物があるのを見掛けるし、珍しいとも言えないだろう。
ここに来て、虹也は段々自分が単に夜道で迷子になっただけのような錯覚に陥りそうになった。
が、
「ただいま」
「おかえりなさい、お仕事お疲れ様」
特徴的な少し鼻に掛かったハスキーな声。
（奥さんか、色っぽい声だな）
家庭的な匂いを感じると、途端にお邪魔してしまうのが申し訳なく思ってしまうが、このガサツな男の伴侶に興味がない訳でもない。

既に説明を入れているはずだが声に咎める響きは無かったし、見知らぬ他人を連れて戻るぐらいはなんでもないような懐の大きな女性なのだろうか？或いは慣れっこだとか？

「すいません、ごやっかいになります」

虹也は頭を下げ、そのまま相手を確認する為に顔を上げる。

「ご丁寧にどうも」

彼の目が受け取った情報は、しばし彼をフリーズさせた。

目前で微笑んでいるのであろうその女性は、ふんわりとした毛皮をした二本足で立つ犬のように見えたのである。

家を守る人

犬と言っても色々種類があるが、彼女はそのどれとも言い難かった。

一番近いのは狼犬だろうか？

いっそ狼そのものと言えば良いのかもしれないが、それはやはり違う。

なぜなら彼女の目に窺えるのは野生の厳しい輝きでは無く、優しい労りだったからだ。

それが彼女に人間らしさを与え、獣らしさを殺いでいた。

敢えて言うならばやはり穏やかな犬に近いと言わざるを得ないだろう。

プロポーションは人間の女性とそう変わらない感じだが、やや肩幅が広いかもしれない。というか胸筋から肩、上腕に掛けて逞しい。しかしそれは個体差かもしれないので、それを当たり前の事として覚えるのは危険だと思えた。

ハッキリしているのは、彼女の顔が犬の類いのそれである事と全身が自前の毛皮で覆われている事だ。

服は一応着てはいるが体毛の薄い前面のみを申し訳程度に隠しているにすぎない。

なんというか、以前後輩がクラブ部屋のＰＣに何時の間にか入れていて、なんだかんだ言いながらも結局全員で遊んだ（クラブに女子は居なかった）いわゆる「エロゲー」というやつにに出て来た、裸にエプロンだけ装着する怪しげな服装を彷彿とさせるものであった。

彼女の全身を覆うのは柔らかそうな薄茶の長毛だが、頭頂部から背中に掛けてのたてがみのような一筋の部分だけ銀色になっているようである。

どう見ても、何度見直しても、虹也の認識上の人とも、だがやは

り単なる犬とも違う存在だった。
「なんだ銀穂に見惚れてんのか？」
墨時が軽い口調で揶揄するが、そこになんとはなしに牽制の色を感じる。
その、非現実な存在に対する余りにも俗な勘ぐりが、虹也を呆然とした思考停止状態から引き戻した。
そして、今からごやっかいになる家の奥さんを指差して悲鳴とか上げられないよなぁとか考える。
そう考える余裕が出来た。
「ええっと、あの、こういう姿の人を見た事が無かったんで、不躾に見てしまってすいません」
「まあ」
銀穂と呼ばれた彼女は、少しひやりとする笑いを含んだ声でそれに応じた。
「良いとこのご子息じゃ仕方の無い話よね、術氏族なんて純血主義の最たるものだし、あたし達みたいな草原の民や森の民なんて御話の中でしか知らなくったっておかしい話じゃないわ。でも、この国は今融和政策を執っていて市井には異種族が増えてるから、私なんかで驚いてたら、きっと街中で大変な事になるわよ」
警告じみた彼女の指摘は、本質的に見当違いながらもそこに大事な情報を含んでいる。
彼女のような人が、そういう種族として当たり前に存在するという事だ。
「あ～銀、わりぃこいつ訳有りで常識が無いんだ。勘弁してやってくれ」
「あら、そうなんだ。ごめんね」
墨時が虹也自身の代わりに弁解をしてくれると、彼女はあっさりとひやりとした雰囲気を消した。
しかし、謝られて、虹也は返って慌てた。彼にここの常識が無いのは確かだが、知らないからと他人を傷付けるかもしれない言い回

しをしてそれを免罪符にするのは違うだろ？とそう思うのだ。
「そんな、親切に忠告して貰って有り難いぐらいですよ。むしろおかしな事を言ったらどんどん叱ってやってください」
「お前って奴は」
言って墨時が呆れた風に首を振る。
「要領が良いのか悪いのかわかんねぇ奴だな」
「さあさああんた達、細かいお話は後にして。いつまでも玄関先で話し込むもんじゃないよ。さ、上がって」
バサバサと言葉に合わせて銀色の豊かな尻尾が揺れる。
よくお月見の時期に飾られる銀色の穂のススキを彷彿とさせるそれは、うっかりすると捕まえて触ってしまいたくなる誘惑を伴っていた。
伝説的な狼男等を思い起こすような姿ではあるが、彼女のその顔は良く見ると本物の犬より平坦で、より人間っぽい造作だ。耳の位置も良く描かれる獣人のように頭頂部ではなく、虹也達のような人間とほぼ同じで位置にある。しかし形や見た目自体は獣のそれと同じように長い毛に守られて、三角に近い形だった。
「失礼します」
「なんだ、他人行儀だな」
「他人ですから」
率直な彼の返事になんだか機嫌を悪くする墨時に、呆れを通り越して笑ってしまう。
出会ったのはほんの数分、彼の感覚が間違っていてもっと長いとしても数時間は経ってないはずだ。こんな感じで捜査官などやってられるのだろうか？
疑問が顔に出たのか、銀穂と呼ばれた女性が苦笑してみせる。
「気を付けなさいよ。この人の人懐っこさは筋金入りよ。なんせ勝手に転がり込んで来た私を、１０年以上も追い出せないままなんだからね」
「１０年ですか！？」

「ええ、正確には１２年になるわ」
「じゃあご結婚なさってる訳じゃ無いんですね？」
「ゴケッコン？」
「う……」
　それまで普通の単語は殆ど通じていたので、まさかこれが通じないとは思わず、虹也は固まった。
（ええっと、どう表現すれば良いんだ？ツガイはあからさま過ぎるよなあ）
　困惑した挙げ句、取り敢えず先に使って、通じるのが分かっている言葉を使う事にする。
「あ、奥さんだと思っていたんで」
「あ、成婚してないのかって聞いたのね。残念ながらまだ縁を繋いでないの」
　成婚というのがこちらで言う一般的な結婚を表す言葉らしいと記憶に止どめながら、虹也は廊下の先で妙な顔をして彼等を待っている墨時に冷ややかなまなざしを向けた。
「俺、墨時さんを少し格好良い人かな？って思ってたんだけど、幻滅したよ。うちの母さんが、女を泣かせるような男は存在自体が害悪って言ってたんだけど、本当にそうだね。そんな長々と女性を宙ぶらりんで不安なまま待たせるなんて、害悪というか既にゴミだね」
　虹也は冷ややかなまま言い切った。彼の父は母を本当に大事にしていて、彼等の、言葉とそれ以外で示す正しさを、彼は心から大事にしてたのだ。
「いや待て、なんでそこまで言われなきゃならんのだ」
「１２年はいくらなんでも長いでしょう」
「そうそう、言ってやって」
　流石にそこは女性である。銀穂はにこにこと虹也の後押しをしてみせた。
「ぎん！」
「ん？とうとう追い出すつもりになった？でも出て行かないけどね」

「頼むから、疲れてんだからいびるな。湯を浴びて来るから坊やになんか食わせてやっといてくれ」
思いっきりぐったりと奥の扉へと去って行く同居人を見送り、銀穂は虹也に笑い掛ける。
「ありがと。あたしらってさ、すっかり惰性に流されちゃって大事な事から目を逸らしちゃうんだよね。たまにこういう刺激は大事だと思うから」
「一緒になれない理由があるんですよね？」
流石に彼等の雰囲気でそこの部分は分かっていたが、チクチクとつい苛めてしまった虹也は苦笑して聞いた。
話ながら案内されたリビングは、ゆったりとしたフローリングの部屋で、虹也の見た所8畳程度の広さだった。家具はあまり無く、真ん中付近に毛足の長い絨毯が敷いてある。テーブルはその上に置いてあり、足の短い、床に直に座って使用するタイプだ。いわゆるちゃぶ台のちょっと立派なやつである。
ちゃぶ台タイプとはいえ、いかにも重そうな木製だった。
「どうしてそう思うの？」
銀穂は、虹也をそこに適当に座らせながら聞いた。
「だって、墨時さんって、他人をないがしろにしそうなタイプじゃないですもん」
「あら？」
彼女の声が少し高くなる。
「そんな風に言い切れるぐらい親しいって事？」
「いえ、さっき初めて会ったんですけど、だからこそ感じるんです。そんな全然親しくない俺の面倒を嫌がらないどころか当たり前のように助けてくれるし」
「そっか、でも詳しい話は私は知らない方が良いかもね。仕事がらみだと色々面倒だしね。さ、ともかく梅酒でもどうぞ、冷やしてあるから」
いきなり酒か。と、やや怯んだ虹也だったが、一応ここは公僕に

属するであろう人間の家庭である。確認してみる事にした。
「俺、１８なんだけど酒良いんですか？」
銀穂はきょとんと首を傾げる。
「家で飲んだり食べたりするのに年が関係あるの？」
これ以上は無い程の真顔である。
（お酒に関してはかなり大雑把な法律なのかな？）
彼女はわざと惚けている感じにも見えない。家庭での飲酒は自由という事なんだろう。きっと……。
郷に入っては郷に従えとは正にこの事だよな。と、彼は一人うんうん頷いた。
「じゃ、遠慮無く頂きます」
冷えたグラスに口を付けると、甘酸っぱい香りが鼻孔に流れ込む。
「うまい」
ただアルコールに梅と氷砂糖を漬け込んだ物ではない、癖の無い甘味と、炭酸程尖っていないがサワーのような喉を通る壮快感があった。
もしかすると梅自体が違うのかもしれない。
それぐらい気持ちの良い旨さだった。
「口に合って良かった。桃源酒をだせとか言われたら、一発はたいてあげようかと思ってたのよ」
グッと、虹也は飲みやすいはずの酒に噎せ掛けた。
「はたくんですか？」
「そりゃあ、イラっと来るから」
にこやかな表情と隔絶した言葉の内容に虹也は引きつった。
流石に１２年も同棲を続ける女性は違う。
口に出すと我が身が危うそうなので、虹也は無言で冷や汗を感じながら戦慄いたのだった。
ふわふわとした絨毯の敷かれた床に胡座をかいて座っていると、まるで雲の上のような心地で、体に入ったアルコールの影響もあって眠気が押し寄せる。

こんな何もかもが不明瞭な状態で眠いだなんて、自分も大概図太いな。と、彼とて思わないでも無かったが、眠いものは眠い。
「あの人、あんな仕事だし、巻込むのが怖いんだと思うんだ。私も勝手に押し掛けた弱みもあったし」
「押し掛け女房なんですね」
「確かに女中みたいなもんかな？私、貴方ぐらいかちょっと下ぐらいの時、かなり色々暴れててね。それをあの人が熱心に私らのグループの溜まり場に来て更生させようとしてて、そうこうしてる内になんか良いなって思ったんだ」
話的にはドラマでも使い古された陳腐なきっかけだ。だが陳腐だからこそ人はそれを運命と思うのかもしれない。
「若気の至りですね」
「若い時の暴走っていう事？そうは言うけど真剣だったのよ、今でも気持ちは変わらないし」
「えっと、これは惚気かな？」
ふわふわした気分のまま、なんとなく亡き両親と会話しているような気分になって来て、虹也は微笑む。
両親も油断すると息子を前にさんざん惚気る、「年を取ってもラブラブカップル」だった。
「惚気はシングルに対する暴力だとは思いませんか？結婚しちゃえよもう」
「ちょっと、大丈夫？貴方」
「大丈夫というのはですね、おっきく丈夫であるという事ですよね？丈夫とはますらおと読む訳ですが、ますらおとは健康な成人男子を指す訳で」
虹也の既にふわふわだった意識は、ここいらでクラクラになってやがて途絶えた。

朝の食卓

「ふあー、やっとまともにものを考える気分になったぜ。んで、なんでこいつ寝てんの？」
墨時は渇き切って無い髪をばさばさとタオルで拭きながらそう言うと、居間のラグの上ですっかり眠り込んでる虹也を呆れたように眺めた。
銀穂は苦笑してみせると、デカンタを示し、
「梅酒を一杯飲んだだけなんだけどね」
そう、説明する。
「そりゃまた弱いな。……いや、先に食わせるべきだったんじゃないか？言ってもしょうがないが」
「どうしようか？」
「転がしとけ、風邪ひくような陽気じゃなし」
どうやら墨時はあまり保護者向きの男では無かった。
「そだね」
そして、銀穂には彼の提案に逆らう理由はない。
そういう事で本人の知らぬ間に、虹也は一晩を床で過ごす事が決定した。
ちなみに家の主はその横でちゃんと飲み食いした。

居間で転がっている被保護者を残し、寝室へと引っ込んだ二人は、ゆっくりと体を伸ばしていた。なにしろ墨時は1週間程の出張の後だ、自宅の布団で寝るのを夢に見たぐらいホームシック気味になっている。
「お前の毛並みの手触りを感じると家に帰って来た心地になるよ」
「上手い事言って話を逸らす気でしょ」
虹也が突付いた事で、銀穂は抱えていた不満を表明する事に決めたらしい。墨時は舌打ちをしたい心地だったが、ここで下手を打つ

訳にはいかなかった。
「ああ、うん、いやその」
「なんかそういう返事をする自動人形があったわね」
といっても、やはり下手を打つのがこの男なのだ。
「いや、ほんと色々ごめん」
銀穂は噴き出すように笑うと、しょぼくれた想い人の頭を撫でる。
「私達、いつの間にか考えるのを止めていたわね。もう一度真剣に考えてみましょうよ」
「分かった。ほんと悪かった」
墨時自身にも自覚があっただけに、二人の関係をどっち着かずで放置していた事に関しては謝り倒すしかない。
「あの坊や」
頃合良しと見たのか、銀穂は話題を切り替えた。
自分の目を指差し、なんとも言えない表情で笑ってみせる。
「ノーブルカラーだね」
墨時は頭を掻いた。
「見えたか、まいったな」
「明るい場所だと見え難いのは確かだけど、貴方が仕事を自宅に持ち込むなんて珍しいから注意してたのよ。別に話せとは言わないけど、攫って来た訳でなきゃ良いの」
「あんなでかいの攫って来ても困るだろ？」
墨時は自重気味に笑った。
「なんでだろうなぁ、とりあえず早くお前に会いたかったのと、坊やが迷子っぽかったからかな」
「氏族の坊ちゃんが迷子ね、人らしくて良いわね」
「お前が氏族嫌いなのは知ってるけどさ」
「別に嫌いなんじゃないわ好きじゃないだけ」
「違うのか？」
「違うわよ」
「そっか」

墨時はそのまま彼女の背中を抱き締める。
柔らかで暖かな銀の波に顔ごと埋もれて、くぐもった声で呟いた。
「いつもありがとう」
「なにが？」
「家で待っててくれて」
銀穂はククッと、喉の奥で笑う。
「こちらこそ、愛想を尽かせずに帰って来てくれてありがとう」

もふもふのワンコがいる。
虹也の目前には、なぜか白い大きな犬がいて、白い尾をゆらゆら揺らせていた。
（確か近所にピレネー犬飼ってるとこあったよな）
記憶が確かなら山岳救助したりする大きな犬だ。
そのもふもふの犬は、もう少し近付けば手が届きそうな場所にいるのだが、なぜか体が重くて進めない。
（あ～もふもふ）
触れないとなると益々その感触を味わいたくなるというもので。
「ん～」
頑張って手を伸ばしてみるも上手くいかない。
疲れ果て、挫折の果てにぼんやりしていると、楽しげな声が聞こえて来た。
誰かがもふもふのワンコを撫でているのだ。ワンコも楽しげにじゃれている。
飼い主だ。……きっと。
他人のワンコなんだから嫉妬するのは理不尽だとは思っても、やはり悔しい。
「あのさ、無視してないで俺もまぜてよ」
良いな～気持ち良さそうで。
虹也は少々憮然としながらも、幸せそうなその一対を羨望のまな

ざしで見詰めていた。

プカリと、水底から浮かび上がる感覚に近い唐突さで、虹也は覚睡した。

「う、……う？」

柔らかい床の感触は、だが布団のそれとは違い表面だけのものだ。

「あっ痛」

体のあちこち、特に下敷きにしていたらしい右半身が痛む。

体の上には毛布が引っ掛かっていて、一応の配慮は伺えた。

（いやいや）

柔らかめの絨毯が敷いてあるとは言えフローリングの床に客を寝せるとは何事だろう？

ごろ寝なぞ、友人達と「深層心理を探る！限界まで連想ゲーム！」をやった結果として、次々と撃沈して以来だ。それでもその部屋は畳だった。

「いや、マジ痛い。有り得ねぇ」

ごそごそと毛布をずり落とし、ゆっくりと関節を伸ばす。

右腕は案の定痺れていて、戻りのあのグッと来る痛さに耐えた。

（そういえば、夢見も悪かったような）

ぼんやりと不快な気分を思い出してイラっとする。

「お、起きたか」

「起きたかじゃねぇよおっさん！」

「お前、更に残念な言葉使いになってるぞ」

「残念にもなるわ！なんで硬い床で寝せてるんだよ！」

「いや、寝たのはお前だから、梅酒一杯で」

「くっ、」

流石に言葉に詰まった虹也だったが、なんとか気持ちを盛り返した。

「それにしたってどうにか出来たんじゃないのか？起こすとか運ぶ

とか」
「疲れてるようだったし起こすのも可哀想だという親切心だろ、それにでかい男なんぞ運べるか」
虹也はうなったが反論ができない。
ぐうの音も出ないとは正にこの事だろう。
「まぁでも、昨夜より顔色は良くなったんじゃないか？」
邪気無くそんな風に言われれば尚更文句を言い難くなってしまう。
「別に具合は元から悪く無いし」
「そうか？昨夜は足下も定まらないって感じだったが、元気ならそれに越した事は無いし、とりあえず朝飯食うか？」
「いや、脈略がおかしいから」
「うちのぎんは、ああしてて結構料理上手いんだぜ、ちと肉に偏るきらいはあるが」
食事と聞いて、体は正直なもので急に空腹を感じた虹也だったが、流石に朝から肉はどうかと思った。
なにしろ彼は生粋の和食党であり、朝は味噌汁とご飯の口だ。
「おはよう、さ、自分で使った毛布は自分で片付けて、男二人いるんだから机もとっとと出す！」
急かされて朝食の好みなどグダグダ考える暇も無く指示に従って動く。
割と重いテーブルを昨日のままに真ん中に設置すると料理が運ばれて来た。
「運ぶの手伝って！」
「へいへい」
「ちょっと、さり気なくどこ触ってんのよ！」
「朝の挨拶だろ、ってぇ！こら何するコウ！」
「手が魂の叫びに従っただけだ」
「それが家主に対する態度か？！」
「甲斐性なし、女の敵、いや、彼女の居ない男の敵め。他人の前でいちゃつくなボケ」

「ああん、てめぇちと世の中の仕組みというものをだな」
「墨時！」
「あ、はいはい運びます」
とても昨夜転がり込んだとは思えないぐらいのなじみっぷりだったが、この雰囲気は虹也には違和感が薄い。
彼の、いつまでも心は新婚さんな両親が、二人とも元気な頃は毎朝のようにこんなやり取りを展開していたのだ。

『はいはいさっさと運んでね』
『老人使いが荒いぞ！』
『まぁ、ご都合のよろしい時だけ年寄りらしくなさるのね。あなたおっしゃったではないですか、俺の方が年上なのはお前を守る為に世界がそうしたんだって』
『うぉっほん！』
『まあいけませんわ喉をどうかしまして？』

「おい、これは真ん中で良いんだよな」
「ええ、でも私はオイという名前じゃないです」
「むう、ちょっとぐらい格好を付けてもだな」
「横暴さは格好良さとは何の関係もありません」
色々な事が分からない場所だが、同じ人としての在り様が安心できた。
「そうそう、横暴な男は格好悪いよね。ところでさ」
虹也は先程気になった事を聞いてみた。
「さっき俺の事コウって呼んだ？」
「ああ、虹也だからコウ。良いだろ？」
何か自慢げだ。
「墨時って誰でも略称にしちゃうんだから」
「何を言う、術士とか名前を呼ばれるのを嫌うじゃないか。それを考慮してだな」

「自分から名乗るような名前に危険なんかあるもんですか。覚えるのが面倒なだけでしょ」
（コウか）
思えば親しい人間は皆、彼をコウと呼んでいた。
とても遠い場所なのにここには馴染んだ空気がある。
少しだけ全身に掛かっていた力を抜いて、虹也はあれから何度目かの「渇」を自分の腹に飲み込んだ。
（ここは現実なんだ）
ふと虹也は自分の席（だと思われる場所）にある器がそれだけ違う事に気付いた。
少し大きめの木椀。いわゆる丼茶碗のようなそれには、粥のような物がよそわれている。
「体調がどうか分からなかったんで粥にしたんだが、物足りないようなら換えても良いぞ」
墨時の言葉に虹也は改めて食卓を見た。テーブルの上には大皿に肉と野菜が盛ってあり、肉が生ならどこぞの焼肉店のようだ。
絵面だけでも来るものがあって、虹也はげんなりと肩を落とした。
確かにあれを見てしまうとお粥は魅力的だった。
「朝から重い物は無理みたいなんで有り難いです」
「なぜ俺でなくぎんに言う？」
「作ってくれた相手に礼を尽くすのは当たり前だろ？」
「……もしやお前俺が嫌い？」
「なんで？」
虹也の心から不思議そうな顔に、墨時は薄く笑った。
彼は捜査官である。こんなあからさまな挑発に気付かない訳がない。
「梅酒一杯ごときで潰れた癖に」
「きっと体調が良く無かったんだよ」
「ほほう？」
「うんうん」

「アハハ」
銀穂が絶え切れずに上げた笑い声が二人の睨み合いを分けた。
「子供の喧嘩みたい。おっかしいよ二人共」
「あー、お粥の中に肉や野菜が入ってるんですね」
「話の変え方があからさま過ぎるよ、お前」
「お前じゃなくコウだよ」
「ん？」
「そう呼ぶんだろ？」
「ああ、そうかそうか、んじゃ飯にすっか」
先の事を根に持って、話しを流す事で挑発し返すという大人げなさがいかにも墨時らしく思えて、虹也は応えるように笑う。
（知り合ったばっかりなのにな）
「おｋ」
「なんだ、外縁部被れか？」
「ガイエンブ？」
「あ～もう、なんでもいいから飯にするぞ」
気になったが、分からない事が常態化しそうなので、ここで追求するのは止めて、虹也は大人しく席に着いた。
「じゃ、ご飯にしましょうか」
そういえば、こっちに来てこれが最初の食事なんだと、虹也はしみじみと思う。
父の研究の関係で彼は民話の類を色々と読んでいたが、多くの地方に、異界では何も口にしてはいけないという伝承が残っている。
異界のものを口にしたら、もう二度と元の世界には戻れない。そういう世界の決まり事があると。
「でも、よく考えたら昨夜にもうお茶は飲んだし。遅いか、もう。俺って自分で思ってたより暢気者かも」
口の中でそう呟いて、「いただきます」と食事に手を合わせたのだった。

朝の光景

（手巻き寿司っぽいな）

お粥と雑炊の中間のような自分の分の食事をゆっくりと口に運びながら、（ちなみに、つい勢いで掻き込んだら噎せてしまい。おもいきり呆れ顔で見られたので、現在はゆっくり食べている）家人の食事をそれとなく観察して虹也は思った。

それは皿に盛ってある肉や野菜の具材を箸で手に持ったご飯に乗っけてクルクル巻いて食べる料理のようだった。

ご飯の外側には海苔が敷いてあるし、感覚的には間違なく手巻き寿司だ。

（やっぱりなんとなく和食っぽくはあるな、上に乗っけてるのはどうも粗味噌っぽいし）

体調が良ければ一口味見をさせてもらいたい所だったが、どうも食欲がない。先程噎せた時にも思ったが、今朝の彼の体調は今一つ冴えなかった。

床に直接寝た事も影響はあるのだろうが、その節々の痛みとは別に、なんとなく全身に倦怠感があるのだ。

だがそれも仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。あまりにも目まぐるしく全てが変わってしまったのだ。いかに図太さに自信がある彼とはいえ、それに対して何も考えずにいられる程に突き抜けられはしない。

それに、この変化はまだまだ終わってすらいない。始まったばかりと言っても良いぐらいだ。

それにしても……。

虹也はどうしようもない事を考えるのはひとまず置いて、現在、自身の保護者であるはずの男を見た。

挙動がおかしい。

不安で一杯のはずの自分よりも、むしろ落ち着いていなかった。

どこがどうという訳ではないが、例えて言えば、まるで宿題を先延ばしにしている小学生のような、どこか迫り来る避けられないタイムアップに怯えるような、ほぼ上の空に近い様子が伺える。
ふと視線が絡むと、彼はバツの悪い顔を見せた。
「なに？」
「ああいや、お前じゃなくてだな」
ふう、と、訳知り顔の銀穂が視線だけを墨時へと送る。
「気になるなら連絡してみれば？」
その言葉で虹也にもピンと来た。
「本部への連絡？」
「ああ、いや、本部というより、相棒というか、お目付けというか、まぁそういう感じの」
なるほど、どうやらその相手が怖いらしい。
「んじゃなんで昨夜の内に連絡しとかなかったの？」
「ばっか、お前連絡なんかしてみろ、やっと帰って来たってのに家に戻れなくなるだろ」
「ふふふ」
銀穂がどこか照れの入った顔で、にこやかに笑った。
なるほどと、虹也も納得する。
「愛する相手に一目会いたいが為に我が身の破滅すらも恐れない。か、なかなかカッコいいじゃないか、おっさんの癖に」
「まあ」
銀穂はその言葉が嬉しかったのか、アクセントの跳ね上がった声を発した。毛皮に隠れて見えないが、おそらく顔が赤くなっているのだろう。
「待て！なんかいたたまれない解釈をするな！」
「違うの？」
「ちが……！？」
言い掛けて、墨時は傍らの同居人に目をやった。彼女は笑顔のまま彼を真っ直ぐに見つめている。

見えないプレッシャーがせめぎ合い、その圧力に磨り潰されたかのように言葉が失われた。しばし動かしようのない緊迫した沈黙が落ちる。

こほん、と、その雰囲気を払拭するように墨時が咳払いをしてみせた。

そして無言のままポケットから薄いシリコンシートのような物を取り出し、例の左手の術紋の在る辺りにそれをペタリと貼る。

そのちょっと厚めのシールようような物は、ぴったりと肌に密着して、淡く発光した。

墨時の武骨な指がその表面を撫でる。

ピピピと電子音に似た小さな音が鳴り、何か細かい線のような物が中空に展開した。

（もしかして、あれって携帯みたいなものか？）

横からはひとかたまりの黒い線のように見えるが、墨時の目の動きからすると、おそらくそれは文字だ。

とすると、なんらかの通信を受信するメールのようなものではないかと思われる。

（給茶機の時も思ったけど、ここの世界って空間に表示する技術が進んでるなぁ）

変な所に感心する虹也だった。

墨時は、しかし、それを一瞥すると、即、もう一度左の手の甲に右手を滑らせ、浮かんでいた文字らしき表示を閉じる。

「ここからじゃ詳細は分からなかったけど、なんか一杯連絡が来てなかった？」

虹也は、とりあえず確認の意味も込めて突っ込んでみた。

「見なかった事にしろ」

やはりそうらしい。

「どして？」

コップに冷や茶を貰い、それを喉に落とす。

香りが少し強いそれは、ちゃんとお茶の味がした。

美味しいけどやっぱりお茶は熱い方が良いなと、虹也は思う。
「今確認した所、通信記録に大量の伝言が残っていた。おそらく全部叱責文だ。そして本日出仕すれば間違なく小言を聞かされる羽目になる。どっちにしろ怒られるなら一度で済ませた方が良いに決まってるだろ」
良くないだろ、子供か？と、虹也は思ったが、とりあえずそこに突っ込むのは止めておいた。武士の情である。
「それじゃ、早く行った方が良いわね。あの人も相当沸騰してるでしょうから、とうとう思い余って貴方を消してしまおうとか思われたら困るもの」
「怖い事言うなよ」
「なるほど、原因そのものを消そうという発想は、古今東西追い詰められた時に最後に辿り着く考えだからね」
「やめれ！シャレにならんから！」
頭を抱える墨時は真剣だった。
（そんなに怖い人なのか）
からかいはしたが、虹也にとっては決して他人事ではない。
彼はこの件に関しては当事者というか原因そのものである。墨時に同行してその相手に会わなければならないのだし、なによりも、彼は彼等が思っているような被害者ではないのだ。
彼自身が自分を被害者だと声高に主張した訳では無いにせよ、なんらかの叱責を受ける可能性があるのは否めない。
更に、あくまで本当の事を事実として主張するならば、怪しい人物として拘束される可能性が無いとも言えない。
「でも、結局は行くしかない。か」
「はいはい、了解。じゃあとっとと行きますか」
虹也の半ば独り言のような言葉に応えが返り、思わず彼の口元に苦笑が浮かぶ。
たとえどんな結果になったとしても、この男が悪いようにしたりはしないだろうという、なんの根拠もないはずの予感がして、それ

がなんだかおかしかったのだ。
「なんだ？」
「いや、行こうか、おっさん」
「仕方ねえな。んじゃ行って来る」
「いってらっしゃい」
銀穂はクスクスと笑ってみせると食卓からそのまま彼らを見送った。
ふわりと、しなやかな所作で手を振り、送り出す彼女の背後で豊かな尻尾が大きく揺れる。
それは人の持つ言葉よりも雄弁な想い。
彼等の繋がりを微笑ましく思いながらも、その一方で、虹也は暖かな繋がりを持つ人々の居る、遠い故郷に想いを馳せた。

昨夜辿った道を逆になぞるだけの道程のはずだったが、その途上に見た風景は、虹也にとって驚きに満ちていた。
昨夜は深夜だったので、現在の光景をそこから思い描くには想像力を超えた物が必要だっただろう。だから、彼には当然のように予想が出来なかった。
通常、朝を迎えた人々の行動には、それが何処であろうと一つの決まった法則がある。すなわち一日の活動の始まりとしての行動だ。
そして、この町ではそれが一つの形として現れていた。

喧騒という形で。

「凄い人数だ」
虹也はうなった。
彼の住んでいた地域は田舎と言われても反論の余地がない程寂れた地方だったが、町中へ出れば商用のやたら高いビルやデパートもあったし、少し足を延ばして郊外へ出れば、大型ショッピングモー

ルすら存在した。
田んぼと畑しかない典型的な田舎とは言えないと彼は思っている。
しかし、今目前にある光景を前にして、あれが田舎ではないと主張するのはどう考えても無理だったろう。
そこには整然と乱立するビル群と、一瞥では把握出来ない人の群があった。
「凄い人の数ですね」
唖然とする余り、つい丁寧な言葉遣いに戻った上に同じ感想を繰り返す虹也に、墨時は不思議そうに首を傾げる。
「そうか？いっつもこんなもんだぞ。まあなんだ、南部の首都だし、少々人は多いかもしれんが」
今現在、彼等は車での移動を選択していなかった。
朝は車だとむしろ遅いらしい。
地下にターミナルがあり、そこを利用するとの話だった。
例のゲートのような物かと聞いたら、「あんな効率の悪い物、集団移動には使えないだろ」との答えが返った。
そもそも仕組み自体が分からない虹也にすれば「へえー」としか言いようがない。
そうして紛れ込んだ雑踏は、人込みに慣れない彼に、息苦しくなるような錯覚を引き起こした。
（まるで壁に押されてるみたいだ）
学生時代の朝の駆け込み登校の時ですらこんなに酷くは無かった。大体こんなに人がぎゅうぎゅう詰めになっていたら何も出来ないじゃないかと、胸の内で不平を鳴らす。こんな人数がいちどきに動くなぞ、どう考えても効率が悪すぎるだろうと、とりあえずの文句を並べてみて、ようやく気持ちを落ち着けた。
よくよく見てみれば、集団を形成しているのは彼のような、所謂ヒューマンタイプだけでは無い。
銀穂のような獣型の者、極端に小さい人、逆に極端に大きい者、トカゲにしか見えない者やでかい鳥のような者までいる。

虹也達のような外見の者に比べればそう多くはないが、むしろ少ないからこそ目立っていた。
「はぐれるなよ」
墨時が肩を引っ張ってそう忠告したが、人波に呑まれ掛けている身としては「無理」と、答えるしかない。
「子供か！？」
どこかで同じような事を相手に対して思ったよな、という虹也の心の声は当然ながら墨時には届かず、彼は虹也の二の腕をがっちりと鷲掴みにした。
そのまま遠慮も何もなく、ぐいぐいと引っ張られる。
恐ろしい程の握力で握りこまれた腕が、ぎしりと軋むような痛みを発した。
「ちょ、俺、連行中の犯人かよ！？」
「似た様なもんだ」
いかにもそっけないその言い様に、世の中は冷たいなと、虹也は思ったのだった。

どんなに大変でもとりあえずは仕事にいかなければならない

ここのインターフェースは大部分がパネル式だ。

ここに来て、やっと虹也にもその理由が見えて来た。

様々な体型、体格の種族が存在しているせいで、細かい指先の操作が必要な物は役に立たないのだろう。

ドアや水道がレバー式なのもおそらく同様の理由だ。

そんな事をしみじみ考えたのも、あまりにも浮き世離れした光景に精神が逃避を図った結果なのかもしれない。銀穂の予見は正しかったという事だ。

人波に押されて向かう地下の乗り物乗り場へと続く通路は、手前にある台のような所の丸いパネルを押し、カードを翳す事で通過する仕組みになっているらしい。

しかしその通路の入り口には、彼の良く知る駅の改札にあるようなゲート（遮断扉）は無く、全くの素通しである。これでどうやってチェックしているのだろう？と、虹也が頭を捻っている間にも、圧倒的物量の人の波は進み、流されるままにどうやら乗り場に着いた。

ちなみに虹也は当然ながらカードを持っていないのだが、墨時がカードを翳す時になにやら入力したようで、何も問題は起きてない。普通に考えれば家族やグループが利用する場合の集団チェックインのシステムがあるのは当然なので、その辺りは虹也は全く気にしなかった。

ただ、ちょっとだけ素通りしてどうなるか試してみたい欲求に駆られはしたが、面倒を起こすと既に連行モードになっている保護者が、手錠のような拘束具を使って来る予感がするので、さすがにそこは自制したのだった。

（地下鉄？）

彼の住んでいた地方には地下鉄は無かったが、修学旅行で東京へ

行った時に一度利用した事がある。
彼等の佇むその場所の雰囲気は、正にあの地下鉄そのものだった。
ほどなくして、キンッ！という金属的な音と共に、一瞬体全体を柔らかく後ろへ押される感覚を覚える。
「？」
いぶかしんで周りを見た彼の目に、線路沿いに滑り込んで来る金属の車体が目に入った。
そのフォルム（形）はなんとなく初期の新幹線に似ている。団子っ鼻の愛称で親しまれたあの形だ。全体がシルバーメタルに鈍く輝き、今、正にその先端部が青い光の線で二重の円を描き出し、その光はたちまち四方に飛んで、銀の車体を青くきらめかせた。
「おお、かっけーな」
美しいというよりデコトラ的な見せ方の派手さが虹也の琴線に触れた。
彼は自作のパソコンに意味もなく青いＬＥＤを取り付けてしまうタイプの、理由の必要ない光らせ好きでもある。
「ほれ、乗るぞ」
墨時の馬鹿力で腕を引っ張られるまで、虹也はそのシルバーの車体とその表面に踊る青い光の線を飽かずに眺めていたのだった。

電車（？）内は本来は広いのだろうが、恐ろしい程の人口密度でぎゅうぎゅう詰めになっている。だが、不思議と息苦しくなかった。
気付けば、墨時の手も虹也から離されている。停止状態ではぐれる心配は無い訳だから当然かもしれないが、なんとなく不自然な感じがする。大体、これだけの人数がいて、熱気が籠って無いというのはどう考えてもおかしかった。
空調がよほど優秀なんだろうか？
そう思い、思っただけで納得しない性格の虹也は、今なら大丈夫

だろうと、直接傍らの男に聞いてみる事にした。
「おい、おっさん」
反応が無い。
ムッとした虹也は彼をど突こうとしたが、その手はふわりと実態の無い何かに絡め取られるように静止する。
不思議そうに虹也がその手を見ていると、その有様に気付いたらしい墨時が目を合わせて来た。
その瞬間、どこか遠い感じだった彼との距離が急激に縮まった手応えがある。
「どした？」
その声を聞いて、虹也は既に大まかに事態を把握し掛けていたが、とりあえずきちんと説明して貰う事にした。
「人が狭い空間に大勢いるのに息苦しく無いのは何でだ？」
墨時も理解して頷く。
「ああ、公的施設や乗り物は、密集型隣接空間が個人の私的空間を意図せずに浸食する恐れがある場合、私的空間を保護する設備の設置が義務付けられる。だから気車には空間保護の設備がある訳だ」
「汽車？」
わざわざ説明させたものの、虹也が食い付いたのはそっちだった。
「気車ってのはこの乗り物の事な。どうせなんも分からんのだろ？今なら時間もあるし聞けるだけ聞いとけ」
「気前良いね。んじゃ俺が今おっさんと話してるのは周りに聞こえて無いみたいだけど、おっさんとは会話が出来るのは、その私的空間の解除条件がお互いの同意だから？」
「そうだ、互いが干渉を望めば接続状態になる」
「どこでその判断をしている訳？」
「意識信号の交流じゃないかな？スマン、細かい技術的な部分は流石に分からん」
「ＯＫＯＫ」
（という事は）

虹也はこの仕組みの一般的な利点に気付いた。
（ここでは満員電車の痴漢とか存在しないんだ）
あっちの世界にこういう仕組みがあれば、冤罪で酷い目に会う人もいなくなるのになぁと、以前観たそういう冤罪の映画を思い出して考える。そういった部分には感心しながらも、一方で、このやり方だとある程度の空間を個々に確保しなければならず、詰め込みに限界がすぐに来るから、乗れる限界人数は減るだろう事にも思い至った。
（でも、実際にそこまで詰め込んだら人死に出そうだし問題ないか）
都会の満員電車など経験の無い虹也は、ごく良識的にそう考えた。
見渡すと一面見知らぬ人（と、人かもしれない存在）というぎっちりした空間であったが、それぞれの表情に息苦しさは見えない。そこかしこに朝の気怠さが漂っているぐらいだ。
音も制限されているのか、静寂という程ではないが耳障りになるような騒々しさは無い。
「便利だね」
「そりゃお前、殺し会いの原因第一位が私的空間の侵害なんだから対策もするわな」
「そ、そうなんだ」
「単一種族だけで凝り固まってりゃそうでも無いんだろうけどな」
「なるほど」
こちらの方面も必要だから発展してきたのだろう。
肌の色とか目の色とかいう次元の話ではないのだ、生態そのものすら違うとなれば、共存の苦労は想像もつかなかった。
しかし、息が詰まらない工夫がしてあるといっても、感覚的な余裕が生まれるだけで、実質はぎゅう詰め状態という事に変わりはない。
彼等は当然の結果として、気車から吐き出されると同時に揉みくちゃになった。
何百メートルも全力疾走したような有様になって、フラフラ状態

の虹也が、ようやく息を吐けたのは全体的に落ち着いた佇まいの通りに入ってからである。
今通り抜けて来た人に溢れた通りに比べ、明らかに建物が古く、また周囲に緑が多い。
「官庁街？」
なんとなく共通した雰囲気に虹也はそう口にした。
「そそ、ここらへんはお役所ばっかりだ。ン百年単位の建物が多いんだ、これが。お国も結構みみっちいよな？歴史がどうこうとか言ってるけどさ、どうみてもボロい建物だろ？うちはそん中でも更にぶっちぎりでボロいから驚け」
驚かなきゃならないのか。と虹也は唸り、期待に応えた驚き方を検討してみた。
（とりあえず見てみない事にはなぁ）
場の雰囲気というものがあるし。等と考えていた彼は、ふと顔を上げて、自分が顔を上げたという事実にまず驚いた。
「あれ？」
違和感。又はそれに準ずる何かを感じる。
思わず頭を巡らせた虹也の腕を墨時が引いた。
「きょろきょろすんな、ほれ、そこが…」
コマ落としのように時間が動く。
「おっさん！」
左手側、墨時の示す建物と彼等を挟んだ反対側にその相手はいた。
一見普通のサラリーマン風、外見や動きに周囲との違いがあった訳では無い。
ただ、虹也には何かが違って見えた。それだけだ。
虹也の鋭い警告のような声に、墨時がその職業に相応しい素早い意識の切り替えを伴う体勢で振り向く。
だが、その半瞬程早く、先の体勢では死角にあった、一抱えもあるような緑の葉を茂らせた木が根こそぎ持ち上がり、意思があるかのように彼等に向かって横なぎに空中を旋回した。

バグッ！と、日常でついぞ聞いた事も無いような鈍い重い音が響き、生木の白と外皮の茶色が散乱した。
不自然な静寂が寸前の騒ぎを埋めるかのように訪れ、その重さが視界を開かせる。そこでようやく、風景は事の概要を暴き出した。
幹の半ばで折れた、先ほどまで大地に根を張っていた大きな木が、舗装されている地面を少し抉りさえしてそこに横たわっている。
「花ぐらいなら貰った事もあるんだけどな」
「自慢か？それは」
軽口を叩いて見せはしたが、虹也は自分の足が震えているのを自覚していた。
おそらく今歩けと言われても歩けはしないだろう。
「で、贈り主はあんた？」
墨時の視線の先には先程の平凡なサラリーマンがいた。
「おっさん、その人なんか違う、変だ」
虹也は自分の感じている違和感を上手く伝えられない事に苛立った。
しかし、墨時の方は物事を探り、判断するプロである。彼は正しく虹也の言葉の指す所を理解していた。
「まぁ慌てんなって、二重起動すっとたまにジャムるんでな。緊急事態でなきゃ切り替えた方が良いんだ」
言って、”もう一度”左手に触れる。
途端に自分達を囲んでいた何かが消滅したのを虹也は感じた。
「深査させてもらうよ」
墨時の口角がその自信を表すように吊り上がる。
相対する男は無言を貫き、微動だにせずにそこに在った。

捜査官は恨まれる

深査(しんさ)と、そう言って墨時が左手を差し延べると、対する相手の姿が一瞬のブレを生む。外野からの視点からすればただそれだけの事だった。しかし、

「おいおい、誇り高き蛇鱗一族が変装ごっこかい？」

それだけで墨時には相手の何かが、おそらく正体が知れたらしい。

嘲るような彼の言葉は、明らかな挑発の響きを帯びて聞こえた。

「シャッ！」

その挑発にあっさりと乗って、サラリーマン風に見えた男は、一声まるで動物の威嚇のような叫びを発すると、全身を激しく震わせる。

虹也の視線の先で、その男の周りに何かがボロボロと零れ落ち、同時にその姿が変貌した。

虹也にとっては唯一の人間種族特有の、手足を備えたデコボコとしたシルエットが、滑らかで出っ張りの無い別の形へと変化する。

「あ、蛇？」

古くからその姿に多くの者が恐れと憧れを抱いた証を示すように、沢山の時代、沢山の場所で幾つもの意匠の元として描かれて来た形。だからこそ、それは誰にも馴染み深い姿だった。

だが、あまりにも大きすぎた。

蛇に特に強い愛情など抱かない者からすれば、人間大、いや人間よりやや大きいぐらいのサイズの蛇など、悪夢の産物でしかない。

その蛇のような者は衣服らしき物は纏っていなかったが、その代わりとでも言うように、鱗にはとりどりの色彩が踊っていた。刺青のような感覚なのか、その鱗一枚一枚になにやら宝石のような物がデザイン的規則性を持って埋め込まれている。

「誇りは憎しみの前には陽の前の霞のような物！貴様に兄の無念を思い知らすまでは、もはや我にこだわるべきものなどない！」

（俺じゃなかったんだ）
その言葉に相手の狙いが自分で無いと知り、元よりこちらに因縁など無いのだから心配など必要ないはずの虹也は、それでもやはり強張っていた体から少しだけ力が抜けるのを感じた。
相手の姿の異様さにはさすがに何も思わない訳ではないが、幸いにも彼は蛇を見てパニックに陥るタイプの人間ではない。好きな訳でも無かったが、少なくとも見ただけで金縛りになったり、悲鳴を上げて逃げ出すような苦手さは無かった。
その人間サイズの大蛇は、やや耳障りな擦過音混ざりでありながらも、はっきりと言語を発している。
（って事はあれも異なる種族ってだけの人類種なんだよな、きっと。どんだけ幅広いんだ、この世界の人類種は、多様性とかいう問題じゃないだろ？）
魔術のような物が当たり前にある世界だからだろうか？魔気とやらが関係しているのかもしれない。と、虹也が考察を続けている間にも、当然ながら事態は動いていた。
「兄だ？もしかして巡樹（めいじゅ）の弟か？」
「そうだ」
蛇体を小刻みに揺らめかせ、襲撃相手は肯定する。
「はっ、なら俺を恨むのはお門違いだな、お前の兄貴の自業自得だ」
「貴様！」
蛇体の男は声高く叫び、それに伴って息漏れのような擦過音も甲高く響いた。
「兄は１０年の禁固刑に決まったのだ！我ら冬眠する種族にとってあれがどれ程残酷な刑か知らぬ訳ではあるまい。貴様が！貴様が執念深く兄を付け回したせいで、兄は！」
「お前の兄が殺した何人もの母子は、もはやあいつに文句さえ言えないだろうがな」
吐き捨てるように告げる墨時の声には苛立ちがある。
「あれはタダの餌だ、それを狩って咎められる理由などないわ！」

重ねられた言葉に、墨時の顔から表情が消え失せた。それと共に右の口角が急激に吊り上がる。
「なるほど、人ではなく理性のない化け物として扱って欲しかったって訳か、そりゃあ済まなかったな」
「貴様……」
折れ転がった、しかしまだ十分な質量を持っている木の幹が、メキリ、というなんとも不吉な音と共に宙に浮き上った。
「うはぁ、超能力戦かよ」
魔術よりは若干ながら馴染みのある言葉を口に乗せ、ほとんど傍観気分だった虹也だが、ふと、相手の意識が自分に向いたのを感じて嫌な予感を覚える。
「う？」
「その猿はどこぞの氏族だな。察するに護衛の任務という所か」
虹也には蛇の表情は読めないが、今、相手がニヤリと笑ったと断言出来る程には状況を理解出来た。
（ボケかっ！正々堂々と本人とやれや！）
「貴様に僅かでも悔しさを味あわせてやるわ！」
太い木の幹が又も横に回転を始める。
「おいおいおいおい！」
虹也は引き吊った顔でそれを眺めた。
モノが大きすぎて避けようもないのだ。
カバー出来るはずもないが、本能的に両腕で頭を庇う。
重さを推し量れるような瞬間的な風圧が一挙に押し寄せ、虹也は思わず目を閉じた。
ドン！というズシリとした衝撃。思った程に痛みが無いのは、いわゆる許容量を越えた痛みは感じないというやつだろうか？
そんな風に、ここに来て尚少々呑気なぐらいに考えていた彼は、聞こえて来た声に耳を傾けた。
「あのなぁ、内奥の捜査官をあんま舐めんな！」
「悪足掻きを！」

「悪足掻きはどっちだ？そもそもここをどこだと思ってんだ手前は？」
（墨時のおっさんが動揺してないって事は……）
ソロリと、虹也が目を開けて顔を上げると、目前に静止した状態で宙に止どまっている、彼の身長よりデカイ折れた木がある。
「おお、シュールな光景だ」
ルネ・マグリットの世界のようだと心の中で呟いた。
ふとその視界を影が横切る。
「治安本部とやらの前だな、だが貴様のお仲間は恐れて近付かないようだが？」
それはあからさまな嘲笑。
力持つ者が示す、自信ゆえの優位がそこにある。
「んな訳ねーだろ」
墨時の言葉に呼応するかのように、何かが蛇体の男に絡み付いた。
「う？あ？ぎ！」
まるで光で編まれた投網のようなそれは、男の通常よりしなやかな体の自由を、更には口を開く自由すら奪って行く。
「良い度胸だな、治安を預かる我等が玄関先で暴力沙汰かい？よっぽどお仕置されたかったんだろうね」
クスリと、舌なめずりでもしそうな表情で笑うのは、おそらく細身の女性だ。
なぜ恐らくかと言うと、その体付きがあまりにもスレンダーだったからである。そのせいで性別を断言出来る程の自信が持てなかったのだ。
彼女　（たぶん）は、くっきりとした存在感でその場をたちまち支配してしまっている。
その顔は美人と言い切るには少し躊うような個性的な容貌で、しかし一方でそこに間違いなく他人を引き寄せる美の力を秘めていた。
小振りの顔の中に並んだパーツは全てが大ぶりで濃ゆい。確実に日本人とは違う、どちらかというと中東的な容貌だ。

少しでも配置がずれていたらむしろ醜いと評されていただろうその顔が、獲物を嬲る肉食の獣のような笑みを浮かべて、足下でもがく蛇男を眺めていた。
「いいね～久々に本物の愚か者を見たよ。こうやって馬鹿が足掻く様は最高だね」
網に絡まれたその姿がいっそう激しく動いたのはその言葉が聞こえたからだろう。
だが、その動きは急速に衰えた。
「ははっ！そいつは暴れれば暴れる程締め付けるように出来てるんだよ。どうだい？苦しいだろ？」
恐ろしく耳に心地良いアルトの声がなぶるような言葉を発し、毒を垂れ流す。
「さて」
その視線が移動する。
黒っぽい口紅の塗られた唇を赤い舌がなぞった。
その視線に晒された当の墨時はやや及び腰に目を逸らす。
「お前は言い訳はあるかい？とりあえず聞く気は無いけどね」
（無いんだ）
虹也は胸中で呟き、哀れな男の為にちょっとだけ祈った。
「まぁその話は足下のその男を収監してからで良いだろ？通行の皆さんも気になってるようだし」
見れば確かに周囲には遠巻きに人が集まり出している。
話の流れからいくと、この場所は彼の世界の警察本部に当たるようだし、確かに色々と不味いんだろう。そう、きっと言い訳じゃなく。
虹也はそう好意的に解釈する事にした。
「ふ～ん」
女性（虹也の中では確定した）も本人なりの思惑でとりあえずの保留に同意した様子だった。
墨時は恐る恐るという感じに、その女性の足下にいる、もはや痙

攣のような動きしかなくなった塊りに近付き、掴み上げた。（ちなみに恐れていたのは当然この蛇男ではないだろう）
「則のある世界に生きている以上それを犯せば報いがあるのは当然だ。しかもお前の兄はまた生きて戻れるんだぞ、どんな状態であろうともな。その一方で、惨く殺された母子は永遠に家族の元に帰れないんだ。文句を言いたいのは手前じゃねぇだろうよ」
吐き捨てるように言って、そのまま片手で引き摺りながら歩き出す。
（どんな力だよ）
軽々としたその動作に虹也は呆れた。
「ほら、コウ！来ねえと置いてくぞ！」
「え！あ、おっさん、俺の保護者じゃねえのかよ」
虹也が動くと同時に、浮いていた倒木が落ちる。
地響きに、虹也と、そして物見高い見物人が同時にびくりと体を引いた。
目を丸くしている所を見ると、どうやら見物している一般の人々にとっても、その光景は普通に目にするものでは無かったようである。
虹也が行き先に再び顔向けて見ると、返事として投げた声に振り向いていたのは、当の墨時ではなく、件のおっかない女性だった。
あの見ていて落ち着かない顔でニィッと笑ってくる。
当然ながら虹也は慄いた。
「なにか、な？」
無言では怖いままなのでとりあえず聞いてみる。
「随分なついてるじゃない？坊や」
もうすぐ成人の男に向かって坊やとか失礼な人達だとは思うが、だからといってこの相手に墨時に返したようにおばさんと返す程、虹也は自分の矜持に命を捧げてはいなかった。
「他に頼る相手もいないし、心細かったから、つい」
相手が自分を良家の子息みたいに思っているのならそれらしくす

れば摩擦も起らないだろう。
虹也はそう思い、まるで下々の事を知らない天上人のように心細気に目を伏せてみせた。
相手のニヤニヤ笑いは一層深くなったが、何も言っては来ない。
（怖い）
ホラー映画や小説で感じるより何倍もの冷え冷えとした恐怖を味わいながら、虹也は大人しく彼等の後に続いて歴史のあるらしい治安本部の建物に入ったのだった。

おんぼろと言ってはいけない建物

例によって例の如く、その建物の入口も半円を描く凸面を外に向けた造りだった。

どの建物も基本的に角が削ってあるし、考えるまでもなく、そこになんらかの意味があるのだろうと思わせる。

虹也にしてみればこういう細かい違いには注目せざるを得なかった。

似ている文明で馴染んで来たからこそ、違う部分に目が行ってしまうし、そこにこそ、その文明の個性といえる物があると思えるからだ。

彼の思惑はともあれ、木造のその建物は第一歩を踏み込んだ時点でその個性を発揮した。

ギィイー…、と、まるで生木を刃のない鋸で挽くかのような、何か酷く特徴的な音を響かせたのである。

「うぐいす張りかよ！」

思わず人ならぬ建物に突っ込んでしまった虹也ではある。

「なんだ？何を一人で騒いでるんだ」

「これ、床は抜けねぇの？」

虹也がそう口に出した途端、空気が凍った。

目前の二人と、点在する職員らしき人達が押し黙って一人の人間を凝視する様はかなり異様な光景だ。

「え～と、何……ですか？」

耐え切れず虹也は音を上げた。

「ん～そうだな、言ってみれば、保身の為の沈黙？」

応えたのは犯人を拘束中の墨時ではなく、それにプレッシャーを掛けながら同行している例の女性である。

「良かったら詳しくお願いします」

虹也はなんとなく、この相手に対する時は自分から引いては駄目

だという予感があった。なので堂々と問い質す。それと同時に、周辺の見物人のざわめきが混ざり合って意図しないどよめきとなった。
（見せ物か、俺は）
なんとなくむかつきながら、虹也は相手の返答を待った。
「なに、簡単な話だ。この建物をこよなく愛している人物が色々な力関係の上部に居るって事さね」
何かしゃべり方が一々挑戦的だが、確実に面白がっているのは分かる。
「はあ、なるほど」
あまり相手の期待に応えるのも腹が立つので、虹也はその情報を軽く流して終わらせた。
「余裕だね」
「そういう訳じゃ無いですが」
「無いですが？」
どうやらこのお姉さんは見掛け通りしつこい性格だったらしい。
「いい加減にしろやお前等」
犯人入りの網を引き摺りながら、先頭を歩いていた男がたまりかねたのか二人の会話に割り込んだ。
「ほう、ではそっちとの話をここで進めて良いのかな？」
ニヤリと赤黒い口元が歪む。
「あー、こいつを引き渡して来るからそいつを課に案内頼む」
（さすがに判断が早いな）
墨時の離脱の素早さに、ちょっとだけ感心した虹也だった。
「その偉い人に怒られるから建物を悪く言うと駄目なんですか？でもいくらなんでも危ない箇所は修理した方が良いと思うんですが」
自棄というか、蛮勇というか、唐突な衝動に動かされて、虹也は危険そうな話題を進めてしまう。
「ほう、坊やなかなか勇気を見せるじゃないか、いいよ、好きに提案すると良いんじゃないか？」
「え？ちょっと待ってください。俺は部外者ですよ！」

ふ、と、冷ややかな濃い紫の目が彼の目を覗き込む。
「自ら斬り込んでおいて逃げるというのかい？」
ぞくりとする声だ。だがそれは魅惑ではなく危険を孕むものである。
正直虹也とて、その偉い人とやらに興味が無い訳ではない。だが、だからと言って脅されて自分の安全をチップにしてテーブルに並べる等というのは、無謀という以前に彼の矜持に関わる話だった。
「逃げるのかい？」
空気が冷えて濃い紫の彼女の目にほの暗い揺らぎが見える。
「……いえ、滅相もないです」
「滅相？」
「あ～逃げるのは性に合わないっていう事ですよ。提案させてイタダキマス」
そのまなざしの前に、彼の矜持は崩れ落ちた。
まあ矜持の高さも命が無事ならではだよな。と自らに言い訳をする虹也ではある。
いくつかのオープンな事務所のような場所と木製の扉に隔たれた部屋を抜けて、広い階段が現われる。
そこまでの移動で、虹也は気付いた事があった。おそらくこの建物が昨夜のゲートとやらの到着先のはずなのだが、今のところ昨夜見たような廊下に遭遇していないのだ。
虹也は軽く頭の中で見取り図を描いてみた。
廊下の位置と方向、部屋の間取り、全体を組み合わせてみると歪な形になって収まりが悪い。壁の仕切りの向こうに別の空間があるのは間違いなさそうだった。
裏口からの通路はそっちだろうと虹也は当たりを付ける。
「上だ」
とんでもなく簡潔な指示に従って進みながら、虹也は汗がじわりと滲み出すのを感じていた。正面に立ち、背を向けて自分を誘導する相手は自分を守護する立場だと分かっていながらも、なぜかその

一歩一歩に不安があるのだ。もし地獄の案内人というモノがいるとしたら、きっとこういう存在なのだろうと思えてしまう。
「私が怖いか？」
「え？はい！」
思わず反射的に正直に答えてしまい、虹也は誤魔化すように咳き込んだ。
「ふふ、それは良い。見所があるよ坊や。自分の中の恐怖を認めてしまえばそれはもう認識された事実でしかないからね。更に先に進む障害足り得なくなる」
意味深な言葉が怖い。
「えっと、どこへ進む為のですか？」
「私は半分吸血族なのさ、だからその恐怖は本能として正しいって事。相互理解するにはそこをまず越えなければどうにもならないからね」
淡々とした彼女の言葉は、あまりにも虹也の常識から剥離していた。なので彼の反応は鈍く成らざるを得ない。
「すいません、俺はそういうの分からないんで」
「そりゃあまた豪胆だな」
彼女は思わずといった風に噴き出し、そう言った。
「いや、だから、知っていて言った言葉なら豪胆ってのは嬉しい褒め言葉なんだけど、本当に分からないから少し悔しいですね」
もちろん彼とて自分が元々在った場所での物語としての吸血鬼は知っている。というか、むしろそれしか知らない。
どう考えても世界の違うこの場所でその常識を元に判断は下せない。
それはごく当たり前の感覚だと彼は思う。
「なるほど、胡散臭い話だと思ってたが、意識の改竄ってのも事実なのかもね」
その言葉に虹也は唸った。
彼女も墨時の同僚ならその件は承知だろう。当然だ。

だが、彼には彼の主張があり、それを認める訳にはいかないのだ。本格的に否定しておかないとのっぴきならない事態に嵌まりそうで虹也は焦る。

「俺は頭の中を書換えられたりしてないです」

はっきりと告げた虹也の、正当と信じる主張は、しかし軽く鼻で笑って流された。

「お前は愚かだな。意識を改竄された者が自らの記憶が間違っていると思うとでも？」

彼女の言い分は確かに正しい。狂っている者は自らを狂人とは主張しないだろう。

だからといって虹也は自らの記憶を疑う訳にはいかない。

それは何よりも大事な物だからだ。

（結局は堂々巡りか）

だが、諦めて流されていてはお話にならない。諦める気が無いのなら退く訳にはいかない。何よりも自分自身だけは揺ぎ無く信じていなければ他に縋る物は無い。

友人や両親、沢山の彼を育てた暖かいもの。そして、痛みや苦しみもまた、失ってはならないものには変わりない。

言葉の無いままに先へと進み、二階に上がってすぐの通路は先程虹也が推測した裏口があるであろう方向に進路を向けている。

此所まで見て来て、殆どの構造が曲面と円で構成されている事が彼に全体の把握を難しくさせていた。

実際彼が今歩いている通路も少しずつ内側に湾曲している。

虹也は学生時代冒険クラブなるサークルを設立して主に足で調べて地図を作る活動をしていたのだが、曲線で構成された道はマッピングし難い為いつも苦労させられたものだった。

敷地の利用としても直線で構成されたものより無駄を出す事になりそうなものだが、恐らくはそれらのマイナス面を差し引いても利する何かがこの構造にはあるという事なのだろう。

単に伝統である可能性も否定出来ないが。

「到着」
ニィと、またあの不安な笑顔で簡潔に囁かれて、虹也は突然ある事に思い至って扉に手を掛けた彼女を呼び止めた。
「あの、そういえばごたごたですっかり後回しにしてましたけど」
「うん？」
「お名前をまだ伺っていませんでした。えっと、まずは俺が自己紹介しますね。俺は虹也、美郷虹也と言います」
一瞬きょとんとした顔をした女性が笑みを再び口元に乗せた。
「彩花、綾瀬彩花（あやせさいか）だ」
彼女は、珍しい生き物でも見るかのような視線を虹也に向けながらそう名乗った。

捜査部の一番偉い人

ガチャリというレバーが下ろされる音と共に、バキッという不安な音が響き、軋むように扉が開く。
どこからどう見ても壊れる一歩手前にしか見えない。
「じゃかあしいわ！」
開いたドアの向こうから、怒鳴り声と、むわっとした、色々と入り混じりなにやら分からないが臭い事だけは分かるという匂いを纏った空気が彼等を迎えた。
「暫定被害者の身柄を抑えました」
彩花が室内の喧騒に対してあまりにもボリューム不足な声でぼそりと告げる。まるで聞き逃されるのを期待しているような声だ。
しかし、虹也のそんな感想とは裏腹に、彼女の声にさながら他人を振り向かせる物理的効果でもあったかのように、室内は俄かに静まった。
一つ離れた大きな机（他の机の3倍はあった。大きいにも程がある）の、彼等の位置からは判別不明な処理をされているらしきホログラム映像が浮かんでいるそこに座っている相手がこの場の責任者なのだろうが、今はその何かのホロ映像に向かって怒鳴り付けている真っ最中のようだった。
彼が先程の声の主に間違ないだろう。
「別に人員をこちらに割けと言ってる訳じゃないんだぞ！分かってるのか！？人出不足なのに派遣依頼が多すぎると言ってるんだ！」
虹也の側から見ると何か黒い棒のような物が浮いてるようにしか見えないが、恐らくモニターのような物があるのだろう。テレビ電話かパソコンのモニターのようなものなんだろうと虹也は想像した。
「部長、暫定被害者に同行願いました」
一通り話しが一段落したと判断したのか、彩花がその相手に前回と少しニュアンスを変えて声を掛けた。内容は同じなので別に意味

があって変えた訳ではないんだろうなと虹也はなんとなく思ったりする。
（部長さんなんだ）
その馴染みのある響きになぜか癒されながら、虹也は他人に語られる自分の立場を確認しておこうと彼等の会話に耳を傾けた。
課長と呼ばれた男が振り向き、机上にあったホロモニターのような物が姿を消し、彼の顔がまともに見えると、虹也はギョッとしてしまう。
肥えるという表現がかわいらしく思える程に”はみ出した”人間がそこに在った。
人間離れしたという言葉があるが、正にそれだ。
一方でその姿に何か懐かしさも感じてもいた。何か、記憶に引っ掛かるのだ。
「あ、そうか」
虹也は思わず声に出してしまい、集まった注目を咳払いで誤魔化す。
（あれだ、スターウォーズのジャバザハット）
目前の人物への既視感の根源に思い至って、虹也は一人頷いた。
しかし映画のクリーチャーと違うのは、彼の頭部にはきちんと撫で付けられた頭髪があり、だらしない部分の見当たらない、背広に似た服装をしている事と、穏やかで理知的なその表情だった。
その顔付きを見ていると、とても先程の怒鳴り声がこの人物のものとは思えない。
彼は彩花と虹也に順に視線を送ると、もう一度彩花を見て小さく頷いてみせた。
「それでは、報告いたします。本日０９：２２時、山中捜査官に伴われて本官庁舎を訪れた大地の民と思しき男性を保護。昨夜南海平野西の里、緑野区番所より緊急案件として報告のあった意識操作を疑われる被害者と思われます。詳しくは山中捜査官に確認願います。本官の報告は以上であります」

ぴしりと直立した彩花の報告は流石に整然としていた。が、
「何も分からんという事だな」
部長の評価はにべもなかった。
「まぁ纏めるとそうなるかもしれませんね」
「それで、肝心の馬鹿者はどうした？」
「馬鹿は下で起きた騒ぎの後始末です」
馬鹿が代名詞になってるぞ。と、虹也は初めて自分の仮の保護者を哀れに思った。
「そっちの報告もあいつ待ちか」
「はい」
イエッサとでも言いそうなぴしりとした返答がなにやら空しい。
「それでは」
捜査官達の長はゆったりとした動作で虹也に向き直った。
「先に当事者の状態確認をすべきだろうな」
意外とがっちりとした腕を組み、虹也を見る眼光は強い。
ただ、虹也が容疑者という訳ではないせいか、そこに威圧感は無かった。
「まずは自己紹介から良いかな？私はここの部門長をしている東山豊という者だ。君は？」
相手の外見に比べてあまりにも名前が平凡だった為、虹也は少し拍子抜けしたが、慌てて気持ちを切り替える。
「美郷虹也です。よろしくお願いします」
きっぱりと、澱み無く虹也はそう名乗った。
「ふむ」
部門長と自分を紹介した東山は、何を考えているか伺わせない顔付きで自らの顎を撫でる。するとタプンという、重なった肉がぶつかって立てる音がした。
「それで、美郷くんはこの庁舎のたたずまいについてどう思うかね？」
「えっ！？」

いきなりの問いに、虹也は思わず周囲を伺った。誰もがさり気なく目を逸らしつつ聞き耳を立てているようだ。
（ちょ、）
先ほどの彩華の話を思い出す。まさかとは思うが、下手な事言ったら何かよからぬ事が起きるのだろうか？と、虹也は慄いた。
しかし、何をどう懸念した所で、思った事をそのまま口にする以外の選択肢は無い。咄嗟に良い知恵は浮かばないし、そもそもどういう方向に褒めれば良いのかさえ分からないのだ。
「そ、そうですね。古い……じゃなかった。風格のある建物ですね」
とはいえ、思い切り日和見た表現にはなった。
「なるほど、それだけかね？」
そんな突っ込みは勘弁してくれよと内心思ったが、仕方ない。虹也は言葉を継いだ。
「ただ、老朽化が進んでるみたいですし少し手を入れた方が良いと思います」
途端に、穏やかだった部長さんの顔に亀裂が入った。といっても別に実際にひび割れた訳ではなく、顔をしかめた為、肉によって作られたシワが思いっきり浮かび上がったに過ぎない。
そっかマジだったんだな、建物の悪い評価は逆鱗なのね。と、虹也は少し遠い目になったが、ぼんやり考えている場合ではない。慌てて言葉を更に重ねた。
「建物もまた生きているとうちの母なんかは言っていました。手を入れない建物は痛みますし、年を重ねれば修理も必要でしょう。そうやってやっと長い年月を耐える事が出来るものだと」
「う〜む」
部長さんは何かに迷ったように目線を泳がせると、俺に対する評価ははひとまず置く事にしたようだった。
「古い物が尊いのは、それを守る為に力を尽くした人の気持ちがそこにあるからだとうちの父などは言ってました。古さというのはただ年月が経っただけというものでは無いと。俺もそう思います。正

しく手入れをしてこそ古さには価値があるのではないでしょうか？」
何か俺必死じゃね？と、虹也は自分の声をどこかの他人の物のように評価した。基本のんびりしている性格の虹也なので、こういう焦りにはあまり慣れていないのだ。だが、
「なるほど。彼の言動は理論整然としていて思考にブレが無いように思えるな。どうも意識操作をされたようには見えないが」
「そうですね、思考に異常がある場合、かならず会話のどこかに綻びが出る。この坊やにはそれが見えない気がしますね」
東山と彩華の会話に、虹也はさっと緊張した。
あんな馬鹿馬鹿しいと思った会話で、自分は試されていたのだと気付いて、ちょっとばかり本当に思考が混乱してしまう。
（何が本当で何が嘘なんだ？って、よく考えたら俺って被害者側とはされているけど不審者なんだよな、本質は）
彼の籍はここにはない。
この国がある程度管理されている社会なのは間違いなさそうだし、もし自分の記憶に異常が無いと判断されて、それならば誰なのか？と調べられたら確実にそれが知れるはずだった。
（ええっと、もし発覚したら何の罪になるんだ？身分詐称？密入国？）
なんだか冷たい汗が額から頬に伝うのを虹也は感じたのだった。

この職場が忙しいとはとても思えないと虹也は考えていた

「精密な記憶の書換えが不可能とは申しませんが、掛かる手間を考えますと割りが合うとは思えませんね」

唐突に新しい声が場に加わる。

エプロン？割烹着？その人のいでたちは虹也から見るとそんな感じだった。

給食のおばさんの格好をしたおじさんという感じだが、いくらなんでもそれはあるまい。虹也は改めてしげしげと相手を見た。

広い額と細い目、顔立ちは今迄出会ったこちらの人の中では一番日本人らしいかもしれない。

着ている服装を白衣に変えれば化学の先生にイメージが被った。

ふふふと、その相手は笑ってみせる。

「観察はお済みかな？良ければ今度はこちらが検査をさせていただきたいのだが」

ジロジロと見てしまった虹也はすみませんと軽く謝った。相手は気にしていない風で手でそれを制してにこにこと笑っている。

検査という事はやはり医者とかだろうかと虹也は思い、どうするか図るように部長の顔を見た。

部長は、少し考えると首を横に振る。

「いや、まずは山中の報告を待とう。急いて事を進めると誤認が起り易いからな」

見掛けと嗜好はなにかコメントし辛い人だが、流石は捜査官達のトップではある。虹也は感心すると共に、自分の立場を再考してみた。

単純な話、大別すると、犯罪者扱いか悪くすると狂人扱い覚悟で真実を主張し続けるか、流れに任せて相手が作り上げる設定を利用するかの二択である。

（まぁ、最初から迷っちゃいないんだけどね）

切り捨ててしまっては自分で無くなる物が確かにそこにあるのだから他に選択があるはずもない。
虹也は軽く笑って肩を竦めた。
そこに、ガタン！キシッ！という音が響き、ドアが一瞬のたわみの後に開かれた。
この分ではここのドアの寿命は近いに違いない。
「はよざいます！お？コウ、なにまだつっ立ってんだ？検査終わったか？」
場の空気なぞ全く読まない男が一人入って来た。
「ばっかもん！！どっかのだれかの報告待ちだ！」
おお、怒鳴った。やっぱ怒鳴ると迫力あるなと感心しながら、虹也は、怒鳴られている相手、自身の保護者となっている男を見た。
墨時は軽く首を傾げている。
いわゆる小首を傾げるという伝統的なポーズだが、良い年の男がやっても何の感慨も呼び起こさない。むしろ相手に苛立ちを与えるだけである。
「報告と言っても被害者の主張は一貫してますし、それ以上の事は……あ、精神剥離状態に成り掛けて施術師に術式布を施して貰ってるんで気を付けてくださいね」
（スゲェよおっさん！この高まる無言のプレッシャーを意にも介さずに飄々としてるなんて、俺は今、猛烈に感動している）
虹也は有り体に言うと呆れていた。
「部長、前々から提案していましたが、この馬鹿の外苑部送り、本格的に検討すべきかと」
「は？何言ってやがる、あんな暴力的な所で俺みたいな繊細な男がやってける訳が無いだろ？てめぇが行けよ凶手野郎」
「あ？それが深夜に連絡を待ち続けた相方への謝罪かい？明日辺り血の気の無い死体が発見されそうだね」
「なんだ？それは犯罪予告か？内鑑に行っとくか？ああ？」
「やめんか馬鹿者ども！」

ドゴン！と、先程の大木が地面をえぐった時のような音が響き、虹也の目前で罵り合っていた二人が床に沈んだ。
何が起ったのかよく分からなかったが、誰も驚いていない所をみるとここではごく普通の光景なのだろう。
「お前達は治安を守る立場という事を理解しているのか？理解してないだろう？単に暴れたいだけなら海外派遣で紛争地域に送ってやろうか？」
「いや、あんな所で俺みたいな一般人は役に立ちませんよ。こいつなら喜ばれるんじゃないですか？」
「いやいや、外苑には結界操作に長けた者が少ないらしいじゃないか、あちらさんは諸手を上げて歓迎してくれるさ」
終わらない戦いの物語、ネバーエンディングストーリーだっけ？ワンコみたいなドラゴンが出るよと友人に引っ張られて観たＤＶＤは、寝てて内容覚えて無いんだよなぁ。などと虹也がどこかにトリップし掛けるぐらい、二人の罵り合いはなかなか終わらなかった。
途中から部長さんやまだ紹介し合って無い人達とアイコンタクトで挨拶を交わせたぐらいである。
『いつもこうなんですか？』
『ああ、いつもこうなんだ』
『大変ですね』
『そう言ってくれるのは君ぐらいだよ、どうだ、今度一緒に酒でも呑まないか？』
『残念ですが、まだ未成年なんで来年おねがいします』
『そうか、残念だな、それなら食事会でもやるか』
『良いですね』
と、こんな感じだ。
ちなみに内容には１００％虹也の脚色が入っている。
そんな事をやっている間にようやく二人の争いは終盤に入ったようだった。どうやら案件を抱えていながら連絡も入れずに直帰した虹也の保護者殿の敗色が濃い。

どう考えても自業自得だった。
「それほど帰りたい我が家の割にいっこうに婚姻の話を聞きませんね」
トドメとばかりに彩花の放った言葉は確実に墨時の精神にダメージを与えたようだ。
（もっと言ってやれ！）
銀穂贔屓の虹也は当然のように彩花にエールを贈る。
「お前みたいな人非人に言われる筋合いはない！」
「へえ、何？それ？種族差別？お前こそ内鑑の世話になれば？」
（あ、やばい、二人共マジ切れモードっぽい）
猛獣の争いに首を突っ込む愚を冒して止めるべきか？
虹也がこんな事で死の淵を覗く覚悟を固めるのはいやだなぁと思いながらも声を掛けようとした時。
「お前達、覚悟は出来ているんだろうな？」
低く渋い声が空気を震わせた。
（ジャバザじゃなかった部長様！？）
目をすがめたその姿は正に悪の親玉。暗雲を纏った背景が実際に見えそうで、自然と体に震えが走った。
（さすがアンダーグラウンドの覇者！格が違うぜ）
虹也は混乱していた。
「お前達には不備のあった報告書の再提出を心行く迄堪能させてやるからそのつもりでな」
「ええっ！」「ちょっと一度終わったものを掘り返すとか墓暴きの所行ではありませんか？」
激しい抗議だ。しかし書類の再提出程度になんか激し過ぎる抗議のような気がしないでもない。報告書というのはそんなに恐ろしいものなのだろうか？
部長はコホンと咳払いをすると、場を仕切りなおした。
「流れを整理してみよう。まず、この美郷さんが南海平野西の里、緑野区の禁足地にて１５日昨夜２３時頃発見保護された。この時点

で護符等の守護具を所持しておらず現場判断で避難保護扱いだった」
なるほどと、虹也は一連の経過を自分なりに整理してみた。
最初は分からない事だらけで混乱が先に立っていたが職質というより保護の意味合いが強かったのだ。
夜間に身を守る物を持たずにうろつくのは危険らしい。しかもどうやら虹也がいたのは禁足地と呼ばれる危険な場所だったとの事。
あの警官は下手すると命の恩人だったという事だ。
お礼をいつかは必ず言わないとと、改めて思う。
「そして事情を聴取してみると内容に混乱が見られ、意識操作を疑われ本部へと通報。外見から氏族出身者とも窺われるので慎重を期す為に捜査部に回され、たまたま出張帰投中だった山中捜査官に保護任務として命が下った。此所までは間違い無いかな？」
「はい、間違ないです」
墨時のピシッとした受け答えが周囲に違和感を振り撒いていたが、そこにあえて突っ込みを入れる命知らずはいない。
「正式に他方から報告が上がっているのはここまでだ。その後の経過報告を聞こうか？山中捜査官」
「はい」
別人のようにキレの良い返事を空しく響かせ、墨時は報告をした。
「到着直前に追加指示があり、被害者は病院に運ばれたとの事で行き先を変更、追時送記での説明によるととりあえず休ませようと保護室に案内したところ洗い場で倒れていたとの事でした。」
「待て」
「はい」
「倒れた時の状況は本人に確認したのか？」
「いえ、えーと」
墨時はちらりと虹也を見る。
「あ、俺は席をはずしましょうか？」
何か本人には言い辛い内容らしいと察して、虹也は提案した。
正直、虹也も自分に起きた事を知りたくはあったが、ここは病院

ではなく警察のような場所だ。捜査上の守秘義務のようなものもあるだろう。
そう考えての提案だった。
「あ、いや、席まで外さなくて良い。山中捜査官、通信で概要を頼む。限定範囲だ」
「了解」
墨時は左手の甲を軽くなぞる。
例の術紋を起動しているのだ。
見ればその場にいる全員が同じように起動していた。
さすがに虹也は疎外感を強く感じたが、こればっかりは仕方がない。
手持ち無沙汰な気持ちのまま、墨時が立ち上がった画面らしきものに指を走らせるのを眺めた。
（打ち込みしてないよな？どうやって書いてるんだろ？スライドとも違うようだし）
プライベートフィルタのような仕組みはかなり優秀らしく画面が全く窺えない。
ただ、その様子は一斉に時計合わせをする、映画で良く見る場面のようでもあり、虹也からすると、何かこう、現実感から遠かった。
全員が腕の所を覗き込んでうんうん頷いている光景はなかなかシュールで面白かったが、その確認作業は直ぐに終わり、画面が閉じられる。
「状況は分かった。念の為術式布はそのままにしておいた方が良いだろう。さて、」
部長は虹也に改めて向き直った。
「待たせてすまなかったね。それでは美郷虹也さん、君の話を聞こう」
虹也は一つ頷くと、自分の記憶に違和感が無い事、ここと違う場所から来た事、なぜそうなったのかさっぱり分からないという事をはっきりと説明したのだった。

真実の足音

「ふむ」
虹也の話を聞き終えた部長は簡潔な言葉で一区切りを付けると、改めて彼の顔を真直ぐに見た。
「なるほど君の主張は分かった。他の世界ね……」
虹也が当初心配したように馬鹿げた事と笑い飛ばされる事態にはならなかったが、それはそれで不安が残る。
「信じて貰えたんでしょうか？」
「ふむ」と、もう一度応えて、部長は言葉を継いだ。
「確かに君の主張は内容を除けば破綻がなく、客観的かつ冷静に説明されている。突発的な異変に巻き込まれた者としては落ち着き過ぎているぐらいだ。いや」
相手の言葉に、疑われたと考えた虹也が口を開くより早く、部長はそれを制した。
「それを根拠に疑っている訳ではない。ただ、その話には解決しなければ内容が成立しない疑問点が二点ある」
「良かったら教えて貰えますか？」
自分の今の状態に重要な手掛かりになるかもしれない事柄に、虹也は身を乗り出した。
「一つは異界から飛ばされたのではないかという仮定だ」
やはりと頷く。
「信じ難いですよね」
「いや」
その返しに虹也は思わず目を見開いた。
「異界の存在事態は歴史的にも宇宙物理力学的にも証明されている。下界、シャバ、色々な呼び名があるが過去には二つの世界が繋がっていた事は分かっている」
「過去には？」

「そう、過去には、だ。現在は二つの世界は切り離され、決して行き来は出来ない。もしそれが可能になったとしたら世界を揺るがす大事件になる」
「でも、可能性は０ではないんですね」
「そうだが。私個人としてはそうあって欲しくない」
「なぜです？」
「不幸だからだ。特に異界にとってのな」
その言葉に虹也は息を呑んだ。
（あちらにとっての不幸？）
虹也はその言葉に、自分の知る限りの情報を元に二つの世界を比べてみた。
科学技術は同等、もしくはこちらの方が進んでるいるような感じすらある。それにあの異能。
二つの世界が交わって、それが友好的に始まらなかったら？
いや例え国同士が友好的に交わったとしても、僅かな犯罪者が入り込んだだけでもどれだけあちらの世界に被害が出るだろう？あの蛇人間のような男が悪意を持って一人訪れただけでもどれ程の事が起こるか想像も出来ない。
確か異能には魔気とかいう物質が必要らしいから、あちらの世界では発現しない可能性もあるが、仮定だけでは到底安心出来るものでは無いだろう。
そこまで考えて虹也は気付いた。
昔は繋がっていたのなら既に過去に何かがあったはずだ。
「異界と繋がっていたのはいつ頃までなんですか？」
「んーむ、確か数年前に月夜見様の生誕１２００年祭があったはずだから１２００年経たないぐらいか」
「月夜見様？」
虹也はふと引っ掛かりを感じて言葉をなぞった。その響きに覚えがあったのだ。
『つくよみのひめのご加護のあらん事を』

場面が唐突に眼前で再生される。虹也は込み上げる名指し難い感情に、ふらりと膝を折り掛けた。
「コウ！」
倒れ掛けたのだろう。鋭い声と共に、強い力を持った手が乱暴に肩を掴んだ感触に我に返る。
「あ、」
目前にあるのは捜査部の光景だ。柔らかな天井パネルの明かりの元、捜査官の面々がこちらを心配そうに見ていた。
そう、炎の照り返しに赤く染まった姉の顔ではない。
「オイオイ大丈夫か？」
墨時が彼の顔色を確かめるように覗き込んだ。
虹也は慌てて混乱した思考を立て直す。
これまで他の事にかまける事で無意識に避けて来たが、この突発的に襲ってくる記憶に潜んだ傷は早めになんとかしなければならない問題だ。自分が元々はこちらにいたのではないか？という、認めるのを避けている疑惑をきちんと埋めるには、この心理的忌避感は邪魔になるに違いない。
「これは配慮が足りなかったな。先日倒れたばかりの相手に立ち話をさせるとは。とりあえず先に検査をしておこう。結果次第では安静にすべき所なのかもしれないのだろうし」
部長は虹也に謝意を表するように目礼をすると、正面やや左に先刻から立っていた一見、割烹着の化学教師のような男に頷いてみせた。
「そうですね。術中にあるなら条件付け次第では特定の言葉さえ凶器に成りかねません。迅速な検査が必要でしょう」
彼の言葉に部長は顔をしかめる。
「そういう事は早めに助言してくれると助かる」
「それは失礼。当然分かった上での審問かと思っていましたので」
割烹着の男は平然とそう言って憚らなかった。
（審問って、俺は何時の間にか何かの犯人扱いになってた？）

虹也はそこが気になった。だが犯人扱いにしては丁寧な感じだし、この割烹着の人の独自の考えかもしれないとも思う。
「いつも言っているが、我々はそちらの方面は専門家ではない。とにかく思った事は忌憚無く進言してくれ。貴官はその為にここにいるのだと思うのだが」
「なるほど、では次回から気を付けます」
「なぜかな、毎回このようなやり取りをしている気がするぞ」
「お疲れなのでは？」
これはツッコミ待ちのコントなのか？と虹也はいぶかしんだが、部長は真剣な顔で溜め息を吐いている。茶化すような雰囲気では無かった。
虹也はさすがにちょっと部長に同情した。
「失礼した。改めて紹介しよう、これはうちの所属の施術師で内藤（ないと）催事（うさいじ）という男だ。少々癖があるが、患者には良い医者だから安心してくれ」
本当に安心して良いのか？という疑問を虹也の内に芽生えさせた先ほどのやり取りがその説明に不安を感じさせるが、とりあえず内藤医師は、他意の無い表情で頭を下げてよろしくと挨拶をしてみせる。
施術師という聞き慣れない言葉は気になるが、医者というのならやはり医者なのだろう。こういう微妙に違う常識についてはなんとかズレを修正して行きたい所だが、今はここでの話の決着を付けるのが先だろうと虹也は思った。
「それじゃあ簡易的なもので悪いがこちらへ来て貰えるかな？」
まだ先程の異界についての話の続きが気になっていた虹也だが、ここで敢えて逆らうのも何か怖いので、そのまま内藤医師に従う。
見ると部屋の奥の方には応接セットのような物が有り、ダブルベットぐらいのサイズはありそうな半円の長椅子がデンと鎮座していた。
内藤医師はそこに彼を招いているようである。そこで診察をする

のだろう。
虹也は恐る恐るそれに近付いた。
そのベンチだかカウチだか分からない代物は大きさこそ大きいものの高級感は無い。
木製らしき枠組みに木綿っぽい黒の布張りで、枕のような細長いクッションが背もたれ部分の立ち上がりに沿うように置いてあり、快適さを演出しようとして失敗している感がありありと見えた。
どう見ても腰を下ろす部分は絶対に堅いはずだ。
しかしむしろだからこそ、虹也はいっそ気楽にそれに腰掛けられた。
座った虹也の眼前にあった思い切りミスマッチな金属フレームの楕円のテーブルは、どうやら稼働式だったらしく内藤医師が押し退けると軽く横にスライド移動して、そのままその場所に彼が屈むように体を置いた。
「とりあえずまずはこの術式布を取るから、気が遠くなったりする感覚があったら直ぐに言うんだよ」
その言い方はなんとなく学校の保健室の先生ぽいなと虹也は思った。
残念ながら優しげな女性ではなく飄々とした壮年男性だが、確かに先ほどと違い、彼は診る相手には丁寧に接しているようである。
「あ、はい」
あの意識を無くした時に何が起ったのかは虹也自身にもはっきりしない部分なので、この相手を頼りにするしかない。
手首に巻かれたミサンガのような術式布なる物を手首ごと相手に差し出した。
内藤は、中指になにやら携帯などのデコレーションに使うラインストーンのようなものをちょんと装着すると、その指でもって術式布に軽く触れる。
すると、まるであっけないぐらいにその術式布は解け落ちた。
虹也は前日に、ちぎらないように注意しながらだったがそれを調

べていた。しかし、それには継ぎ目一つ見付からず、伸びるものでもないのにどうやって装着したか不思議に思っていたのである。しかし、流石に外す時には普通に切断するものだと思っていた。
予想というものは多くが裏切られるものだが、疑問をそのままにしておけないのが虹也の長所であり短所でもある。
「どうやって外したんですか？継ぎ目とかは無かったと思いますけど」
取り敢えず知らないなら聞けば良いとばかりに、直接聞いてみる事にしたのだった。
「古い術式に興味があるのかね？簡単な話さ、”解（ほぐ）した”んだ」
「解すというのは？」
内藤は笑った。
「困った患者さんだな、ここで質問するのは私の役割のはずだかね。まぁ知識欲が旺盛な若者は嫌いじゃない。良いだろう。まずは基礎だ」
まさにまるで化学教師の顔付きで、彼は説明を始めた。
案外本当に他人に教える立場の人なのかもしれない。
「はい、よろしくお願いします」
虹也も思わず頭を下げる。
「君達氏族はおよそ象徴を介しての術式を軽く見がちだが、血統魔術と違い、この方法には汎用性がある。個々の能力に劣る大地の民が世界の大多数を抑えて安穏としていられるのはこの汎用性というものが重要な役割を負っているのが事実だ。大地の民の内、強大な力を誇る氏族などほんのひと握り。しかも、その中ですら真の術者は数人にすぎない。種族魔法を全ての民が身に着けた魔法種族などには本来適うべくもないはずだったのだからね」
本当に基礎からしき講義を始めた内藤医師に、虹也は困惑した。
しかも自分を氏族とやらと確信している上での講義である。
だが、そもそもは、問いを発したのは虹也自身であり、ここで話しを止めるのも何か申し訳ない。

迷った時間はそのまま彼等の間を通り過ぎ、相手の講義は更に続く。
「大地の民は繁殖力が強い。それはすなわち多くの土地を必要とするという事だ。土地を欲するという事は元々の住人のとの争いが起きるという事。それゆえ多くの戦いを経験する事となった我らが生み出したのが、象徴による魔術理論なのだよ」
「という事は本来は戦いの為のものなんですか？」
虹也は父が民族学の教授だった事もあって、この手の民族の遍歴のようなものには自然と興味が向かう。
結局はついつい話に引き込まれる事になった。
「ああいや、これは切っ掛けの話だ。戦いから生まれた象徴魔術ではあったが、その後主に発達したのは日用技術としてだしね。で、本題だが、封印という術式は、魔気の本来の性質を一番上手く利用した物だ。魔気には環状の物に引き寄せられる性質があり、輪を内側に向けて閉じるだけでも封じの効能を帯びるんだ。我々真核細胞生物がリングを利用して魔気を取り込んでいるように、これは世界の根本原理でもある」
リングと言った彼は自身の目を指し示した。
これは虹也にとって全く初めての情報であり、彼の育った場所では有り得ない物でもある。知っておくべき事だった。
「先生、そのリングというのは具体的にどの部分なのですか？」
何時の間にか先生呼びになっている。
「これはまた」
彼は思わずといった風に微笑んだ。
「もちろん、瞳の虹彩を囲むリングの事です。それ以外に無いでしょう？話は戻りますが、リングは個々に特徴があるので身元の調査にも有力な手がかりになる事が多い。ノーブルカラーは希少で目立ちますから君の身元を調べるにも重要な決め手になるはずです」
彼は医療道具を入れているらしいカバンの中から鏡を取り出すと、それを虹也に向けて見せる。

そこに代わり映えのない自分の顔を見出して虹也は頭を捻った。
相手が何を言っているのか分からなかったのだ。
しかし、すぐに虹也も気付く。
自分の目がうっすらと、ガラスに反射した光のような輝きを発している事に。

医者を信用出来るって実は凄い事だと思う

驚愕が虹也の意識を支配した。
自分の記憶が不確かである事は承知していたし、思い出すその断片からもしかしたらという思いは確かに在った。
しかしそれを目に見える形で突き付けられるとは思ってもいなかったのだ。
何より、あちらで暮らしていた時にそんな現象は起きていなかった。
「何か随分驚いているようだけどもしや自分が氏族だという事も分からないとかなのかな？」
「ええまぁ」
虹也は動揺が収まらないまま答え、内藤医師は痩せて骨の浮いた手を延ばすと虹也の額の前に翳すように置いた。
「今の所術式の発動は無い、か。素性を探る事で発動するトラップは無いようだな」
虹也は相手のその言葉を飲み込んで、誤解の無いように自分なりに咀嚼してみた。
「……もしかして、わざと危なそうな話題を向けました？」
「うん。トラップが発動してくれれば相手の癖が分かったんだけどね。残念だ」
「ちなみにそれが発動した場合俺はどうなったんでしょう？」
「ん～ちゃんと発動したら良くて廃人かな？」
相手はにこやかに応える。
「ボケェ！無茶すんなコラ！」
その瞬間、普段滅多に激昂しない虹也が立ち上がって怒鳴ったのは当然だろう。
「なんだ！？どうした！またそいつが何かやらかしたか！大丈夫か？コウ！？」

離れて見守っていた保護者がすっ飛んで来た。
（また、なんだ）
あんたの同僚どうなってんの？という気持ちを込めて、虹也は、衝立を蹴り倒して飛び込んで来た墨時の顔を見た。
「山中捜査官、何事ですか？全く落ち着きの無い」
「悲鳴が聞こえたら落ち着いてられねぇだろ普通」
墨時は噛み付かんばかりに抗議する。
（もっと言ってやってくれ）
虹也は内藤医師を挟んだ形になっている反対側から無言の声援を送った。
「確かにそれは人間の本能のようなものですね。分りました」
意外と物分かりが良いのかな？そう考えて、もう無茶は止めてくれると期待した虹也の耳に飛び込んで来たのは、
「そこの衝立を起点に遮音術を展開しましょう。それなら安心ですよね」
という残念な発言だった。しゃおんというのは遮音だろうなというのはさすがに虹也にも分かった。
（安心じゃねぇよ。てか、悲鳴が上がる事前提なのかよ！？）
脳内で突っ込んだところで事態は動かないので、ここは真面目に抗議をするべきか？と虹也が口を開き掛けた所で、目を吊り上げた墨時が押し殺した声で宣言した。
「同席する」
（おお、流石正義の味方は言う事が違うぜ）
虹也は素直に感心する。
こういうストレートな好意というものは、受ける側としてはその理由が分からないと少々の戸惑いを覚えるものなのだが、今の虹也には他に頼る相手は居ない。普段だったらうざいかもしれない正義の味方体質もこういう場合は有り難いばかりだった。
「邪魔です」
対して、内藤医師は率直だった。

「邪魔はしない。一応保護者なんだから良いだろう」
「全く、つくづく人の言う事を聞かない人ですね。まぁ仕方ありませんが、勝手な判断で邪魔をしないようにくれぐれもお願いしますよ。被験者に欠損が出ては困るでしょう？」
欠損という言葉に、虹也と墨時は顔を引きつらせた。
「誤解の無いように言って置きますが、邪魔が入らなければそのような事はありません」
職業的自信に裏打ちされたものか、内藤医師の言葉には揺らぎがない。
「分かった」
墨時は押され気味に、しかしきっぱりと返事を返す。
（ビックリする程人が良いなぁ）
虹也は感心と呆れの入り混ざった心地でそれを見やり、
（ここでありがた迷惑に思う俺って酷いかな？）
と内心呟く。
欠損とか御免だと思ってしまう。
「具体的に何をやってはいけないか言って貰えると助かるんですけど」
「決まっている、口も手も出さなければ問題ない」
虹也の恐る恐るといった問いに対する答えは簡潔だった。
「ん～と、おっさんよろしく」
墨時はチラッと虹也を見て眉を上げたが、無言で頷きそのまま虹也から二人分程離れた場所に腰を下ろした。
その距離は、邪魔はしないという意思表示なのかもしれない。
「さて、それでは探りはこのぐらいにして直接探査をするので何か異常が、そうだね、ちょっとした不安感でもあったら手を上げて合図をするように」
「はい」
さっきのは予備調査という事かと虹也は納得はしないまでも理解した。

内藤医師の手が今度は直接額に触れる。
皮膚に微細な振動を感じた虹也は、何がどうなっているのか知りたい欲求に駆られた。
「ほい」
すると、その心の声が聞こえたかのように、先程の鏡を墨時が虹也に向ける。
「おお、おっさんナイス！」
「お前の外苑文化に侵されっぷりが怖いわ」
「外苑って？」
「今時何を言ってるんですか、”術紋機の新鋭は外苑部に有り”ですからね。実際一部専門用語は外苑部の言語にしかない。もはやそれは大衆言語です。貴方だって使っているでしょうに」
「だからといって必要以上にかぶれる必要は無いだろ？あっちはあっちだ」
「だからおっさんなんて呼ばれているんですね」
「うっせいよ、仕事に集中しろ」
「今は結果待ちですから」
彼等の言い争いの一方で、虹也は鏡の中の自分を見ていた。
額の一点を中心に、銀青の光が、さながら水に広がる波紋のように現れては消える円を描いている。
その様は、まるで虹也の額から光の泉が湧き出しているかのようでもあった。
ふと、音が消失し、ぼんやりとした光に包まれたような感じがする。
それは虹也自身の意識というより、感覚のような部分でそう感じたのだ。
「いかん！鏡を退けて！」
内藤は撥ね除けるように鏡を持つ山中を突き飛ばすと、虹也の耳元で両手を打ち合わせた。
パシンという、どこか聞き慣れた響きが、忘我の縁にあった虹也

を引き戻した。
「あれ？」
虹也は、こういう場合に多くの者が上げるだろう芸の無い少し間抜けた声を上げ、現状に復帰した。
墨時は突き飛ばされる瞬間に自ら体を引き、衝撃を逃がす事で守った鏡を内藤の仕事道具の入ったバッグに突っ込むと、表情を変えぬまま片眉を上げて内藤を見やる。
それへ微かに頷くと、内藤は虹也に告げた。
「以前倒れた時、直前に何をしていたか覚えているかな？」
虹也は数度瞬きを繰り返すと、額に指を当てようとして、そこが今光って、何かを探っているらしい事を思い出し、指を当てるのを躊躇った挙句、顎に持って行った。
その姿は有名なかの「考える人」のポーズになってしまったが、ここは致し方ない。
「あの時は、確か……給茶機でお茶を飲んで、ええっと、確かその機械の表面に銀色の光の輪みたいなのが浮かんだような、う～ん、それ以上は覚えてないですね」
「ふむ」と、内藤医師は頷くと、女性の使うコンパクトに似た形の何かを取り出す。
表面をピッとタッチすると、あの墨時達の、手の甲に現れるような模様が走り、やはりホロ画面が立ち上がった。
目と鼻の先にあっても裏側からはその内容は窺えないが、内藤はそれを見ながら虹也に解説をする。
「おそらく君は力場酔いを起こしやすいのだろうね。それが体質によるものか後天的なものかは分からないが、なるべく力場波動線を注視しない方が良い」
「力場酔い？」
「詳しく解説すると長くなるから今は省くが、簡単に説明すると外部の魔気の波動線、いわゆる力場に体内力場が干渉される、いや、引っ張られると言った方が分かり易いかな？とにかくそういう状態

になって身体コントロールを失うのだ。まぁ普通はそこまで深刻な酔いを起こす者は居ないが、君は特にその酔いが激しいようだ」
「要するに酔っ払って倒れたって事ですか？それは恥ずかしいですね」
「いや、酒の酔いとは違うぞ？といってもどう違うかの説明を始めると今日だけでは終わらないだろうからやはり今回は省くが、下手すると命に関わる場合すらある」
脅すような内藤の言い方に、虹也は眉を潜めた。
「でもあの、なんでしたっけ、術式布？ああいうのがあれば平気なんでしょう？」
内藤医師はなんとなく医者というより研究者っぽい表情で溜め息を吐く。
「良いかい？例えば壊れた鳥かごがある。当然鳥はそこから飛ぼうとするがその鳥かごの周りには網が張り巡らせてあってそこに引っ掛かる。視覚的に言えばこういう状況だ。この場合鳥には常に心的負担と肉体的負担が掛かる。逃げないだけで決して無事ではないんだ」
「なるほど、なんとなく良くない事だけは分かりました」
その鳥かごを直す事は出来ないのかな？と虹也は思ったが、その本来の内容をカケラ程も理解出来ない彼にはそれが可能かどうかすら判断が付かない。
「ん、と、結果が出たな」
内藤医師はまた別の小さいケースをポケットから引っ張り出し、中からスライドさせるように薄い透明な板のような物を取り出した。
額が少しひやりとした事から、それを虹也の額に当てているのだろう。
自分の目と鼻の先で行われている事なのに何が起こってるのかわからないというのは案外と辛い。
業を煮やした虹也がちらりと墨時を窺うと、内藤の手元を見ているらしき彼の顔にも理解の色は無かった。

（まぁ確かに医者が心電図とかエコー検査とかで色々調べても、解説無しにそれが何を表しているか分かる人間ってあんまり居ないよな、普通）
「少し課長と話をして来る。結果は課長が纏めて話してくれるだろうから、今分からない事に焦る必要はないからね」
内藤は道具を片付けると立ち上がろうとして、ふと思い立ったようにもう一度道具を漁り、しばし唸った挙句小さなビー玉のような物を取り出した。
「力場酔い避けに良い物が手元に無い。仕方ないのでこれを体に近い所に置いておいてくれ」
よこされたビー玉のような物を受け取りながら、虹也はそれを注意深く見た。透き通っているが、反射光の無いそれは普通のビー玉より一回りぐらい小さい感じだ。パチンコ玉とビー玉の中間ぐらいの大きさだろうか？重みはあまりなく、不思議とほんのりと暖かい。
「それは月光草の種だ。魔気を吸う性質があるのでそれがあると近くには力場を形成し難い。対魔術に役に立つ道具ではあるが、君の症状の場合どのくらい効果があるかは少々疑問だけどね。なるべく早めにきちんとした君用のお守りを作るのでしばらくはガマンしておいて欲しい。それまでは出来るだけ魔気の波光を見ない事、良いね？」
「あ、はいありがとうございます」
虹也は頭を下げてその後姿を見送った。
「それが場崩しの実か、実物は初めて見たな」
「珍しいもの？」
「かなりな。高いぞ、無くすなよ？」
「うえええ」
虹也は気軽に胸ポケットに入れたそれを一度取り出すと、困惑したように手に握った。
適当な入れ物が無いのだ。
「ちと待て」

墨時がごそごそと何やら自身のポケットらしきものを探る。
小物入れのようなサイフのような皮製の入れ物を取り出し、その中身を机に出し、（見覚えの無い模様だが、どうやら小銭のようだった）その空いた物を虹也に寄越した。
「良いのか？」
「良い、お前が無くすと下手すると保護者である俺に返済義務が生じそうだし」
「あはは、なるほど」
机に散らばった小銭のようなコインをひとつかみにしてそのままポケットに放り込む墨時を見つつ、虹也は質問する。
「それお金？」
「そうだ、まだ実銀を有り難がる連中は多いからな、まぁ持ってて損は無い」
「実銀って銀貨？」
「いや、流通上に銀玉もあるが、今は主に銅とニッケルだな。銀ってのは昔風の言い方なんだが、そのまま残ってるんだ。おそらく」
「おそらく？」
「俺に小難しい事は分からんって言っただろ？と、俺も結果聞いて来るからそこで座ってな、すぐに茶が出るだろ」
「はぁ、よろしく」
色々と疲れた気分で固い椅子に座り直す虹也の頭に、固い感触が軽く触れた。
上目使いに見上げると、握りこまれた拳が、軽く頭に当たっている。
「直ぐに家に帰してやるよ、まぁ龍の背に乗ったような気で待ってろよ」
「ちぇ、落ち込んでなんかないぞ」
「そうだろうさ」
虹也は誰も居なくなった場所でボーっとする。ふと声が聞こえた気がして顔を上げると、何時の間にか目前に茶が置かれていた。

誰かが運んでくれたのだろうに気付かないとは、やっぱりそれなり疲れていたらしい。

ずずっとわざと音を立てて飲んだ茶は、家で呑んでいた物とはやはり違った味がした。

過去からの響き

「そうですね、結論から言えば術紋の痕跡はあります」
部門長と担当官とその相方、三人の顔が厳しく引き締まる。
他人の意識を操作、或いは書き換える行為は重大な犯罪だ。一般の民情からすれば、下手をすると殺人より忌避される罪科である。
「しかしですね、一つ重大な齟齬があります」
内藤の言に全員がやれやれといった顔になる。肝心な事に限って後回しにするのはこの男の悪い癖なのだ。
「なんだ」
「確かに術紋の痕跡はありますが、かなり古い物、そうですね、軽く１０年以上は前の痕跡だという事です」
「なんだと？」
「だから１０年……」
「それはもう良い分かった。それよりどういう事だ？専門家としての見解を聞かせてもらいたい」
「見解も何も」
内藤は懐から噛み煙草を取り出すと口に放り込む。
漂う強烈な匂いに誰もが思わず半歩下がった。
「そのまんまですよ。彼は確かになんらかの術の影響を受けている。しかしそれは遠い過去に受けたものである。と」
そこにいる彼等は、捜査部でそれなりに多々な経験を積んで来た者達だったが、その事態は俄かには判断出来なかった。
１０年以上前の術が最近になって発動した？いや、ならば痕跡は新しいはずだ。
子供でも分かる事だが、術式という物は、発動するまではその辺の落書きと同じような物なのだ、発動して始めてエネルギーの焼き付きの痕跡として跡を残す。
つまり、あの少年の身に何かが起ったのは１０年以上前という事

だ。
「なら考え方を変えてはどうです」
僅かな沈黙の後に口を開いたのは山中捜査官だった。
「子供の時分に施された封印が最近になって自然消滅した。と、いう線はどうですかね」
「なるほど、自然解除ならば痕跡としては残らない。だが、１０年を越えるような封印が可能なのか？」
部門長の問いに、内藤は殆ど思考した風もなく返事を返した。
「可能か不可能かと言えば可能でしょうね。伝説には１００年を越える封印の話もある」
「誰が伝説上の話をしろと言った」
東山部門長は頭が痛いとでも言いたげに頭を振った。
「そうですね、今の時代そのような大魔法を使える者の存在など聞かない話です。単に長期に封印するだけなら術紋機を使えば出来なくは無いですが」
「禁固刑ね」
彩花が鼻を鳴らして言う。
たちまち山中が顔を歪めた。なにしろつい先程、その刑に処された者の家族から命を狙われたばかりであるからだ。
「しかしあれは封印を施し続ける物のはずだ。今回の条件には当て嵌まらないだろう」
山中は少し考えるとそう結論を出した。
「そうですね、あのような物を使えばその痕跡は最近の物に更新され続ける。彼の今の状態には当たりません」
内藤が肯首して更に続けた。
「ただ術紋には可能性があります」
キラリと、正にそういった目線を上げて言い募る。
「市販の術紋機の能力に限界があるのは、所詮複写に過ぎないからです。写しはどれ程精度を上げようとブレが生じる為、精密な物を作ろうとすれば限界がある。だが一流の職人がその手で描いた物の

精度は桁違いです。それともう一つ、触媒です」
「触媒というと魔気を通す為の素材の事だよな」
山中は確認するように言った。
「そうですよ」
何を今更確認するのか？と言いたげな表情で内藤は答える。こういう無意識に他人を見下すような言動のせいで彼は他人に忌避されるのだが、本人は別段相手に対する侮蔑で言っている訳では無いようだ。専門分野だからこそつい出てしまうのだろう。
「一般的に魔気を誘導しやすい物質は白金、銀、水晶と言われています。また、これは事実てもある」
彼は息を継ぐと、生徒を一瞥する教師のように一堂を睥睨した。
「ですが、対人に於いては更に優れた触媒がある。……それはすなわち血、血液です。それも本人、或いは近親者の物が最も優れている。古来、呪術の類いはそうやって成果を示しました」
「現代に於いては違法行為だがな」
山中がやや呆れ気味に口添える。
「暗黒時代は終わったと、そう誰もが思いたいだろうからな」
技術的な話になって口を閉ざしていた彩花がそう評した。
彼女が血を継ぐ一族は、特にその方面に能力が特出している。それゆえの迫害もまた在った。だからこそ彼女にはその話題をやり過ごせない気持ちがあるのだろう。
「しかしだ、いくらなんでもそれは大掛かり過ぎる話だ。一流の術紋師に本人の血を使った呪術を施させるだ？そんな無茶をやって単に子供一人の意識を操作するだけか？いったい犯人にどんな得があるっていうんだ」
「それを調べるのが貴方方の仕事でしょう？捜査官どの。私に出来るのは分析と推論に過ぎません」
いっそ嫌味なのかというぐらいに爽やかに断言して、内藤はニヤリと笑った。山中と彩花は申し合わせたように同時に舌打ちすると、それに気付いて互いに顔を背ける。

東山部門長は彼等のそんな様子に溜め息を零した。
「しかし私には解せない事があるのですよ」
内藤は、だが、話を終わらせなかった。更に言葉を継ぐ。
「なんだ？」
いっそぞんざいに山中はその言葉の続きを促した。
「あらゆる符牒が一つの形を成している。なのに貴方方の口からその名が出ない。それが禁忌だから敢えて目を逸らしているのですか？」
瞬時、目配せが交わされ、ふと気配が変わる。
東山が彼等を外部から隔離したのだ。
「大袈裟じゃないですか？」
それに気付いた内藤が呟く。
「君の言うように禁忌なのでね。この件に関しては甘く見積もる訳にはいかん」
「内藤さんの言ってるのはあの坊やの発見場所だな？」
彩花が確認するように聞いた。
「それだけじゃない。彼に術が施されたのが１０年程前である事、そして彼の容姿と年齢もだ。あまりにも符号し過ぎてむしろ逆に怪しいぐらいですね」
「確かに考えてみれば場所と年齢は合致する。だが、その場合は空白期間がおかしい。明らかに氏族の子供が１０数年だれにも気付かれずに生きていたってのか？有り得ないだろ」
「だが、もし推論が当たっていれば彼は彼女の一族です。彼の主張するように異世界にいたとしたら？」
「それこそまさかだ、彼がもしそうだというなら当時まだ内年齢でも４歳だぞ、しかも名取りの儀式前だ、その為のお籠りだったって事だからな。……無理だ、姫君の唄に干渉出来るはずもない」
「彼本人だけならそうでしょうね。しかし、あそこには他に本家の詠み手が３人いたはずです。彼らが次代の担い手だけでも生かそうと力を尽くしたとしたらどうです？」

「お籠りの間は一族は接触禁止、部屋はかなり遠かったとの事だし難しいだろう。それに詠み手と謳い手の隔絶はそんな容易い物じゃないらしいぞ、おなじ謳い手ですら解けなかった封印をどうにか出来るとも思えんし、実際未だ封印は破られてはいないんだろう？」
「ええ」
内藤はニヤリと笑みを浮かべる。本人に言わせると微笑みのつもりらしいが、何か企んでいる笑いにしか見えないのは日頃の行いのせいであろう。
「山中捜査官、随分詳しいですね。あなたはそもそも氏族に大して興味がある方ではなかったはずですが？察する所、この短期間にかなり調べられましたね？」
「う……」
「まさかお前、夜の内に本部の記録を閲覧したんじゃあるまいな」
東山が疑わしげに山中を見た。
対する当の本人は、僅かな時間に動揺を消し去り、いかにも心外であるような顔をする。
「まさか！あの事件の記録は上位権限が無いと閲覧出来ないじゃないですか」
「ほう、よく知っているな」
「常識の範囲ですよ」
悪びれない態度に東山は頭を抱えた。
「なるほど防御結界はお前の得意分野だな」
「部長、人聞きが悪いですよ」
「喧しいわ！」
ぴしゃりと叱り付けた彼に向かって、今度は山中の相方の彩花が提案してみせる。
「部門長、やはりこいつのような危険人物はさっさと前線送りにするべきなんですよ」
ここぞとばかりに強く言い募る。その目はごく真剣だ。
「はっ、よく言うな戦闘狂が！てめえこそ戦場で好きなだけ血を啜

ってろ！」
「貴様、今度こそ種族蔑視だな。一度この牙の下、従属するか？」
「おいおい第一級犯罪の予告か？」
「全く君達はオウム程度の脳しか無いんだろう？毎度毎度内容の全く同じ罵り合いをするとは知恵持つ人として恥ずかしくは無いのか？少しは罵り言葉の一つを取っても内容を吟味して創意工夫をしようとは思わないのか？」
「うっせいよ、先鋭的保守の変態は黙ってろ！」
「全くだ種族差別主義者のくせに常識人面するな！腐った肉の匂いがプンプンするからね」
「ほう？お二人の私への評価はよく分りました。次回の術紋照射が今から楽しみですよ」
「お前達……いい加減にしないと地下に埋めるぞ」
東山部門長の低い声が三人の聴覚にひやりとした響きを残す。
無言で固まる部下を眺めて、（さて、自分は今日だけで何度溜め息を吐く羽目になるのかな？）と、しみじみ考える上司であった。

「お茶のおかわりいれますねー」
どこか捜査部という厳しそうな肩書きにそぐわない、ほやっとした女性が急須を手に、一人無聊をかこっていた虹也の所へやって来て、空になっていたお茶を入れてくれた。
「あ、ありがとうございます」
虹也は素直に礼を言うと、淹れて貰った茶に口を付ける。
「お、おいしい」
甘味のある柔らかい味わいは玉露に近い。どうやらわざわざ別のお茶を淹れ直してくれたようだった。
「ありがとうございます。別のお茶淹れ直してくださったんですね」
「あ、いえ、お口に合うかわかりませんけど」
何か凄く緊張されているのを感じて、虹也は困惑した。

なにしろ社会人未満の身としては働くお姉さんに敬語を使われるなどという事は、酷く違和感に苛まれる経験なのだ。
「そんなに畏まられると緊張しちゃうんでもっと砕けちゃって良いですよ」
「ええっ！砕くなんてそんな！私何か粗相をしましたか！？」
室内の視線がさっと集中する。
虹也は、自身の心臓が体を震わせる程に鼓動を高め、一気に汗が噴き出すという、極々貴重な体験をしたが、そんなものをゆっくりと味わうどころではなかった。むしろ味わいたくは無かった。
「いや、怒ったとかじゃなくってもっとこう普通に接して貰いたいって意味で言ったつもりだったんだ。言葉選びが悪くて驚かせたみたいで、ごめんなさい」
虹也は人生の内で上位ランキング入りする程に焦りながら、しかし同時に思った。
人を”砕く”という事を当然のように思われてしまう氏族とはどんな存在なのか、と。
「すみません、取り乱してしまって」
女性が恐縮したように頭を下げる。
「でもその、あまり気安くするのはどうかと思うのですよ。位的に言えば私なんか無位ですし」
「え？”むい”って？いや、俺そういうの分からないし、その、別の所で育ったから」
「えっ！？でも氏族の方は国外には……あ、そうか、だからうちに。大丈夫、安心してくださいちょっと性格には難がありますがうちの捜査官は優秀ですから！」
どういう勘違いをされたのか疑問だが、とりあえず丁寧語は直してくれないらしい。
（人生は思い通りにならないのが当たり前ってね）
父の口癖を胸の内で呟き、虹也はめげずにニコリと笑った。
「昨日から助けられてばかりです。頼りにしていますよ」

「良かった。やはり信頼関係が無いと調査も上手くいきませんからね」
「皆さん親切で有り難いですよ」
虹也は相手が調子を取り戻した事にホッとして軽く話を合わせた。
「それにしても揉めてるみたいですね」
先程の医者と墨時と彩花、それに部長がなにやら言い争っている様子の場所を示してみせる。
「ああ」
女性はどこか渇いたまなざしでその一画を一瞥した。
「あの組み合わせだと絶対いつも揉めるんですよ。今回は目に余ったのか部門長が周りから隔絶してるみたいですね。声も気配も消えてますから」
「隔絶？」
「部門長は巨人族でしょう？この庁舎が守護地なのでここでは神のごとく何でもありなんですよ。凄いですよね」
当然のように語られたその内容のほとんどは虹也にとって理解の外の話だった。
唯一（なるほど、巨人だから大きいのか。でも巨人って言葉から連想するほどには大きくないな）などと思った程度だ。
「姿は見えているんですね」
「接触が出来ないと緊急の時に困るでしょう？」
（うん、ダメだ分からん）
虹也はファンタジー要素に関しては、とりあえず棚上げしておく事にした。
元の世界で非常識であった物を無理に理解しようとしてもどうにもならないだろうし、そこをあえて話を合わせようとしても仕方がない。
そもそも理屈や仕組みは分からなくても別に困らずに過ごしていた事は元の世界でも多々あった。通信の基本的な仕組みや車や機械のエンジンの作りとか虹也は深くは知らなかったし、別に知ろうと

も思わなかったものだ。
　そういうものだと飲み込んでおいて、知りたければ調べれば良いのである。
（まずは現実を把握するのが先だよな）
「あの３人は仲が悪いんですか？」
「あ～」
　女性はしまったなという顔をしていたが、それ程罪悪感を刺激するような内容でも無かったらしい。
　すぐに女性特有の秘密ではない秘密の話をする時の顔になった。
「本当に仲が悪い訳じゃないんですよ。そんなんで危険のある仕事とか組んでやっていられませんからね。ただ、内藤分析官はものすごく保守の民族主義者なんです。山中捜査官は外縁部は嫌ってるみたいなんですけど基本的には多様種族擁護派だし、綾瀬捜査官はちょっと複雑で民族主義と同時に他種族がちょっと苦手らしくて、色々と意見がぶつかるんですね」
「うん？それじゃ彩花さんと内藤先生は仲が良さそうですけど」
「いえ、あのお二方は種族が違うでしょう？」
「ああ」
　そういえば彼女は吸血種族がどうとか言ってたかと、虹也は思い出した。
　なるほど違う民族の民族主義者同士というのは合わないだろう、それは当然だ。
　虹也は改めてこの世界の複雑さに目が回る思いがした。
（俺、ここでやっていけるのかな？）
　元の世界に戻る方法を探すという事がイコールで元の世界の破滅に繋がり兼ねない以上はそれを行う訳にはいかない。
　一番大事な人達を亡くしたとはいえ、あの場所にはまだまだ大事な人達がいるし、大事な場所があるのだ。
　そうとなれば、彼はこの場所で生きる覚悟をしなければならない。
（父さん、母さん、きっと世界が違うくらいものともせずに見守っ

てくれてると思うけど、俺に頑張る力を分けてくれよな）
思いと共にそれぞれの顔を思い出す。

『はっ！なんだコウ、お前まだ親の膝を齧る餓鬼のつもりなのか？知るか！一人でやれ、一人で！』
『翻訳すると、自分が見守ってるから大船に乗った気でいろって事ですね。ほんとうに面倒臭い人だこと。コウちゃん、お母さんもいつでも傍にいますからね』
『なんだ、その勝手な解釈は、俺はなぁ』
『まぁお父さんったら年寄りの冷や水ってご存知ですか？』

ふと、自然に思い浮かんだ情景に口元が緩んだのだろう。
「あの、大丈夫ですか？」
何か不安そうな顔で話相手になってくれていた女性に覗き込まれてしまった。
「あ、いえ、すいません。その、色々な人がいるんで難しいんでしょうね？」
「そうなんです、最近の他種族受け入れの政策で急激に色々な民族が入り混じった国になってしまって。お気付きだと思いますけど、私もいわば元々は余所者なんです」
虹也としてはそこの所には極力触れないようにしていたのだが、彼女には獣の耳が生えていた。
といっても墨時の彼女のような、まんま直立歩行する獣という感じではなく、ちょっと毛深い人というだけで、その耳が無ければ虹也主観では”人間”と大して変わらない。
いわゆる尻尾といえるような物も見当たらなかった。服の下に隠しているだけかもしれないが。
「ええっと、草原種族とか？」

「ええっ！！」
女性のあまりの驚きっぷりに虹也はうろたえた。
何かまずい事を言ったのかもしれないと思ったのだ。
「わ、私そんな乱暴者に見えますか？こ、これでも森林種族なんですよ」
なるほど、どうやら草原種族は肉食系か。
虹也は話の流れからそう見当を付ける。
「ごめんなさい。俺、他の種族って今まで見た事が無くて」
「ああ、そっか、そうですよね」
良かったぁ、とか呟いている女性と同様に虹也も内心で安堵した。
（当分はこの方便でごまかせそうだ）
方便ではなくてそもそもそれは事実であるのだが、どうも虹也も少々混乱している。
何しろ彼の覚えの無い記憶が突然ふと浮かび上がって来て、今の彼の知識と混濁する事があるのだ。
あの精神的な負担を伴った、フラッシュバックのように鮮やかに記憶が思い出される事象はまだ数度しかないが、元は無かったはずの、ちょっとした知識のような物が当たり前のように頭の中にあって、それがそこにある違和感の無さが、むしろ彼の混乱の元となっている。
（なんか俺、元々知識が偏ってる感じだよな。そりゃ5歳以前の知識なんて知れたものなんだろうけど）
虹也は前途の多難さに思わず溜め息が出そうになるのを堪えた。
家で彼が溜め息を吐くと母がげんこつをくれたので、すっかり溜め息を飲み込む癖が付いてしまっているのだ。
「俺、どうなるのかな」
思わず、本音が零れる。
その時、ふと女性の影が離れたのを感じた。
疑問に思ったが、お茶を出し終わったし、会話も一通り区切りが付いたので仕事に戻ったのだと考えていた。

だが、彼女はまたすぐに戻って来た。
「？」
振り仰いだ虹也の目前に可愛らしい花を象った和菓子が差し出される。
「これ、おやつのお裾分けです。甘いものは気持ちが落ち着くんですよ」
「あ……ありがとうございます」
笑顔と共に、今度こそ彼女は一礼して下がって行く。
竹で作られた少し太い楊枝でその和菓子の一片を切って口に入れた。
「甘い、な」
漉し餡のふわりとした甘さ。
自分はきっとここでやっていける。世界は変わっても人の思いやりは変わらず暖かく感じるのだ。それならば世界は変わろうと、その気持ちに応えずに弱音を吐くだけなのは一人の男として情けなさ過ぎるだろうと、いわば見得かもしれないがそう思えた。
虹也はその懐かしい甘さを口の中でお茶に溶かしながら、自分の中の違う世界への隔意をこんな風にゆっくりと溶かしていこうと心に決めたのだった。

話し合いはお茶を飲みながら

「で、結局どうなったんだ？説明無しに外に連れて来られるとなんか怖いんですけど」
捜査部の建物を後にしながら虹也は墨時に聞いた。というより文句を付けた。
彼等捜査員達の内々の話し合いは虹也の感覚で３０分ぐらいで終わり、直後、説明待ちをしている所を墨時の「そんじゃ行くか」の一言で連れ出されたのである。
詳しくは無くても良いからせめて説明を聞きたいと思うのは、当事者としてはおかしな事ではあるまい。
「んーそうだな、当面の予定としてはお前の身元を調べる事なんだがこれはとりあえずはうちでやるとしてだ、まずは保護者としてはお前自身のこれからの事を相談したいと思う」
「あーうん」
本人すら考えてなかった先の事を考えてくれてありがとうと言うべきかもしれないが、結局は生返事を返して虹也は頷いた。
「それで、あんな堅苦しい所で話すのもなんだから茶店にでも行こうかと思ってる」
「了解」
流れを理解して虹也は了承した。
調書は取ってメディカルチェックは受けたのだから、後は事件としてはプロの捜査機関の仕事で、今の墨時は虹也の保護者として話をするつもりなのだろう。
虹也としては検査の結果というか、術の影響云々の話を聞きたい気もするが、やはりそれなりに守秘義務という物が存在するのだろうからせっついても仕方が無いかもしれないし、話の流れの中で説明があるかもしれないので、今の所は保留しておく事にした。
「仕事、ほっといて出て来て良かったの？」

「捜査官としての俺の今の仕事はお前の護衛だ。問題ない」
「一石二鳥って事だね」
「ん？どういう意味だ？」
「一個の石を投げて鳥を二羽落とすような事って意味」
「ああはいはい、魚の友釣りみたいな事だな」
何か違う気もするが、言葉の言い回しについてまで議論するのは面倒なので虹也は曖昧に流した。普通に会話が成立する分、こういう細かい事で引っ掛かるのはなんとなく精神的な疲労を伴う。
「お、そこそこ、その店が甘味が美味いんだ」
墨時が数分程度歩いた先で、並んだ店の内の1軒を示した。
甘味かよ！という内心の突っ込みをグッとこらえて、虹也は示された店を見る。
どうにも店構えからして雰囲気がポップだ。
嫌な予感がひしひしとこみ上げるのを堪えて、虹也はいそいそと入っていく墨時に続いた。
店内は明るい色調で可愛らしいインテリアが飾られていて、ようするにバリバリに明らかに女性向けの店である。
（甘味だもんな）
今は平日の午前中なのかお客は主婦っぽい人が数人でかなり空いていた。
（あ、そういえばこの世界の学校制度とかどうなってるんだろう？）
落ち着いて来ると、この世界の知らない事、知りたい事が浮かんで来るが、分からない事が過ぎてどこから手を付けて良いか混乱してしまう。
「白玉膳を頼む、コウは何が良いんだ？」
そんな事を考えていた虹也が声に気付けば、墨時はさっさと自分の注文を済ませていた。
「なに一人で勝手に頼んでんだよ！普通先に聞くもんじゃないか？俺に」
文句をタラタラ言いながら壁に掛かってる品書きを見る。どうや

ら席毎のメニューは無いようだった。
「お決まりになりましたらお呼び頂ければ直ぐにまいりますから、慌てなくても大丈夫ですよ」
ちょっと綺麗なウェイトレスさんに気を使われてしまい、日本人の性として更に焦った虹也は、とりあえず飲み物だけでもと目を動かす。
（ええと、白茶？緑茶、紅茶、黒茶？……緑茶と紅茶は分かるとして白茶と黒茶ってなんだ？白湯と黒豆茶とかか？）
僅かな逡巡の後、
「黒茶をお願いします」
好奇心に負けてそう言っていた。
「はい、承りました」
お辞儀の見本のような見事なお辞儀を見せて、ウェイトレス（？）の女性は店の奥へと下がる。
（気持ち良いぐらい丁寧だな）
姿勢の良い動きに少しばかり母を思い出したのもあって、虹也は彼女の受け答えに感動した。
「黒茶を頼むとか、ほんとお前外苑部贔屓だよな」
墨時がなにやら虹也には良く分からない事でツッコミを入れて来る。
「う～ん、あのさ」
「うん？」
「その外苑部ってなんの事？外国？」
この際はっきり聞いておこうと、虹也は彼に確認する事にした。
「は？」
墨時は何冗談言ってるんだ？という目で虹也を見たが、直ぐに何かに気付いたような顔になる。
「あー、覚えてないのか？それも」
「知・ら・な・い・ん・だ」
虹也のなぜか偉そうな主張に、思わずといった風に噴き出すと、

墨時は少し考えるように上を向いた。
「そうだなー。んと、世界的に内奥、狭間、外苑という区分けがあるんだが、これは気穴からの位置関係を表している」
「気穴って？」
その問いに墨時はあーとかうーとか唸り出す。
「ごめん、俺が悪かったよ。おっさんの知識の無さを舐めてた。自分で調べるよ」
虹也がわざとらしく溜め息を吐きつつそう言うと、墨時の上まぶたがピクピクと動いた。
どうやら怒るのを我慢しているらしい。だが、なんとか踏みとどまると、更に説明を続けた。
「とにかく、外苑部の連中は暴力的で危険なんだ。それだけ覚えてりゃあ良い」
（それって、民族的偏見とかじゃないのかな？）
虹也は胸中で呟いたが、何か確固たる理屈が存在する可能性もあるので、とりあえずそれ以上は突っ込まなかった。自分で調べれば良いのだ。
「そういえばさ、図書館ってある？」
「としょかん？」
また言葉の壁かと、ちょっと疲れながらも、こればっかりは後々必要なので虹也は説明を試みた。
「本をある程度自由に閲覧出来る施設みたいな？」
「ああ、図書処（ずしょどころ）ね。あるけど俺は場所を知らん」
「うん、おっさんが知ってるとは元から期待してなかったけど、あまりにも思った通りだから逆にびっくりだ」
平坦な声で言う虹也にジロリと目を走らせて、墨時はぼやく。
「どうせね」
その微妙な雰囲気の所へ注文品が運ばれて来た。
「失礼致します」
女性の丁寧で綺麗な声がそのくすんだ空気を払ってくれる。綺麗

なお姉さんは偉大だ。
墨時の頼んだ白玉膳は、おかしな言い方だが本当にお膳で、外側が黒塗り、内が朱塗りの落ち着いた物だった。
しかし、中の陶器の碗やカップは微妙にポップで、ちょっとしたアンマッチの妙を醸し出している。
一方で、虹也の前に置かれたカップがこれまた渋い造りの物で、どっかの居酒屋で出てくるような陶器のビール杯のようだった。
（なんか面白い店だな）
虹也は、思わず心のお気に入りに登録してしまう。
ウェイトレスさんが美人だからというのが主な理由ではないんだぞ？と、誰が見る訳でも無いのに心のメモ帳に但し書きをしてしまった虹也だった。
改めて、虹也が自分の前にあるカップに注意を向けると、それから馴染みのある香りがふわりと広がる。
（なるほど黒茶っていうのはコーヒーか）
そうと分かれば砂糖やミルクが欲しいところだった。虹也はコーヒーはストレート派ではなく、ある程度砂糖とミルクを必要とする極一般的な嗜好の主である。
しかし、テーブルにはそれらしき物は見当たらなかった。
「おっさん、ちょっと聞きたいんだけど。黒茶に砂糖入れたりはしないもの？」
「坊やがいきがるからそういう事になるんだ」
「何が？」
言葉にトゲを込めて睨んだ虹也を鼻で笑って、墨時は決め付けるように言った。
「苦くて飲めないんだろ？」
（さっきの意趣返しか！大人げねぇな）
虹也はムッと墨時を睨むと、カップを掴み口を付ける。
コーヒーは考えたより飲みにくくなかった。どうやらいわゆるアメリカンコーヒーのように薄めに淹れているらしく苦くて頭が痛く

なるというような物ではないようだ。
しかし、やはりストレートで飲む物ではないと虹也は思った。
「無理しなくても良いぞ」
今度は少し心配そうに聞いてくる墨時に、ふ、と笑ってみせると、素早く手を動かす。
相手の膳の上で魅力的で綺麗な白を主張していた白玉団子を1個、瞬く間に口に放り込んだのだ。
「おい！俺の団子になにすんだ！？」
「やっぱり甘みが欲しいんで貰った」
「先に言え！」
「考えるより先に手が出たから」
「それってこういう時の話なのか？喧嘩とかの言い訳なんじゃないか？」
「おっさん煩い、店の迷惑だろ？」
「お前という奴は」
ワナワナと震えながらも、墨時はそれっきり口を噤んで、自分の膳を引き寄せて警戒しながら食べ始める。
（食い意地はってるなぁ）
虹也は自分の事は棚に上げて冷めた半眼でその様子を見た。
口の中の白玉はもちもちとして柔らかく、彼が住んでいた地域の近くに午前中で売り切れる白玉団子の店があったが、そこの味と勝るとも劣らない感じだ。
掛かっているソースは黒蜜ではなく、ゴマときなこを足して淡い味の蜂蜜を混ぜたような味わいで、馴染みのない味ではあったが、それなりに美味しい。
「それで、話なんだが」
「うん」
場を仕切りなおして、墨時が改まった声で言ってきた。
「お前は今、俺が保護者という事でとりあえずこの国の人間としての立場を保っているんだが、お前自身に国民証が無い状態だ」

（国民証か、戸籍みたいなものかな？）
「うん、なんとなく分かる」
「それで、このままだと難民保護施設に入ってもらわないといけなくなる。もちろん難民保護施設に問題がある訳じゃないんだが、ここに入ると自由が利かなくなってしまう。要するに外に出るのにやたら面倒くさい手続きを必要とする許可を取らなきゃならん。だが、それだからこそ安全という面では一番だろう」
「それが選択の一つって訳だね」
「ああ、それでだ、俺から提案したいのは、俺が身元引受人として仮の国民証を取得するという方法だ」
「仮の国民証？」
「この国が今他民族受け入れを推進しているのは聞いただろ？」
「うん」
「それで、ある程度身元に保証がある場合は国民としての受け入れが容易になっているんだ。この仮の国民証を入手すると半年間は国民と同じ権利を有する事が出来る。ただ、その期間中に何らかの法規違反をやらかすと本手続きが5年は出来なくなってしまうが、何事も無ければ半年後には正式にこの国の民として認定される。本当は、少し手間を掛ければ仮認定期間無しに直接国民として認定出来る仕組みがある事はあるんだが、急いで国民証が必要だろうし、実際の身元が判明した場合に二重登録になってしまうと面倒なんで、俺が知ってる中ではこの方法が一番無難じゃないかと思う。それで、お前の意見を聞きたいんだが」
　虹也は墨時がかなり真剣に自分の足場を固めようとしてくれている事に少し驚くと共に納得した。
　彼の言動にはぶれがない。墨時にとってこういう風に誰かの為に手間を掛けるのは当たり前の事なのだろう。
「いくつか聞きたいんだけど、その国民証の取得を急ぐのはなんで？難民施設に入るって言っても、事件性の確認が終わるまではこのままおっさんの保護を受けてる犯罪被害者としての立場で留まれた

りしない訳？他に何か不味い事があるの？」
「確かに事件性の確認の為の保護って事にすればある程度の猶予はある。取得を急ぐ一番の問題は行動の自由だな。このままの状態だとお前は一人では何も出来ない。さっき言った図書処だって利用するのに国民証が必要だし、色々な買い物に使うカードを発行するにも国民証が必要だ。そうなると色々面倒だろ？当然俺の行動も制限されちまうしな」
「おっさんと俺の行動の自由って事だね。だけどおっさんは俺の護衛任務も兼ねてるんだよね？その場合俺が個人で行動出来るようにする意味があるの？」
「街中には犯罪に対する抑止紋があるし、国や地方領管理の施設内部には更に強固な警備設備がある。それに俺自身もお前に守護印を持たせるつもりだ。実際問題俺の近くに居るより街中の施設にいる方が安全なぐらいだ」
虹也はその言葉に紛れている本音を嗅ぎ取って、思わずイラっとした。
結局、墨時の言っているのは銀穂に対する心配と同じ類いのものなのだ。彼自身が災厄をもたらすかもしれないと遠まわしに言っているのである。
しかし、虹也は気持ちを切り替えた。墨時側の認識はともあれ、彼が独自に動きたいのも墨時の捜査の邪魔になりそうなのも確かだからだ。
そうなれば、この提案には基本的には利点しかない。
「分かった、その仮登録とやらを頼む。そいでさ、ちょっと確認しときたいんだけど、さっきの内藤さん？の調べてた結果って俺自身には言えない事なの？」
「いや、そっちもこれから話す」
どうやらその話も元から用意していたようで、墨時に慌てている様子は無かった。
虹也は自分で振った話ながら、それを確認するのに僅かながら心

構えを必要とするのを感じた。
「ちょい待ち」
「ん？」
話の腰を折るような虹也の「待った」に墨時が不思議そうな顔を見せる。
「その前に、……お姉さんすいません！」
虹也はウェイトレスさんを呼んだ。
「あの栗と甘芋の淡雪仕立てってのお願いします」
「ちょ、おい、それ高いだろ」
「俺、こっちの金銭感覚が無いから分からないなぁ」
「くっ、お前……」
「あの、どういたしましょうか？」
「ほら、お姉さんが困ってるじゃないか、細かい男は嫌われるぞ」
クスッとウェイトレスのお姉さんが笑った。どうやらウケが取れたらしい。
「良いです、それお願いします」
どこか諦めた様子でお姉さんに告げ、墨時は虹也の追加注文を受け入れた。
「それでだ！」
何か壮絶な笑みを浮かべて墨時は話題を戻した。
「おう」
さすがに我が儘が過ぎたかも？と、やや心配しながら、虹也は神妙に応じる。
「検査の結果、確かに術の影響は認められた」
その言葉に、突然虹也の顔付きが厳しさを帯びた。
虹也は彼なりに考えていた事がある。
唐突な世界の移動、突然出現した過去の記憶。そして専門家らしき者達の言う『意識の操作』。
もしかすると、何者かが自分を誰かに仕立て上げようとしているのではないか？と、ぼんやりと考え出したのだ。

氏族と呼ばれる自身の外見（リングと呼ばれる目の光）とか、よく考えれば色々と穴の多い推測だが、少なくとも虹也自身はその方が遥かに気が楽なのである。
ただ犯人を恨めば良いのだから。

「だが、それが行われたのは十数年前らしい」
しかし、墨時の続く言葉にその愚かな希望は失せた。
（まあ、悪足掻きだって事は分かってたんだけどさ）
「十数年前か……あのさ、実は話して置きたい事があるんだけど」
「ん？心当たりがあるとかか？」
「ああ、うん、ちょっと」
ふと近付く人の気配に虹也は口を噤んだ。
見るとウェイトレスさんが追加オーダーを運んで来ていた。
「失礼致します」
相変わらずの綺麗なお辞儀と共に、虹也の前に紺の陶皿に盛られた和風デザートが置かれる。
彼女は流れるような動きで皿を置いた返す手で、中身の減った虹也のカップを取って、片手に持っていたポットから黒茶（コーヒー）を継ぎ足してくれた。
（ここってもしかしてフリードリンクかな？おっさんのはポット付きだから無いとか？）
フリードリンクと言えば学生時代に馴染んだファミレスを思い出す。
実際、今の一場面だけを切り取れば、十分に当たり前に有り得る彼の世界の風景だ。
昨日からの様々な出来事を忘れ去る事が出来れば、何も変わらない日常の一時（ひととき）にすら思えてしまう。
虹也は頭を一つ振ると、目前の綺麗な食べ物の一角を崩して口へと運んだ。
それは栗と芋のペーストで作られたらしい繊細なつぼみと花に、

白いふわふわの雪に見立てた何かが掛かった物で、既に食べ物と言うより室内インテリアのような出来映えである。
「うまっ！！」
一口で、思わず声に出してしまうぐらいそれは美味しかった。
雪に見立てた白い何かは、彼の知っている淡雪では無いようで、生クリームとも違って透明感があり、ふわっとした柔らかさがある。ほんのりアルコールが入っているようで、種類は分からないが高級な酒の香りがした。
芋と栗のペーストもひと手間掛けているらしく元の風味を生かしてなおかつ甘過ぎず香りのみが口に残る。
「おい、ひと口食わせろ！」
「はっ！？子供か、あんた」
「お前さっき俺の白玉１個食ったろうが！」
「おっさん、被保護者といえば実の子も同然じゃないか。そんな横暴な親じゃ将来我が子に嫌われるぞ」
「どんな理屈だ、それは！お前どんだけケチなんだよ」
「美味い物食うのに争いごととか、寒い時代と思わないかね？」
「なに意味の分からん理屈こねて……あ、」
「ご馳走さまでした」
虹也は皿に残った分もヘラに似た竹のスプーンで奇麗にさらうと手を合わせた。
「こんな美味しい物を作れるなんて人って素晴らしいね」
「コウ、手前覚えてろよ」
「おっさん、人間小さいな」
「ニンゲンってなんだ、どうせ悪口だろうけどな」
（人間って言い方もしないのか、でも人は通じるんだよな）
「人間と言うのは俺の育った地方の言葉で胃袋の事だ」
ぬけぬけと言ってコーヒーを啜った。
「くっ、なんか分からんが事件に鍛えられた俺の勘が嘘だと言っている。そもそも意味が通じないだろ！？」

「おお、流石は捜査官、凄い勘だ」
「感情を込めずに称賛するのは止めろ。ったくふてぶてしいと言うか逞しいと言うか、到底自分の居場所を見失った被害者には見えないぞ」
「ふてぶてしくてスイマセンね」
胸を反らし気味に言って見せる虹也に、ふと墨時は真顔になる。
「まあいいさ、安心しとけ。絶対俺がお前の在るべき場所へ帰してやるからさ」
グッと、虹也は言葉に詰まった。
(虚勢も張らせてくれないとか馬鹿すぎ)
虹也にはどうしても叶えたい望みが一つだけあった。
父が身罷って急激に体調を崩した母を手助けするため高校を中退した、言わば社会のレールから脱線した自分を、ずっと影から表から手助けしてくれた友人や後輩達、あの馬鹿な連中にたった一言で良いから「ありがとう」と言いたい。
たったそれだけの望みが世界の運命と引き換えになるなんて、どんな不公平な取引なんだろうと、そう思う。
(どんだけインフレなんだよ、価値観崩壊どころじゃないだろ?有り得ないレベルだろ。いっそ、……いっそ誰かを恨めれば良かったのに)
「おっさんはさ、ハイクラスな馬鹿だよな」
「お前、今わざと外語使ったな。なんてかわいくない野郎だ」
「生憎俺、可愛さで勝負してないからね」
「ナリだけでかい子供だしな」
「あー、なんか凄く高いもんをもう一個食いたくなったかも」
「止めろ!そんなに金使ったらギンに殴られる!勘弁してくれ」
まだ笑える自分に安心しながらも、虹也は自分の行くべき所をまだ定める事が出来ないでいたのだった。

出会いの時は予感など無いものだ

「ええっと、うん、こっちだな」
虹也は手にした地図を自分の立ち位置と照らし合わしてやっと正解らしい道を確認出来てホッとした。
そもそも虹也は学生時代冒険クラブというサークルを立ち上げて、マッピングで実測地図をつくっていたぐらいなので、当然地図読みにも慣れている。
その彼をして迷わせ掛けた墨時の手書き地図は酷いの一言だったのだ。
「店の名前しか合って無いし」
虹也には墨時が捜査官などと言う仕事に従事する人間だという事が信じられなかった。
（勘だ、きっと勘だけでこなしてるに違いない）
虹也の墨時に対する評価は、底の見えない下降線を辿っている。
「ここ、かな？」
店と店を辿り、それで埋まらない部分は人に尋ねて（と言うか、最初から全部人に聞いた方が早かったと思われる）、ようやく見えた建物はやたら印象的な建物だった。
（てか、お堂）
町並みを構成する一般的な建物の形状は楕円や卵を横に寝かせたような物が多かった。普通の立方体のビルに近い物でも、面取りをしたように角が削ってあったりするものが多い。
それに比べて、目前の建物は角角しいというか、六角堂そのものだった。
屋根の棟に当たる部分の端には、鉄製らしき丸いぼんぼりが下げられていて、手毬のような作りのそれは、彩色されていなくとも可愛らしさを醸し出していたが、建物の大きさから考えれば虹也の頭より遥かに大きいはずだ。

「眺めててもしょうがないし、入るか」
緩いスロープになっている入口までの道は背の高い木が両側に植わっていて、夏場は木陰を作って涼をもたらしそうだ。
影が落ちる道もむき出しの土ではなく、かと言ってコンクリートやアスファルトともどこか趣きが違う、昨今の流行りの廃棄ガラス等を素材にしたリサイクルブロックに似て無くも無いが、やはり少し違う感じがする。
そんな風にぼーっと周りを眺めながら入口に着くと、扉の所に黒い円盤が設置してあり、何か書いてあった。
「えーと、認証紋を翳してください？……あ、初めてのご利用の方は国民証の紋影の登録をお願いします。って、うん、分からんな」
初手の躓きに、思わず唸り声を上げる。
「くっ、こんな事なら意地を張らずにおっさんを頼るべきだったか。……いや、いても役に立たない可能性も高いし」
何気に酷い事を呟きながらその円盤とにらめっこをしていると、人が近付いて来ている気配がした。
相手が図書処の利用者と判断して、自分が邪魔になると感じた虹也は、慌ててそこから退くと、あわよくば操作を参考にしようと手元が見える位置を推し量る。と、
「なんか困ってんじゃね？」
後方からやって来た相手が声を掛けて来た。
振り向いて見ると、相手は虹也と同じか少し年上ぐらいの青年だ。
「え？あの？」
当然ながら虹也のこの世界における知り合いは少ない。そして、相手はどう見ても知ってる顔では無かった。
一見した所、青年は虹也と同じ種族の人（地球世界的な人間）に見えた。
背が高く、スポーツマンタイプのがっちりした体格で、見下ろされているのが虹也としては本能的に気に触る。まぁこれは虹也の僻みに近いので関係は無いが。

「あ、わりぃ。なんか困ってるっぽかったからさ、余計なお世話しちまったかな？」
照れたように笑うとタレ目もあって愛嬌がある。
虹也はその様子に、福祉活動をやっている内に可愛い彼女をちゃっかりゲットした、エロゲー好きの後輩を思い出した。
なんとなく人当たりが良いというか、刺の無い雰囲気が似ているのだ。
だからではないが、虹也はなんとなく警戒を解いて首肯した。
「ここの登録手続きがよく分からなくて」
虹也の示す円盤に、相手は軽く頷く。
「最近は何でもかんでも最新鋭の術紋機だもんな。慣れて無い人には辛いよ」
その青年は、円盤上の認識部位を示して、そこにカードを立ち上げの初期画面状態のまま翳すようにと説明した。
その通りにすると、円盤上に光が点り、カラーの光がグルグル回りながら徐々に色を変えて行く。
それは赤から青というグラデーションになっていて、赤が危険で青が安全という色の刷り込みがある虹也には分かり易い。
やがて書き込みが終わったのか空間に文字が現れる。
『登録が完了しました。もう一度端末に認識カードを翳すと即日のご利用を受領いたします』
ここまでくれば虹也にもやりようは分かる。
なのでそこにもう一度国民証個人カードを翳す前に、親切に教えてくれた相手に礼を言う事にした。
「後は大丈夫です。ありがとうございました」
頭を下げると、相手は慌てて手を振ってそれを押し止めた。
「あ、いや、良いんだ。俺は調整官目指してててさ、問題が有りそうだと思うと勝手に首を突っ込んじまうんだ、割と迷惑がられたりするんだけど、役に立てたんなら俺の方こそ嬉しいよ」
調整官というのが何かは分からないが、どうやら他人に積極的に

お節介を焼くのが当たり前な仕事らしい。益々介護の仕事を選んだ後輩に似ている。
「とにかく助かった。じゃあ……」
「おにい！こんな所にいたっ！」
挨拶を切り上げて図書処に入ろうとした所にキーの高い、いかにも少女らしい声が響いた。
声の方に目をやると、ショートボブの亜麻色の髪でいかにも活動的な服装に身を包んだ少女が立っている。声の印象よりは若干育っているようだ。ちゃんとあるべき所にそれなりのボリュームがあった。
どうでも良いが、虹也にとっては割と好みのボディラインだったりする。
（あ～いやいや）
つい、健全な青少年の目線になるのを自制して、虹也は軽く頭を下げた。呼び掛けからして親切にしてもらった相手の関係者だろう。もしかすると自分のせいで待ちぼうけを食わせたのかもしれない。
相手も虹也に気付いたのだろう。「あ」という感じに口を開けると、軽く会釈して少し足取りを緩めて近寄って来た。
「お友達？」
傍らの青年に問うような視線を向ける。
問われた方は苦笑いのような顔になると、重たげに口を開いた。
「いや、あー、困ってたっぽかったからさ」
「呆れた！また親切の押し売り？ついこないだも警羅の人に注意されたばかりじゃない！人には保守意識があるんだから求められてもいないのに他人の領域に踏み込むなって」
ものすごく怒られている。
虹也は人と人との距離が近い地方都市の育ちなので、誰かが明らかに困っていたらわらわらと人が寄って来て「どうした？どうした？」という騒ぎになるのが当たり前だった。なので違和感を感じなかったが、彼の行為はここでは咎められるべき不躾さだったらしい。

そういえば電車（気車）の中でもかっちりとパーソナルスペースが確保されていたなと、虹也は思い出した。
この世界に色々な種族が混在する以上は、そういう事はむしろ当然の配慮なのかもしれない。
「そういう決め付けが良くないんだよ、そういう当たらず触らずの風潮が相互理解を妨げてるんだぞ」
「はっ、お兄は理屈だけは立派なんだから」
少女は自分の兄であろう相手の弁明を歯牙にも掛けず、改めて虹也に向き直った。
「えっと、ごめんなさい変な足止めしちゃって。あの、魔術師の方ですよね？」
「え？どうして？」
虹也は、咄嗟に慣れない眼鏡に延び掛けた手を自制して止める。
そう、彼は今、眼鏡を装備していた。
別に虹也は目が悪い訳では無い。
これは捜査部からの、更に厳密に言えば内藤医師からの提供だった。
彼の言うにはノーブルリングという特長は決して市井の民には出ない特殊なものなのだそうだ。
特別な血族である氏族の、その中でも特別な交配によって生み出される存在なのだという。
交配などという単語が出て来ると、虹也はまるで自分が血統書付きの家畜になったような気分になったが、内藤はそういう感情的な部分に頓着せず、淡々と事実とそれが意味する事、そこから予想される弊害を防ぐには何が必要かを説いた。
氏族という存在は、そもそも気軽に出歩くような事はせず、その中でもノーブルリング持ちともなるとほぼ軟禁状態になっているという事らしい。
そんなのがホイホイ出歩いていたらトラブルを呼び込むのは間違ない。

という事で、この眼鏡を貸し出されたのである。
そもそもこの眼鏡は、本来は潜入捜査等の際に、魔術師タイプの捜査員のリングの光を抑える為の物なのだが、内藤が改造して色をも変えられるようにしたのである。
（ドラえもんとかコナンの博士かよ！）という虹也の一人ツッコミはともかくとして、この眼鏡を掛けていれば特別な氏族にはとりあえず見えないはずだった。
「氏族関係の人……に見えたからなんだけど、もしかして外見は先祖返りなだけ？」
「おい、アオッパナ、お前の方こそ失礼だろ」
「アオッパナじゃないわよ！あ・た・しの名前は青華（せいか）です。……あ、っとごめんなさい！つい気になって、魔術とか興味があるからそれで、ほんと、ごめんなさい」
青華という名前らしい少女は、青年に食って掛かると、直ぐに向き直って頭を下げる。
気を悪くするとか以前に、なんか面白い兄妹だな、というのが虹也の正直な感想だった。

「魔眼？」
「そう……あ、でも石化とか魅了じゃないの、魔気が見えるだけで」
「お前、その言い方はそういう力を持った人に失礼だろ！」
「う、ごめんなさい」
相変わらず兄妹漫才みたいな会話を繰り広げる二人を前に、虹也は噴き出した。
「わ、笑わなくても」
赤くなった顔を膨らませて、子供っぽく抗議する彼女はとても可愛らしい。
互いに自己紹介し合って年齢も聞いたが、１８歳という、年齢的には虹也とそう変わらないのに、その無邪気さは虹也からすれば羨

ましい限りであった。
結局彼らは、いつまでも入り口で話している訳にもいかず、それでもなんとなくそのまま別れるのも惜しかったので、そのまま図書処の中にある喫茶処に移動したのである。
この喫茶処というのはお茶を飲んだり、人によってはタバコを吹かせながら軽く読書が出来る場所で、なんと座敷仕様で皆が思い思いに場所を決め、端末（国民カードが入り口の操作で接続されている）でお茶と本の注文が出来るという、虹也の知る図書館とは全く違う感覚の場所だ。
他にも学生や研究者が主に使う学習処という場所があって、そちらは静かに真剣に学習する人の為の場所らしい。
「一応ね、先に言っておこうと思って。嫌がる人もいるし」
青華は言葉に僅かな淀みを見せたが、それは虹也を気遣うようであり、自身を卑下するものでは無かった。

この兄妹は、兄が内家誠志（うちいえさとし）、妹が青華（せいか）といい、それぞれ２０歳と１８歳で、二人ともまだ学生だと言っていた。
この世界の学校制度を知らない虹也には細かい部分は分からないが、二十歳を迎えている誠志がまだ学校へ通っているという事は、やはりそれなりにゆとりのある世界なのだろう。
一人を育てるのに時間を掛けられる社会は基本的に豊かなはずだ。
「それでね、その魔眼で見えた虹也さんの気紋が凄く綺麗だったから、ちょっと感動しちゃって興味があるっていうか……」
「おいおい、兄貴の前で男を引っ掛けるとか、とんだ恐るべき女郎蜘蛛だな」
「何それ！あたし男狂いとかじゃないわよ！バカ！彼氏出来ても長続きした事無いんだからね！」
「は、そんな事を大声で自慢するような娘に育てた覚えは無かったのにな」
「ぎゃーっ！」

自分が何を叫んだかに気付いて、慌てて周囲を見回す青華。
虹也も思わず笑いの発作に襲われてしまった。
周囲から押し殺したような笑い声が聞こえるのも、虹也の空耳ではないだろう。
「ああ、虹也さんも笑ってる」
ガーンと、ショックを受けたように畳に突っ伏すが、その拍子に目の前で足を崩されてしまい、大胆に顕になった太ももが気になった虹也は、思わず目を彷徨わせる。
何しろ、畳の上にあるのはお茶一式を乗せたお膳のみで、足を隠す机などという物は存在しないのだ。
「気紋って何？」
とりあえず雰囲気を変える為に、虹也は話題を振ってみた。実際、気になる単語ではある。
青華はガバッと起き上がると、目を輝かせて説明を始めた。
「気紋っていうのはね、魔気とかが何かに作用する時に描く軌道の事なの」
「へぇ」
さっぱり分からないなと、虹也は頷いた。
「その説明で分かる奴がいたらすげぇよ」
誠志がいっそ関心したように呟く。
「もう、お兄は頭が悪いから分からないのよ！頭の中まで筋肉なんだから！」
（つまりは脳筋か、でも、そんな感じには見えなかったけどな）
虹也はテキパキと説明してくれた誠志の様子を思い出し、首を捻った。
「ええっと、ごめん、俺も実は良く分からない」
仕方ないので正直に告白する。
「ほれ見ろ」
誠志は何か勝ち誇ったように胸を張ったが、虹也もそうだが、自慢するような話では無いだろう。

「ああ、もう！だからほら、磁界ってあるじゃない？あれに似た感じ？アルケミーが魔気を吸収してエネルギーを変換してるのはよく知られてるけど、それとは別に存在に対する流れがあるの。それが気紋。それでね、ちょっと気になる事があるんだけど」
彼女は少し言い難そうに虹也を見た。
色々と後ろめたいというか、自身も良く分からない部分で隠し事が多い虹也はちょっと引き気味に応じる。
「えっと、なに？」
「その、胸の所がね、気紋が変に歪んでるの。その、何か病気かもって」
病気という言葉にぎょっとしたが、”胸の所”に思い当たってにこりと笑った。
「あ、ああ、これ、お守りが入ってるんだよ。ほら胸ポケットに。なんだっけ、その、魔気の作用を阻害するお守り？」
疑問形なのは情けないが、魔気などという存在の無い世界から来たのだから仕方ない。
「えっ！そうなんだ！ごめんなさい」
虹也が言葉を聞いて、青華がまたも凄い勢いで謝った。
なぜか横で誠志まで頭を下げる。
「わりぃ、こいつほんとに考えなしでさ、そんなつもりは無かったと思うんだ」
「あ、え？ええっと、なんで謝ってるんだ？」
虹也はまたしても自分の常識の及ばない部分で話が進んでる感覚に戸惑った。余りにも困惑する事ばかりなので、逆にそれに慣れ始めてるのが怖い。
「え？ほら、それって守護なんだろ？やっぱ虹也って氏族で守護の印を身に付けてるんじゃねぇの？……っと、ないのですか？」
何故かヒソヒソ声で、無茶苦茶な敬語っぽい言葉使いに無理にしようとして失敗している。それはそれで誠志の庶民感覚の表れを示していて微笑ましさを感じるが、虹也は慌ててその誤解を訂正に掛

かった。
「いや、ほんと、違うから。俺、術紋とかの光を見ると意識が遠くなる体質みたいでさ、それを防ぐ為にお医者さんに貰ったんだ」
「オイシャサン？」
「あ、ああ、ええっと、施術……師？」
「あ、もしかして魔光酔いってやつ？」
青華が納得したようにそう言った。
あの医者は確か力場酔いって言ってたなと思いながらも、虹也は曖昧に頷く。
「確かそうだったかな」
「お前、自分の事なのにあやふやだな」
「あはは、なんか実感無くてさ」
話の間に本が届いた。
お茶もそうだったが、底部が浮いている不思議なカートで係員が運んで来るのだ。その様子は、虹也には列車の車内販売を連想させた。
「ところでさ、読書する場所でこんなに騒いで良いのかな？」
虹也の常識では図書館は騒いだら怒られる場所だった。
それから考えると、いくら喫茶しながら読書をするという趣旨の場所だとしても、彼等は騒ぎすぎだ。
「ああ、図書処は初めてだっけ？此所は書物に親しむ為の場所だから本を破損したりしなければ賑やかなのは構わないんだ。ほらあそことか賑やかだろ？」
言われてそちらを見れば子供達に本の読み聞かせを行なっているらしき小集団がいた。
内容に対してリアクションしているのか、確かに子供達がエキサイトしている様子が伺える。
と、そこで虹也は違和感に気付いた。
この距離ならもっと子供達の声が騒がしく聞こえるはずだが、かなり遠くでの騒ぎ程度にしか聞こえないのだ。

「音があんまり届かないね？」
「そうそう、なんかうるさくない工夫がしてあるんだぜ」
そう答えた誠志の頭を絶妙のタイミングで青華が殴る。
「ってぇ！なんだよ！」
「そんないい加減な説明無いでしょ、馬鹿じゃないの？ううん、紛れも無い馬鹿よね、確定的馬鹿」
「てめえ、いい加減にしないとお前の恥ずかしい話をぶちまけるぞ、アオッパナ……ギッ、」
見てそうと分かるぐらい加減の無いエルボーが腹に決まっていた。
いわゆるみぞおちと言われる急所である。
鍛えていそうな誠志なのでそこまでダメージは大きく無いかもしれないが、虹也ならしばらく立ち上がれない自信がある恐るべき攻撃だ。
「ごめんなさいね、私がちゃんと説明するわ。この畳に描かれている模様があるでしょう？」
青華は部屋の全体の床を示した。
言われてみれば畳は全体で大きな円と、様々な模様を描いている。
一片が一畳ではなく正方形になっている畳が、まるでタイル画のように組合わさっているのだ。
「これは空気の震動を抑える術式なの。術紋というよりは陣の様式なんだけど、単純な効果を狙うなら効率は案外悪くないのよ」
立て板に水とばかりに生き生きと語る少女に、虹也は思わず感嘆の声を上げていた。
彼女の兄はもちろん、墨時に至ってはその足元に平伏さなければならない程の知識レベルだろう。
魔術等という物に対する知識など無いに等しい虹也にすら、そのレベルの差がはっきりと分かった。
「でも、空気の振動を抑えるだけだから、大きな声とかは通っちゃうんだけどね」
先ほどの顛末を思い出したのか、きまり悪げに付け加える。

「詳しいんだね」
感心したそのままの気持ちを込めた言葉を虹也が贈ると、途端に年相応の少女の顔になって照れてみせた。
「うん、実は術紋師を目指してるんだ」
ツキリとした胸の痛みに襲われて、虹也は詰まった喉を無理やり通すようにツバを飲み込む。
「そう、なんだ。俺の姉さんも術紋師だったんだよ」
虹也は無理やりに笑顔を作った。いつまでも過去の痛みに支配されているのは彼の好む所ではないし、何より当の姉への侮辱ではないか？と感じはじめていたのである。
「え？本当？どんな文様を得意とするの？良かったらお姉さんに紹介してもらえないかな？」
テンションの上がる青華に押されながら、虹也は苦笑いをした。
「ごめん、俺が小さい頃に亡くなっちゃってさ」
頭の奥が警告を発するようにガンガンと痛み、虹也は気を抜くと意識が遠くなりそうになるのをぐっと堪えた。
その一方で青華が目を見開いているのを見て、しまったなとも思う。もう少し直接的じゃない言い方をするべきだったのではないかと、なんとなく罪悪感を感じたのだ。
「ごめんなさい、あたし」
案の定、青華は彼女の責任でもない事に対して謝りだしてしまった。
「おいおい、頭の下げ合いはやめろよ、それじゃあ亡くなったお姉さんが悪いことしたみたいだろ？亡くなった人が大切な人なら思い出を語るのはその人を生かし続ける事なんだぜ？だからさ、良かったら話を聞かせてやってくれないか？こいつも結構真剣に術紋を勉強してるんだ」
二人のそんな雰囲気を救ったのは誠志だ。まだ腹をさすっているのはややカッコ悪いが、彼の言葉にはその場の二人だけでなく、虹也の中の姉の思い出をも包むような暖かさがあった。

虹也は彼の言葉にはっとする思いで顔を上げた。
頭痛がすうっと収まるのを感じる。
（思い出を話す事は亡くなった大事な人を生かす事、か）
考えもしなかった事だったが、その言葉は何故かストンと胸に収まった。
「うん、俺もそんなに覚えてないけど、良かったら色々聞いて欲しい。俺は子供だったから大して覚えてないけど、姉さんが凄い術紋使いだったのは確かだと思うんだ」
何しろ彼女は、幼い虹也をここから見れば異世界である、あの”故郷”に飛ばしたのだ。
捜査部の部長によれば”決して通じるはずのない”ゲートを開けたのである。
「そっか、うん、そうだね、色々おはなしを聞かせてください」
ぺこりと、勢い良く頭を下げる青華に今度は温かさを含んだ笑みを浮かべて、虹也は「よろしく」と返した。
遠い異郷の地だろうと、人と人には縁（えにし）という物があるらしい。
出会いというものの不思議さを、虹也は深く感じていた。

図書館（図書処）は本を読む処なのです。

「ところで、二人は何か他に用事があったんじゃないか？」
虹也は改めてそう二人に確認した。
「なんで？」
それへ青華が素で不思議そうに返す。きょとんとした顔は可愛らしいが、虹也としてはそのリアクションは予想外だった。
（あれ？）
虹也は少し焦る。何か自然な流れで二人はここまで同行してくれたが、このまま最初から一緒に来る事が決まっていたかのように甘えていていいものか？と少し悩んだ挙句切り出したのは無駄な葛藤だったのかと、自分が間抜けに感じられたのだ。
「ほら、二人は待ち合わせしてたみたいじゃないか。何か用事があったからなんじゃないかと思ってさ」
気を取り直して自分の懸念をちゃんと説明してみる。
「ああ」
納得したように頷くと、青華は、どこか人の悪い顔でにやりとした。
「ふ、甘いな君。そこまで推理したんならもう一歩踏み込むべきだったね」
「どんな架人だよ！」
青華のいかにも芝居掛かった物言いに、誠志がチョップでツッコミを入れる。
虹也は、ツッコミは世界が違っても共通なんだなと感心すると共に、“カジン”ってなんだろうという疑問を抱いたが、とりあえず話しの腰を折るのもなんなので流しておいた。
「先生！至らぬこの俺にご指導お願いします！」
せっかくの青華のノリなので、虹也もノリでそう返してみる。
やはり世界は違っても人類のノリは共通だったらしい。青華は僅

かに口角を上げて「ふ、」と吐息混じりの声を零し、
「私たちの目的も図書処だったのですよ、お兄さん」
ニヤリと笑って見せた。
もうちょっともったいぶった方が魅せどころもあったけど、良いノリだな、と、虹也は感心する。
(あー、でもよく考えたらその答えは当然か。あの成り行きから考えて、待ち合わせここの前だったんだろうから)
虹也はそう思い至り、自分の考えが足りなかったのを反省した。しかし、それはそれとして、彼等が虹也の為に時間を割いているのもまた事実である。
「でも、俺が一緒だと用事の邪魔じゃないか？」
「いやいや、むしろいてくれると助かる。うちの暴力妹は二人切りだと歯止めがないからな。こいつは勉強を叩き込むって言葉をそのまんま、叩いて覚えさせると理解している恐怖の妹なんだ」
「恐怖の妹って何よ！課題を消化しきれなくって放院寸前で泣き付いて来たくせに何を偉そうにぶってるのよ、お兄って馬鹿じゃないの？ああ、そうよね、馬鹿だから課題が出来ないんだよね」
矢継ぎ早の言葉による攻撃を受けて、誠志の精神は端から見ても明らかに深く削られていた。とりあえず目に映る現象だけで言うと、真っ青になって涙目になっている。このメンバーの中で一番年長でもう二十歳だというのに兄の威厳も年長の威厳も消え去っていた。
あまりの惨状に、虹也は心を決めた。ここは下手に真正面からの罵り合いに発展させるより、いっそこのままノリで流すべきであろう、と。
虹也は気持ちの切り替えを兼ねて一つ息を吸い、年齢を重ねて積み上げてきた色々な物を一時的に放り投げた。
「待ってくれ！もうこいつは限界だ！やるなら俺をやれ！」
「虹也くん……」
掛かった。青華の瞳は潤み、芝居掛かったポーズで両手で胸を押さえて虹也をひたと見つめる。虹也の思った通り、この兄妹はやた

らノリが良いらしかった。
「くっ、虹也お前の友情は……ってお前等！俺を放置して見つめ合うな！」
誠志までなにやら盛り上がっている。
悲しい程短く、そして決して先に希望が無かったゆえに長かった、約一年間の、全てから切り離され母の看病のみに費やした日々。その反動なのか、虹也はなんとなくこういうノリに餓えていたようだ。
もう学生は卒業したとはいえ、社会人には成り切れず中途半端に階段に留まり続けていた彼は、無理に大人を演じていた日々を払拭するかのように、いっそ気持ちが良い程、バカげた小芝居に興じた。

数分後、三人はそれぞれ何かをやり切った表情で畳に横たわった。
こういうノリは終わった後異様に疲れるのはなぜなのだろうと、どうでも良い事を虹也は考える。
「ふ、まさか１０年来の友のように分かり合える相手と出会えるとはな」
誠志が、まだ物足りなかったのかまたネタを投げて来た。
「ああ、」
「本当ね」
とりあえず虹也はそんな誠志を一瞥もせずに青華と見詰め合う。青華も同様に兄をスルーした。
「だから、俺を仲間外れにしないで、寂しいからさ」
ちえい！という掛け声と共に、誠志は転がって移動すると、見つめ合う虹也と青華の間に割り込む。
そしていじけたように俯せのまま泣きまねをはじめた。
それは、ちょっとガタイの良い、二十歳も越えた男がやると、どこまでも気持ち悪い物でしかない。
「それじゃあ、そろそろ調べ物をしようか？」
「そうですね、過ぎ行く時は砂金のごとしと言いますし」

「うっ、ううっ、」
「ほら、お兄、遊びの時間は終わり。……え？やだ、本気で泣いてんの？ばっかみたい」
「あ―ごめん、悪乗りし過ぎたごめん」
「だめよ、虹也さん、甘やかしちゃ」
「魔物や、ここに魔物がいる！」
「ほらほら、ふざけてないで、課題があるんだろ？」
虹也の言に、誠志はガクリと脱力した。
「俺か？俺が怒られんの？」
思わずといった感じで誠志が顔を上げると、慈愛に満ちた（ように見える）二組のまなざしが彼を優しく見つめている。
「お前ら……俺を受け入れてくれるのか？」
二人は優しい笑みを浮かべたまま頷いた。
「じゃねえよ！」
思わず叫んだ誠志を、二人は恥ずかしそうにちらりと見た。
「お兄、引き際をわきまえない喜劇は恥ずかしいもんだよ」
「注目の的だよ」
言われてみればなんとなく周囲の視線が痛いのに気付き、誠志は口をつぐんで本を手にした。細かい部分は聞こえなくとも小芝居は見えるのだから仕方ない。
「さ、さて課題を片付けるか」
「誠志、それ俺の」
「うお、すまん」
虹也の指摘に、誠志は改めて自分の掴んだ本のタイトルを見た。
「えっと、『伝承と交流の古代史』？渋いな、お前も研究課題？」
「いや、好奇心かな？」
「好奇心で勉強すんのかよ、恐ろしいな」
「何言ってるのよ、見習いなさいよ、もう」
青華が呆れたように彼に自分達の本を手渡した。
それこそ好奇心に駆られて、虹也はそのタイトルに目を走らせる。

その本の背表紙には、『世界の種族とその生活』と恐らく書いてあった（種族という字が凄い事になっていたが読めなくは無かった）。

（なるほど、調整官っていうのは読んで字のごとく種族間の調整をする仕事なのかな？）

一見するとガタイが良くて気の良いだけの、どこか頼りないような男だが、誠志は見も知らぬ虹也が困っていそうだからと、そういう行為が嫌われているらしいのに、わざわざ手を差し伸べてくれた。

彼の気持ちはきっと本物なのだろう。もちろん、学校の課題なのだから目指しているものに直結していない可能性もあるが、彼の年齢からすれば勉強も専門的なものになっている可能性が高い。

「じゃ、そろそろ調べ物に集中するか」

「だな」

「なにか分からない事があったら聞いてね。これでももう研究生なんだよ」

青華がにっこり笑ってそう虹也に言ってくれる。

「なんだ、私は頭が良いですよってか？お前嫌味だぞ、それ」

そんな、青華の元気の良い表明に誠志が水を差した。

確かに青華は虹也より年下だし、彼女の言う研究生が何かは虹也には分からないが、おそらく優秀だという証なのだろう。それを前面に出す言い方は、下手すると生意気に聞こえかねない。

だが、基本は親切心から出た言葉だ。兄の指摘に途端にヘコんだ少女が気の毒で、虹也は助け船を出したくなり、彼女の気持ちがありがたいのだと言える自分の立場を伝える事にした。

「実は俺、ずっとここことは全然違う場所で暮らしていたんだ。だから分からない事たらけなんで色々と教えて貰えるとほんとに助かるよ」

虹也の言に二人は驚いたようにその顔を見た。

「どこで暮らしてたんだ？ある程度の国の文化なら分かるぞ」

誠志の真摯な申し出に、虹也は本質のみを除いた事情を説明する

事にした。
　ほんの小さい頃、火事で逃げ場を失って、姉が弟の自分だけを術紋でどこかに飛ばしたらしい事。その時記憶を失って親切な老夫婦に拾われて育てられた事。
　その両親を亡くして暫くして最近記憶が断片的に戻り、そうしたらこの地へまた飛ばされて来てしまった事。
　虹也の説明に兄妹はしばしの沈黙をもって応じた。
「虹也さん、私、私……。ごめんなさい、私に出来る事ならなんでも協力させていただきます！」
「そうだぜ！分からない事かあれば、この未来の調整官に任せとけ！」
　二人共なにか目に光るものがある。
（うわぁ）
　一方、当事者の虹也は若干引いていた。
「いや、そんな熱血されるほど気の毒な身の上でもないし、とにかく色々と知らない所で迷惑掛けるかもしれないけど、そういう時は気を使わずに常識的な事は教えて欲しいんだ」
「うんうん、お兄さんは感動したぞ！ドンと任せてくれ！」
「あはは」
　本当に理解しているのか疑問に思いながら、虹也は渇いた笑いを零すしかなかった。
「それにしても、その記憶が戻った途端に飛ばされたっていうのが引っ掛かるわね。最初のはお姉さんがゲートを開いたとして、そっちはお姉さんでは有り得ない訳だから」
　青華が難しい顔で言った。
「有り得ないんだ？」
　自身はそれも姉の仕掛けだろうと考えていた虹也は、少し意外そうに問い返す。
「うん、詳しくは専門的な話になるから省くけど、魔気の性質上そういう時限式とか時間を置いての連動発動って無理なのよ。だから

ありそうな事としてはその暮らしてた場所自体に条件結界みたいな物があった。という場合ね」
「条件結界……」
思わぬ所に元の世界へと続くヒントを見つけて、虹也はこちらに来てから得た情報の一つを思い出した。
部長さんは言っていた、『月夜見様が世界を分けた』と。
それが条件結界とかいう物のせいなら、もしかして姉はそれを利用したのではないだろうか？そしてもしそうなら、姉はその世界を分ける結界という物を理解していた事になる。
それさえ分かれば、世界を隔てたままであっても、あの場所へ戻る方法があるのかもしれない。
（一度は諦め掛けたんだ。大丈夫、慌てる必要は無い）
虹也はその考えを希望と共に胸に大事にしまった。
「でも、人の記憶に反応するような繊細な術がある訳ないか。う～ん、謎だね」
誠志はそんな妹を呆れたように見ると、虹也に向き直る。
「そんな事より、当面の身の振り方の方が大事だろう。仕事とか国の規（のり）とか、もしかしてそれを調べにここに来たのか？」
「誠志は鋭いな。まあ、大体そうなんだ」
「そりゃ大変だな。んでも、国民証があるって事は移民扱いで受け入れてもらったのか？」
「うん、捜査官の人が仮の保護者になってくれてるんだ」
「へええ！治安部隊預かりなんだ！語り事みたいだね！」
青華が目を輝かせて言うのへ、誠志が拳骨を落とす。
「こら、人が大変な事を物語と混同して茶化しちゃ駄目だろうが！」
「まあまあ、良いから。ところでかたりごとっていうのは？」
「エへへごめんなさい。あのね、語り事って映像配信のお芝居みたいなの」
「ああ、ドラマの事か」
「虹也ん所ではドラマっていってたの？外苑の言葉っぽいね」

「ブリテン辺りの言葉で、波乱の出来事の事をドラマティックって言ったりするから、そこらの流れじゃないかな？」
「あーそれじゃあ、虹也が育ったのは外苑部にある隠れ里とかかもしれないね。あっちは私達みたいなチュウカン族は暮らし難そうだもんね、どっかにこっそり安住の地を求めても仕方ないかも」
「チュウカン族？」
「お？まさか自分の種族を知らないとか？」
「ああ、そもそも自分の事なんか、にんげ……いや、人としか考えた事ないし」
「そっか、単一種族しかいなかったらそうなるよな。うちだってごく近年までは単一民族国家だったから自分達の事を龍護の民としか思ってなかったしなぁ。うんうん、ますます隠れ里っぽいな」
誠志はウンウンと一人頷くと、種族について説明を始めた。
「俺等が大別して大地の民だって事は知ってるか？」
「ああ、まあそれはなんとか」
「大地の民は三属あって、巨人族、小人族、チュウカン族がそれだ」
「巨人と小人は分かるけどチュウカンってまさかそのまま中間？」
誠志は課題の勉強用に持って来たのであろうノートに文字を書いて見せた。ちなみにノートは真っ白ではなくいわゆる生成りっぽい色だ。
その文字は、やはり偏とかがぐるっと巻いたり曲がったりしてはいたが、なんと“仲間”という文字だった。
「その通り、要するに巨人と小人の間って事だな。種族名って大体がこんないい加減さなんだよな。判りやすさ重視なんだろうけどさ、大概いい加減だよな。で、まぁお察しの通り、この仲間族（ちゅうかん）ってのが俺達だ。分かり易いだろ？」
ハハハと笑う誠志を見て、なるほどと虹也は思った。確かに判りやすいし意味は通る。
虹也からしてみれば違和感が半端無いが、それは彼がそういう意味を考えた事も無いからだ。よく考えたら“人間”だって単純な言

葉だ。
「えっと、これって“なかま”とも読むよね？」
とりあえず引っ掛かった部分を確認しておく。なまじ言葉がほぼ共通である分、用法を間違うとトラブルの元になる可能性が高いのだ。
「ああ、そうだ。あれって元々は仲間族（ちゅうかん）の結束が固いのを、とある内奥の大国の革命軍とかが旗印に掲げて、『仲間（ちゅうかん）の志』って感じで使ってたらしいんだけど、その意味を敵から隠す目的で読みを変えていたのがそのまま残ったって言葉だからな」
「そうなんだ……」
ああ違うんだ。と、虹也は胸に呟く。同じ言葉でもその歴史が違う。それは、同じだからこそ、虹也の意識に強く響いた。
自分はあまりにも簡単に考えていたのかもしれないと、そう思える。流されるだけの今の自分では、いつかきっととんでもない失敗をしてしまうだろう。
そう、民族学者だった父は言っていた。
『先入観ってのはな、つまりは相手を本当に理解しようとしてないから持ってしまうものなんだよ。どんな相手にも真摯であれば、それが相手を知り、己を知るって事になるんだぞ』と。
父はいつだって彼の指標だった。虹也の胸の中心には常に両親の教えがある。
「俺、こんな感じで知らない事ばっかりだからさ、二人に頼みたい事があるんだ」
言って、思いっきり頭を下げる。
「良かったら、友達になってくれないかな？」
虹也のいきなりの言葉に、兄妹はしばし唖然とした。
そして、おもむろに笑い出す。
「とっくに友達だろ？いきなり何言い出すかと思ってびっくりしたぞ」
「お兄はこんなだけど、いい奴ではあるんだ。あたしも、その、自

分で言うのもなんだけど、結構良い奴だと思ってる。だから、良かったら愛想つかさないで付き合ってやってね」

三人は目を合わせると、誰からともなく手を重ねた。

人の持つ暖かさがお互いの手に染み透り、一人では叶えられない温もりを与え合う。

そこに友達がいる。それがその証だった。

隠されざる歴史

「さて、これをどう見るか」
東山が口にした途端に交信機の向こうの部下から分かり易い不平の声が漏れた。
「どうもこうも怪しんでくださいと言ってるような要請じゃないですか」
東山は部下の気色ばんだ顔をありありと思い浮かべながら溜め息を漏らす。
山中墨時という男は能力的には問題のない優秀な捜査官なのだが、いかんせん被害者に親身に成り過ぎるきらいがある。
能力的には準六位くらいになっていてもおかしくないのに一向に位階が上がらないのは手柄と同時に問題を起こしているからだ。
「これは本部の要請だし、そこを疑えば自分の拠って立つ場所を失うぞ」
「通信で込み入った話も出来ませんから戻ります」
キンッと、一方的に切られた事を示すハウリング（自由放射）の反射音が響き、行き場を無くした場が拡散する。
「困ったやつだ」
「確かにうっとおしい男ですが正義を堂々と叫ぶ事が出来る軍人は貴重ですね。私などは恥ずかしくてとても真似出来ません」
「内藤技官、皮肉は本人に頼みます」
「皮肉等ととんでもない。私は彼を評価しているのですよ」
「本人が聞いたら地団太を踏んで喜ぶでしょうな」
東山は自らの肉付き豊かな顎を撫でた。これは彼の困った時の無意識の癖で、たっぷりとした脂肪の感触で荒れた気持ちを癒しているのだ。
「しかし、彼の言う通り、明確におかしい通達ではありますね、これは」

その力を抜いた頃合を狙ったように内藤があっさりとそう言ってみせる。
「だが、それをわざと見せると言う事は、むしろ企みの無い証とも言えるぞ」
「それはあの単純馬鹿に理解しろというのは難しいでしょうな」
やれやれと、東山は再びの溜め息を吐く。
「頭で分かっても感情で納得しないのがあいつだろう。本当に単純だったならどんなに良かったか」
「まあ、本当に馬鹿なら捜査部に配属されたりはしませんよ」
山中とは逆に、何事も素直には解釈しない男の言葉に、巨人族の血筋である東山の、無駄に重々しい溜め息がまたもや部門室に響いたのだった。

調べた事実を一つ一つ飲み込みながら虹也は溜め息を吐いた。
予想はしていたが、この世界における彼の故郷の扱いはある意味植民地以下であった。
古くからの伝承にもそれらしい名がある通り、行き来自体は太古の昔からあったらしい。常設の接続箇所が世界に数箇所あり、当初は同じ世界の中の魔気が異常に希薄な地域という認識だったようだ。
その頃から一種の極地、辺境扱いではあったが、まだそれほどの差別意識は無く、それなりの交流の痕跡がある。
だが、測量技術が進み、魔法研究が進み、地図が描かれ、ゲート魔法が発見されると、そこが地図に無い場所、異世界である事に気付く者が現れた。そして、ゲートの特性を利用して、開閉が一方的に行える事が判明すると、後は容易く互いの立場は変わってしまった。
簡単に言うと、自らの世界に必要無いと思うモノを捨てる為の、体のいいゴミ箱にしたのである。

重犯罪者や思想犯、扱いが面倒な者を異世界に放り込んで蓋をしたのだ。
魔気の無い世界ではこちらの世界の者はゆっくりと枯れ果て数年で自然に死ぬだろう。当初彼等はそう考えていた。
魔気が身体の維持に必要な要素である事は既に一般的であったので、彼等がそう考えても仕方が無かったが、現実は違った。
その異なる世界に放り込まれた犯罪者達は生き延びたのだ。
しかも現地人相手や同じ境遇の者同士で子孫すら作った者までいたのである。
慌てたのは時の権力者達だ。下手をすると異世界は反抗勢力の拠点となってしまう。いついかなる時に、ゲートを遡って開く術を見出し、反抗の狼煙を上げられるか分からないと考えたのだ。
彼等は一計を案じた。自らを偉大なる存在だとして、罪人達を悪しき魔物と呼び、現地人を使って討伐させたのである。
実際に、捨てられた者達の多くは、条件付きではあるが異世界でも使えた特殊能力を使って、現地で暴虐な行いを働いていたので、話の通りは早かった。
だが、それは実質的な支配である。不思議な力を操るこちらの世界の者を神の一族と崇めた者達による代理戦争。それにより少なくない犠牲が異界の地に満ちる。
虹也自身が学んだ歴史と照らし合わせると、いくつか符号する出来事に思い至る。
宗教戦争や魔女狩り、日本であれば鬼と呼ばれる者達との戦い。
そして、世界各地に残る異形の怪物の伝説がこの廃棄された犯罪者達だとするのなら、その頃の彼の世界は正に混沌とした暗黒の時代だったのだ。
……全ては他の世界からの干渉のせいで。
実際にはこんな歴史の闇のような出来事が歴史書に赤裸々に書かれている事は少ない。真実を探りだすのは一つの立場からの書物で

は無理なのだ。
民俗学者であった父の言葉を聞きながら育った虹也には、そういう場合に、埋もれた事実をどこから見出すのか？という事について、一般の人間よりはやり方を心得ているはずだと自負していた。
「時代の痕跡は娯楽にこそはっきりと残る」
何かにつけ父はそう話し、民話や童歌、芸能、読み物伝統玩具、それらを時代の流れに嵌め込んでいく事で自ずと歴史的背景が浮かび上がって来ると言っていた。
当然虹也はこの場でも調べるのに苦労するだろうと予想していたし、そういう資料も持ち出して用意していたのである。
だが、呆れた事に、それは杞憂だった。異世界への干渉の歴史の多くは、隠されもせずに堂々と残されていたのである。
それは、いかにこの世界が異世界、虹也の生きた地球世界を軽視し、自らの行為を当然だと思っていたのかという証明でもあった。
正当性を主張する必要もない程、矮小な存在。それが彼らにとっての地球人類だったのである。

「やっぱりさ、お互いを理解するには会って話すのが一番だと思うんだよ」
「ありきたりで何一つ独自性は無い意見よね」
「……ん？」
虹也が歴史に埋もれた（というか全く埋もれてはいなかったが）故郷との関わりを探っている間に、なにやら文台（本を読むための台）を並べる兄妹二人の間で、なんらかの話が進んでいたようだ。
二人の視線が自分に向かっているのに気付いた虹也は、話題が自分に関わりがあるのかと、問うように視線を投げた。
「凄い集中力だったな」

「愚問ね、あの本の山を見れば論じるまでもないわ」
「えっと、ごめん。何の話かな？」
虹也の言葉に二人は揃って笑った。
「やっぱり何も聞いてなかったな？まあいいや。虹也はさ、今まで単一種族だけの場所で暮らしてたんだろ？」
「あ、うん、そうだよ、みんなその、ここで言う仲間族だった」
虹也は自分の物思いから意識を切り離して、出来たばかりの友人達に相対する。
「最近、我が国はさ、急速に移民が増えたせいで色々トラブルが多くてな、虹也も慣れて無いせいでトラブルに遭遇するかもしれないだろ」
「そうかもな、実際驚いてばかりだし」
虹也はいきなり遭遇した異種族の銀穂や、真剣に命が不安になった突然のバトルを思い浮かべた。
そういう物事は、何の心の準備も無しに遭遇したいものでは無い。それは確かだ。
「だからさ、うちの茶会に参加したらどうかな？というお誘いなんだけど」
「茶会って？」
虹也には少し古風な響きに聞こえるそれの趣旨を計りかねて、詳しい事を尋ねる。
「楽しいんだぜ、それぞれに家庭で自慢の料理や菓子を作り合ったり」
「お兄はまずは食い意地だからね」
「何言ってんだ！文化風土は食からって言うだろうが！」
二人の掛け合いに、調べ物の内容のせいで少し緊張していた気分が払拭され、虹也は笑いを漏らした。しかしふと、その顔が真顔になる。
「あのさ」
「ん？」

空気の変わった虹也の様子に訝りながら、誠志(さとし)は居住まいを正してちゃんと聞くぞという体勢で向き合った。
「俺とは今日知り合ったばかりじゃないか。それなのにそんなすぐ信用したりするのって不用心なんじゃないか？」
虹也は真剣にそう聞いた。なんだか自分は不信人物ですと言っているようにも取られそうだが、実際の話虹也は客観的に見て間違なく不信人物である。
「おいおい、俺の志望職を忘れたのか？調整官ってのはまず相手を知る所から始めるんだぜ？結論を出すのはその後だ。だから知る為に話すし、一緒に行動するんだ」
全く動じた風もなく、笑い飛ばすようにそう言ってのける誠志に、虹也は流石に呆れた。
他に同意を求めるように動かした視線の先に青華がいたが、彼女はいかにもしょうがないという表情を返しながらも、その口許には嬉しそうな笑みを浮かべている。
（実は似た者兄妹だろ！）
虹也は胸の内で激しいツッコミを入れたのだった。

「ほら、正式な文書が転送されて来たぞ」
東山が手渡した巻紙を、墨時はやや乱暴に受け取る。
「公文書だぞ」
やる気の無さそうな声で一応咎めたのは、墨時の不始末に巻き込まれる仕様の相棒だ。
「公文書破損は三か月三割の減棒だな」
東山がうんざりしながらも口頭説明をする。それが部下がなんらかの過失を犯した、或いは犯しそうな場合の正式な手順なのだ。
「破ってないでしょう！ほら！」

墨時は書面を広げてムキになって抗議した。
公文書というのは特殊な書面で、梳き紙に蝋を流し込み、文字形を紙自体に活版を押したように記録させて仮想の符とし、その上に普通にインクで文字を乗せる。
符術というのは使い捨ての術であるが、だからこそ一つ一つが偽造の出来ない唯一の徴を持っていて、それを利用した内容証明文書なのだ。
そして、公文書とは、符としての機能を持ちながらも決して発動されない術式という特殊な存在でもある。
「たかが身元不明者の調査に、こんなものが出て来る時点で不信なんですよ」
「山中捜査官」
「なんですか？」
「君とてもう理解しているのだろう？これは上層部からの勧告だ。この件を深く探るなという事だ」
墨時はグッと詰まった。彼とて軍人である以上は上官の命令は絶対なのだ。
「それは……しかし説明ぐらい」
「軍人は国家の僕（しもべ）だ。問いなどというものは許されない。それに悪い方に捉え過ぎだ。我々の予想が当たっていれば、単なる氏族のお家騒動では納まるまい。上が、いや、国が保護に動いているなら心強い話だろう」
しかし東山のその正論も、墨時の憂慮を晴らす事は出来なかった。むっとした顔のまま視線を合わせようともしない。
このような状態の時の墨時は必ず何かやらかす。それを知る東山は、更に言葉を重ねた。
「逆に考えて見るが良い。この公文書の存在は大きいぞ」
「コウの、あの坊やの存在を無かった事には出来ないって事でしょう」
「なるほど」

隣りで面白そうに事の推移を眺めていた墨時の相棒、彩華が、その意味を理解して声を漏らした。
「公文書は改竄出来ない。つまりはそこに書かれた事を国は認めざるを得ない。という話だな」
「確かにそれは利点ではあります。しかし氏族内の物事に行政府は手出し出来ないという不文律がある限り、その利点は意味を成さない。あの事件は最も守りの堅い所で起きて、しかも未解決だ。それが何を意味するか分かるでしょう？せっかく救われた者をこの手で死地に送り出すようなものです！」
「それは確かに懸念して当然でしょうな」
「内藤技官」
常に無く山中に同調をみせる内藤に、東山はいぶかしむような視線を向けた。なぜならこの男、決して他人に同調するような性格ではないからだ。
「国の宝ともいうべき氏族の主家を丸々失い、しかも帝をその心労で失いながら、何の成果も上げられず、あまつさえ他国からの圧力に屈し他国人を国民として受け入れる。そのような行政府が信用ならないのは当然、むしろいっそ国家をわたくしせんとする上層部にはご退陣願うべきと……」
「内藤技官！」
さすがに反逆罪に問われかねない。いや問われるであろう内容に、東山は慌ててその流れるような口上を止めた。
「なにか？私はただ山中捜査官の心中を語っただけですが？」
「そんな大それた事、考えてる訳ねえだろうが！」
「おや？外れましたか、かなり自信があったのですが」
東山はグッタリと彼専用の椅子に身を沈めた。
要するに内藤は山中を利用して自身の鬱憤を晴らしただけなのだ。
（俺はなぜここにいるのだろう？）
巨人族と言えば場所によっては神とも崇められる種族である。それが薄給で自らを養い、部下の暴走に胃を痛めている。

「ままならないものだ」
他者に聞き取れ無い声でそう呟くと、彼は自身の波打つ顎を撫でた。
心なしかその脂肪が薄くなった気がして、東山は更に悲しい気持ちになったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2291l/

月に虹が掛かる刻

2011年9月20日03時28分発行